

青年期における  
時間的展望とアイデンティティ形成

名古屋大学大学院教育発達科学研究科

石井 僚

## はじめに

*Cast a cold eye*                      冷厳な目を向けよ  
*On life, on death.*                      生と 死に。  
*Horseman, pass by.*                      馬上の者よ 過ぎて行け。

*W. B. Yeats (1865-1939)*

この詩句は、アイルランドの詩人 Yeats の最後の詩集に、"*Under Ben Bulbin*"（「ベンバルベン山の麓で」）というタイトルで収録されているものであり、また墓碑銘として墓石にも刻まれている。

翻って現代社会においては、生と死に冷厳な目が向けられているとは言い難い状況がある。特に、自分自身の生き方を決定していくことが求められる青年の間では、ニート、引きこもり、アパシーといった状態が横行している。また、核家族化や病院死の増加、テレビゲームなどにおける架空の死の経験などにより、死について冷静にしっかりと見つめる機会も乏しい。

本来青年期は、自分は何者かという問いに対する答えを見つけ、社会との関係を規定していく時期となる。そのためには、これまでの自分が積み重ねてきた過去、これからどのようにして生きていくのかという未来、そして今生きている瞬間である現在を統合していく必要がある。その際には、Yeats の詩句にあるように、生と死に、冷厳な目を向けることが求められるのではないだろうか。

青年期を過ぎて行くとき、青年はどのように生と死に冷厳な目を向けるのか。本論文では、青年期の発達課題とされるアイデンティティ形成と、過去、現在、そして死までの未来をどう捉えるのかについて、実証的に検討を行う。

# 目次

## 第1章 本論文の問題と目的

|                            |    |
|----------------------------|----|
| 第1節 青年期における時間的展望に関する研究と問題点 | 6  |
| 1. 時間的展望とは                 |    |
| 2. 青年期発達と時間的展望             |    |
| 3. 青年期発達と時間的展望に関する研究の今後の展望 |    |
| 第2節 本論文の目的と構成              | 15 |

## 第2章 時間的展望の概念と測定方法

|                      |    |
|----------------------|----|
| 第1節 時間的連続性尺度の作成（研究1） | 19 |
| 1. 問題と目的             |    |
| 2. 方法                |    |
| 3. 結果                |    |
| 4. 考察                |    |
| 第2節 時間意識尺度の作成（研究2）   | 29 |
| 1. 問題と目的             |    |
| 2. 方法                |    |
| 3. 結果と考察             |    |
| 第3節 時間的展望の概念整理       | 39 |

## 第3章 現在・過去・未来の時間的展望とアイデンティティ形成

|   |    |
|---|----|
| 第1節 時間的態度とアイデンティティ形成プロセスとの関連（研究3）                               | 42 |
| 1. 問題と目的  |    |
| 2. 方法   |    |
| 3. 結果   |    |
| 4. 考察   |    |
| 第2節 時間的態度および時間的指向性とアイデンティティ形成との関連——形成プロセスとプロダクトの両側面からの検討——（研究4） | 57 |
| 1. 問題と目的  |    |

|             |    |
|-------------|----|
| 2. 方法       |    |
| 3. 結果       |    |
| 4. 考察       |    |
| 第3節 本章の全体考察 | 75 |

#### 第4章 人生の終点を踏まえた時間的展望とアイデンティティ形成

|                                 |     |
|---------------------------------|-----|
| 第1節 人生の終点を考えることと時間的態度（研究5）      | 78  |
| 1. 問題と目的                        |     |
| 2. 方法                           |     |
| 3. 結果                           |     |
| 4. 考察                           |     |
| 第2節 人生の終点を考えることと時間意識（研究6）       | 94  |
| 1. 問題と目的                        |     |
| 2. 方法                           |     |
| 3. 結果                           |     |
| 4. 考察                           |     |
| 第3節 人生の終点を考えることとアイデンティティ形成（研究7） | 108 |
| 1. 問題と目的                        |     |
| 2. 方法                           |     |
| 3. 結果                           |     |
| 4. 考察                           |     |
| 第4節 本章の全体考察                     | 122 |

#### 第5章 総括的討論

|                                     |     |
|-------------------------------------|-----|
| 第1節 本論文を通じて得られた結果                   | 125 |
| 1. 本論文を通して得られた結果                    |     |
| 2. 青年期における時間的展望とアイデンティティ形成          |     |
| 第2節 本論文の意義                          | 130 |
| 1. 青年期の時間的展望とアイデンティティ形成に関する研究における意義 |     |
| 2. 青年期の支援における意義                     |     |

|                            |     |
|----------------------------|-----|
| 第3節 本論文で残された課題と今後の展望 ..... | 132 |
| 引用文献.....                  | 134 |
| 謝辞.....                    | 148 |

## 第 1 章

### 本論文の問題と目的

## 第1節 青年期における時間的展望に関する研究と問題点

自分は何者かという問いの探求、そして生き方の決定が求められる青年期においては、現在を見つめ、過去を振り返り、未来を展望することが必要である。なぜなら、人間は、過去から現在、そして未来へとつながる流れの中で生きており、その統合こそが、自分は何者であるか、自分がどのように生きていくのかを形作っていくと考えられるからである。木村 (1982) も、その著書「時間と自己」の中で、時間が時間として流れているという感じと、自分が自分として存在しているという感じとは、同じことであると述べている。時間的展望は、青年期において重要な、過去、現在、未来といった時間を心理学的に説明する概念である。

### 1. 時間的展望とは

時間的展望に関する心理学的研究が始まったのは、1930年代に入ってからとされる(都筑, 2007, 2011)。時間的展望 (time perspective) という言葉は、Frank (1939) によって初めて用いられた。その後 Lewin (1951 猪股訳 1979) が Frank (1939) を引用しながら、時間的展望を場の理論の中に位置づけ、「ある与えられた時に存在する個人の心理学的未来及び心理学的過去の見解の総体」(p. 86) と定義している。現在においてもこの定義が一般的に使用されている。

時間的展望は、個人の現在の行動を説明するために場の理論に組み込まれた概念である。Lewin (1951 猪股訳 1979) は、生活体と環境とが相互関連している1つの場の構造を生活空間と捉え、その構造が、ある一定時の行動を規定する条件の総体であるとしている。個人の行動は、全面的に現在の事態に依存するものであるが、現在の事態には時間的な広がりがあり、希望や願望、あるいは自分の過去の見解などによって影響されるとしている。総じて時間的展望は個人の現在の行動に影響を与えるものとして概念化がなされているのである。

### 時間的展望の次元

Lewin (1951 猪股訳 1979) によれば、心理学的生活空間内において、時間的展望は2つの次元を持つとされる。1つは長さ (scope) の次元、もう1つは現実性 (reality) の次元である。

前者はどの程度前のこと、もしくはどの程度先のことが、現在の個人の行動に影響を及ぼすかというものであり、後者は、事実と願望、希望と期待といったような違いを生むものであり、これもまた現在の個人の行動に影響を与えるものである。Lewin (1951 猪股訳 1979) が当初想定していた時間的展望の次元はこの2次元であった。

しかし研究の進展と共に、時間的展望には多くの側面が存在することが明らかとなる。Wallace (1956) は、長さの次元に加え、概念化された未来の中における組織化の程度として、一貫性の次元を提唱している。他にも、個人が未来に予想する出来事や経験の数といった密度の次元 (Kastenbaum, 1961)、過去、現在、未来のどの時間に対する志向性が強いかどうかという方向性の次元 (Klinsberg, 1967; Teahan, 1958)、あるいはそれらの時間がどの程度関連性を持って捉えられ、統合されているかという連続性の次元 (Cottle, 1967) などが提唱され、それぞれの測定方法も開発されている。都筑 (1982) は、こうした多くの研究を概観し、時間的展望の次元を、認知的側面と情緒的側面に分けて整理している。

### 時間的展望の発達

時間的展望は、生まれたときから個人が持っているものではない。Lewin (1951 猪股訳 1979) は、時間的展望の発達は、遠い未来と過去の事象が、徐々に現在の行動に影響を及ぼすようになると同時に、願望と実在との間の区別がよくなるようになることとしている。つまり時間的展望の長さの拡大と、現実と非現実の分化の増大である。また、こうした時間的展望の発達は、認知構造の変化の一類型とみなすことができるとし、発達の根本的側面の1つとして重視している (Lewin, 1951 猪股訳 1979)。

時間的展望の発達は、認知的能力の発達を基盤にしていると考えられる。Piaget (1946/1969) は、論理的思考の発達の一側面として時間概念の発達を検討し、およそ児童期にあたる具体的操作期において時間概念が獲得されていることを示した。また、発生的認識論 (Piaget, 1970 滝沢訳 1972) によれば、およそ11、12歳以降に迎える形式的操作期において、現実を可能性の中の1つとして捉えることができるようになることとされる。将来に関することをより現実性を伴って認識できるようになるため、未来が現在の行動に対して意識的に影響を持つようになると考えられる。個人の時間的展望は、認知的能力、特に論理的思考の発達に支えられながら、発達していくと考えられる。

### 時間的展望研究の領域



時間的展望は様々な領域と関連しており、心理学の中でも多様な分野において研究が進められてきた。その代表的な1つは、臨床心理学領域である。時間的展望に関する研究の最初期において、Israeli (1935) は、失業中の青年が持つ将来展望が、精神疾患患者と同様に悲観的であることを明らかにしている。都筑 (2007) は、この研究の背景には、Janet (1929/1955) や Minkowski (1933/1972, 1973) の行った精神病理学的な視点からの時間に関する考察があったと述べている。その後も Wallace (1956) の行った統合失調症患者の未来展望についての検討を筆頭に、最近においても、不安障害や自殺 (Rector, Kamkar, & Riskind, 2008), ネット依存 (Chittaro, & Vianello, 2013), 心的外傷後ストレス障害の治療 (Sword, Sword, Brunskill, & Zimbardo, 2014) といった特定の疾患に対しての研究や、難民の精神的健康 (Beiser & Hyman, 1997), ホームレスの抑うつ (Pluck, Lee, Lauder, Fox, Spence, Parks, 2008) といった特定の対象を扱った研究など、臨床領域において多くの研究がなされてきている。

臨床領域と同様に蓄積の多い領域が、動機づけの研究領域である。未来展望が動機づけを高めるとする Future Time Perspective Theory (Nuttin, 1984; Nuttin & Lens, 1985) が提唱されて以来、多くの研究が行われてきた。この理論に関しては既に Simons, Vansteenkiste, Lens, and Lacante (2004) によってレビューがなされている。それ以降のより最近の研究では、この理論に基づいて生徒の動機づけを縦断的に検討したものや (Schuitema, Peetsma, & van der Veen, 2014), 社会経済的地位も考慮に入れて学校での適応的行動との関連を検討したもの (Carvalho, 2015), キャリアの決定との関連を調整する感情状態の効果 (Jung, Park, & Rie, 2015) など、より詳細で複雑な影響についての検討が進められている。

時間的展望の持ち方は個人差変数であると同時に、様々な変数によって影響を与えられるものであり、その他多くの側面についても研究が進められている。そうした研究において世界的に多く用いられている尺度が、Zimbardo and Boyd (1999) の開発した Zimbardo Time Perspective Inventory (ZTPI) である。Zimbardo and Boyd (1999) は、時間的展望について、個人の経験を、過去、現在、未来という時間の枠組みに分離する認知プロセスから生じるもので、心理的時間を構成する基本的な側面としている。そして一貫した測定尺度をもって議論を行うべきであると主張し、ZTPIが開発された。日本 (下島・佐藤・越智, 2012) を含む各国においても翻訳版が作成され、同様の因子構造が確認されている。ZTPIの開発によって、その後多くの研究が蓄積されてきているが、近年では特に、バランスの取れた時間的展望 (Balanced Time Perspective) の重要性について実証が積み重ねられている (e.g.

Garcia & Ruiz, 2015; Shirai, Nakamura, & Katsuma, 2012; Stolarski, Matthews, Postek, Zimbardo, & Bitner, 2014; Stolarski, Vowinckel, Jankowski, & Zajenkowski, 2016)。

## 2. 青年期発達と時間的展望

時間的展望は、青年期発達にとって欠かせないものである。Erikson (1959 小此木訳 1973) のライフ・サイクル論によれば、青年期はアイデンティティの確立が発達課題となる時期である。アイデンティティとは、個人が自分の内部に斉一性と連続性を感じられることと、他者がそれを認めてくれることの、両方の事実の自覚であるとされる。都筑 (1993) は、アイデンティティの達成は、過去、現在、未来の時間的な流れの中での自己についての継続性や統合性の意識の上に初めて成り立つものであるため、その基礎には時間的展望の確立が必要であるとしている。また都筑 (2007) は、Erikson (1959 小此木訳 1973) の漸成図式において、青年期にはアイデンティティと同様、時間的展望対時間的展望の拡散が重要な発達課題とされていることを指摘し、時間的展望は青年期発達を論じる際に重要なものとしている。実際に、Erikson (1959 小此木訳 1973) の第 V 段階の部分症候の記述に基づいて作成された同一性混乱尺度 (砂田, 1979) には、時間的展望の混乱が含まれている。時間的展望は、アイデンティティと深く関係しており、青年期発達にとって重要な概念と考えられる。

先述した通り、論理的思考が発達する青年期は、時間的展望の獲得期といえる。白井 (1985) は、小学生、中学生、高校生を対象として調査を行い、将来に起こると思う事象とその年齢について尋ねた。その結果、想起された最も遠い将来の事象までの距離は、年齢とともに長くなっていくのに対し、想起された各事象までの距離の中央値は、小学生より中学生、高校生の方が短く、特に小学生と中学生の間には大きな差が見られた。また、白井 (1985) は、児童期よりも青年期の方が、現在と未来とのつながりを持っていることも指摘している。都筑 (2008) が小学校 4 年生から中学校 2 年生を対象に行った縦断研究からも、思考の発達によって、自分や周囲を現実的、客観的に捉えることができるようになることが示されている。認知能力の発達を基盤として、青年期に時間的展望が獲得され、アイデンティティの探求が進むと考えられる。

時間的展望とアイデンティティとの関連については、多くの研究が積み重ねられてきた。そうした研究の多くは、Marcia (1966) のアイデンティティ・ステータスの観点からなされ

ている。アイデンティティ・ステイタスとは、自分のアイデンティティに関する事柄について、積極的に関与できると感じられるもの（コミットメント）を持っているか、およびコミットメントの様々な選択肢について思案したか（探索）という基準によって、達成、早期完了、モラトリアム、拡散という4つの地位に分類するものである。Rappaport, Enrich, and Wilson (1985) は、達成地位と早期完了地位は、拡散地位やモラトリアム地位に比べて未来への指向性が高いことを見出している。都筑 (1993) も、達成地位の青年は、過去・現在・未来を統合しており、未来指向的であったとしており、また達成地位のそうした未来展望は肯定的であることも示されている (都筑, 1994)。未来の機会を探索し、目標を定め、それを達成するとき、同時にアイデンティティは発達するとされる (Nurmi, 1991)。近年の研究においても、Laghi, Baiocco, Liga, Guarino, and Baumgartner (2013) では、達成地位は未来指向的で肯定的な過去展望を持つ一方、拡散地位の過去は否定的であると同時に、未来への指向性は低く、運命論的な考え方をしがちであることが示されている。Shirai, Nakamura, and Katsuma (2012) では、バランスの取れた時間的指向性がアイデンティティ確立と関連するとしている。これまでの研究では総じて、アイデンティティ達成地位において各時間の統合が進んでおり、未来指向的で肯定的な展望を持っていることが示されている。人生の選択肢や目標、計画等に関する決定を現実的に行う能力が向上することで、青年の未来への意識は増加していくと考えられており (Greene, 1986; Poole & Cooney, 1987)、認知能力の発達に伴う未来指向的かつ肯定的な将来展望が、アイデンティティ確立の基礎となっていると考えられる。

### 3. 青年期発達と時間的展望に関する研究の今後の展望

#### アイデンティティ形成のプロセスとプロダクト

中間 (2011) は、アイデンティティに関する研究がこれまで、アイデンティティ達成地位 (Marcia, 1966) やその程度 (Rasmussen, 1964) について多く検討されてきたが、近年では、アイデンティティがいかに形成されるかというプロセスへの関心 (杉村, 2005) も高まっていると述べている。アイデンティティ・ステイタスに関しては、アイデンティティ達成地位から別の地位への移行が起こることが示されており (Stephen, Fraser, & Marcia, 1992)、アイデンティティの探索は繰り返し起こることが明らかとなっている。つまり、アイデンティティ・ステイタスは、繰り返されるアイデンティティ探求のプロセスの途上を表してい

るにすぎないと考えられる。それにも関わらず、アイデンティティ・ステータスのモデルでは、個人を分類することに主眼が置かれているため、各ステータスにおけるコミットメントや探求の状態について詳細な検討ができない。青年期の発達課題であるアイデンティティの確立と、時間的展望との関係を理解するためには、より詳細な形成プロセスと時間的展望との関連を検討していく必要がある。

アイデンティティの形成プロセスに関しては、いくつかの代表的な理論が提唱されている。1つは、Luyckx, Goossens, and Soenens (2006) および Luyckx, Goossens, Soenens, and Beyers (2006) の提唱したアイデンティティ形成の二重サイクルモデルである。この理論においては、アイデンティティの発達プロセスは、コミットメント形成のために多様な選択肢を探索するプロセスと、既に選択した対象についてさらに検討し、コミットメントを深めていくプロセスからなるとされる。そのそれぞれはさらに、広い探求とコミットメント形成、深い探求とコミットメントとの同一化に分けられている。その他にも代表的な理論として、アイデンティティ形成の3次元モデル (Crocetti, Rubini, & Meeus, 2008) などがある。このモデルでは、コミットメントを形成し、その形成したコミットメントを維持するために深い探求を行い、さらにそのようにして一旦形成したコミットメントを見直して再構成するプロセスがあると仮定される。つまり、コミットメント、コミットメントに対する深い探求、コミットメントの再考という3側面からなるサイクルとして、アイデンティティの形成プロセスを捉えている。こうした代表的な理論に基づき、時間的展望とアイデンティティ形成プロセスとの関連を明らかにしていくことが必要と考えられる。

青年期発達と時間的展望について、アイデンティティの観点から検討する際には、アイデンティティの形成プロセスのみでなく、そのプロセスを経て生み出されるプロダクトと合わせて検討する必要がある。先述してきた通り、これまでのアイデンティティ研究では「できあがった結果としての」斉一性・連続性の感覚を捉えてきた一方、近年のプロセスやメカニズムを捉えようとする研究では、斉一性・連続性の感覚を維持していく「営みあるいは働き」を捉えている (杉村, 2008)。前者はプロダクト、後者はプロセスとして弁別して捉えられている (畑野・杉村・中間・溝上・都筑, 2014; 溝上, 2008)。しかし、後者のようなアイデンティティの形成プロセスは、前者のプロダクト、つまり斉一性・連続性の感覚に応じて異なる意味や働きを持つ可能性がある。例えば、斉一性・連続性の感覚がまだ不明確な段階ではいろいろな選択肢を模索することは肯定的な意味を持つが、明確になってきた段階では自身の決定が揺らぐなど、異なった働きを持つかもしれない。Schwartz (2007)

も、前者のようなプロダクトと、後者のようなプロセスの両側面からアイデンティティを理解していくことの重要性を指摘している。つまり、アイデンティティ形成のプロダクトとプロセスの両側面から検討することで、青年期発達と時間的展望の関連がより明確にできると考えられる。

### 未来への偏重と現在や過去

青年期は、認知発達に支えられながら、進学、就職、結婚といった関心事を持つ文脈によって未来展望が広がり、またそうした未来展望が、アイデンティティ形成等青年期発達にとって重要であることが示されてきた。しかしその一方で、時間的展望研究は未来にばかり関心を向けており、研究対象が未来に偏重していることが古くから現在に至るまで指摘され続けている (Goldrich, 1967; 石川, 2014; Zimbardo & Boyd, 1999)。Lewin (1951 猪股訳 1979) の定義にもある通り、未来のみでなく、過去を含め、検討を進めていく必要がある。

過去に関する研究は、未来に関する研究に比べて多くはないものの、一定の蓄積がなされてきている。青年期は未来指向的であることが指摘されながらも、過去に思いを巡らせることも多いことが指摘されており (Mello, Worrell, & Andretta, 2009)、このような過去の想起が未来展望と関連することも明らかにされている (日瀨・齊藤, 2007)。さらに石川 (2014) では、過去の捉え方によって、目標意識の特徴に差異が見られることが明らかにされている。しかし、過去の時間的展望が、青年期発達とどのように関わるのかについては未だ明確にされていない。やまだ (2000) は、物語としての自己という見方について論じる中で、物語を語り直すことによって過去は再構成されることや、アイデンティティの概念と関連づけられることを指摘している。また白井 (2001a) も、過去を回想することが進路選択に影響を及ぼすこと、またそこにアイデンティティが関係していることを示している。今後はより直接的に、過去の時間的展望がアイデンティティや青年期発達とどのような関連を持つのかについて明らかにしていく必要があるだろう。

現在という時間についてはさらに議論が必要な状態と思われる。そもそも Lewin (1951 猪股訳 1979) の定義には、心理学的過去と心理学的未来については記述があるものの、現在という時間については言及されていない。しかし、Lewin (1951 猪股訳 1979) が定義をする際に引用をしている Frank (1939) では、未来展望や過去展望を持つことは、現在を起点としていることが指摘されており、白井(2008) や都筑 (1999) も同様の言及をしている。Lewin (1951 猪股訳 1979) の定義に照らしても、現在の時間についてどのような態度を持ってい

るかなどが、現在の行動に影響を与えるのは想像に難くない。実際に白井 (1994a) の作成した時間的展望体験尺度の 1 下位尺度には現在の充実感という現在の時間に関する態度を測定するものが含まれている。未来や過去の起点であり、我々が体験できる唯一の時間である現在は、時間的展望研究において重要な 1 要素であると考えられる。

現在に関する時間的展望の研究が十分に進展してこなかった理由として、概念や測定方法に関する問題が起因している可能性がある。例えば、先述した通り、青年が未来指向的であるとする研究は多く見られるが、こうした指向性については、個人が過去、現在、未来のどれか 1 つの時間に対する指向性のみを持つとする研究 (白井, 1997) と、複数の時間に対する指向性を持ち得るとする研究 (河野, 2003) がある。前者のような立場に立てば、青年期が未来指向的だとした場合、その他の指向性は検討することができない。こうした概念定義の相違を整理し、未来ばかりでなく現在にも焦点を当てて検討する必要がある。また、測定方法に関しても未熟さがあると思われる。時間的展望研究において世界的に広く用いられている ZTPI (Zimbardo & Boyd, 1999) では、現在に関する下位尺度が 2 つ含まれてはいるものの、その 2 つともが否定的な側面に焦点を当てている。しかし園田 (2003) や白井 (1997) では、現在の時間的展望の肯定的な意味や働きも見出されている。

現在に関する時間的展望の肯定的側面は、ごく最近の研究によって少しずつ着目されるようになってきている。Vowinckel, Westerhof, Bohlmeijer, and Webster (2015) は、経験できる唯一の時間である現在に着目する意義について論じた上で、その測定尺度を開発している。また Worrell, Mello, and Buhl (2013) も、時間的展望の態度的側面について、現在という時間に対する肯定的態度と否定的態度の両方を測定することのできる尺度を開発している。また、尺度の開発だけでなく、Taber and Blankemeyer (2015) は実際に、職業におけるアイデンティティと現在という時間を含めた時間的展望についての関連を検討している。その結果、アイデンティティの拡散地位は、過去の否定的な展望、未来への指向性の低さと関連している一方、達成地位は、現在を受け入れ楽しむといった肯定的な現在への見方と関連していることが示されている。過去、現在、未来それぞれの時間的展望と、青年期発達との関連について検討を進めていくことが、今後の課題としてあげられる。

### **終点を踏まえた人生全体の時間という視点**

青年は未来の中でも比較的近い未来について考えることが一般的とされる一方 (Nurmi, 1989), 人間は生の究極の到達点である死の日まで、自分に与えられた時間をいかに生きて

いくのかを考えることが必要とされる (デーケン, 2001)。白井 (2001b) は、人間は時間的な広がりができはじめるなかで、1 回しかない現在のかげがえのなさに気が付くとし、人生の有限性や死の認識は、生きる意味や今を生きることの大切さについても考えさせるとしている。死までの未来というより大きくて広い展望を持つことが、青年の生き方、つまりアイデンティティ形成といった青年期発達に関わると思われる。

死までの時間的展望という見方は、これまでの時間的展望研究でも扱われてきたものである。Cottle (1976) はライン・テストという測定方法を開発している。この方法は、時間の流れを表す 1 本の横線に、研究参加者が、産まれたとき、死ぬとき、そして現在の境界について印をつけてもらうというものであり、自分自身の死までの時間的展望の測定が試みられていることが分かる。他にも、特に中年期以降においては、死までの時間的展望に関する研究が積み重ねられてきている。なぜなら、中年期以降では身体の衰え等から死への気付きが起こり、あとどれくらい生きることができるかという視点を持つためである。そのため中年期は、それまでの未来指向から現在指向へと変わる時間的展望の転換期とされている (日瀧・岡本, 2008; 白井, 1997)。一方で、青年期を対象とした実証的研究は見当たらないのが現状である。

しかし、死までの時間的展望という視点は青年期においても検討の必要がある。上述したデーケン (2001) や白井 (2001b) に加えて、Carstensen (2006) は、Socioemotional Selectivity Theory を提唱している。この理論においては、人間は時間の有限性を知覚すると、人生の中で満足や達成、感情的な意味を見出すことに高い重要性を置くようになるとされる。死までの時間的展望は、人生の有限性を踏まえた時間的展望であり、自分自身の生き方について考えることが課題である青年に対して、発達的な影響を与えると考えられる。ハイデガーの「存在と時間」を中心的に分析した魚谷 (2002) も、死へとかわる存在を自覚することで自己は本来的自己となると述べている。自分自身の死までの時間的展望を持つこととアイデンティティ形成等の青年期発達との関連について、心理学的に実証していくことが今後の課題の 1 つと考えられる。

## 第2節 本論文の目的と構成

本章第1節で述べた通り、青年期の時間的展望とアイデンティティに関するこれまでの研究には、主に3つの問題点がある。1つは、アイデンティティ形成のプロセスとプロダクトの両側面から検討がなされてきていないこと。2つは、未来の時間的展望ばかりに焦点が当てられ、過去や現在については十分に検討が行われてきていないこと。そして3つは、終点を踏まえた人生全体の時間という視点が検討されてきていないことである。そのため本論文では、アイデンティティ形成のプロセスおよびプロダクトの両側面と、現在、過去、そして死までの未来というすべての時間的展望を取り上げて検討を行う。

本論文においては、青年期の中でもその後期にあたりとされる大学生、短期大学生、専門学校生を対象とする。青年期について Erikson (1968 西平・中島訳 2011) は、社会的な義務や責任が猶予された状態で、様々な役割実験を通して自分の生き方を模索する時期としており、この時期を心理社会的モラトリアムと呼んでいる。そしてこうした心理社会的モラトリアムは、高学歴化が進んだ先進国において青年期後期の一般的傾向とされている (下山, 1992)。アイデンティティの形成は、自分と自分を取り巻く文脈との相互調整プロセスであり (Bosma & Kunnen, 2001)、様々な役割実験を通じた模索が許容される文脈である青年期後期は、相互調整にとって重要な時期と考えられる。そこで本論文では青年期後期を対象として時間的展望とアイデンティティ形成について検討を行う。

本論文の構成は以下の通りである。未来の時間的展望ばかりに焦点が当てられ、過去や現在については十分に検討が行われてきていないという問題点は、本章第1節でも述べた通り、時間的展望の測定方法や定義の仕方に依るところが大きいと考えられる。そのため、まず初めに、時間的展望についての概念整理および測定方法の作成を行う。第2章では、時間的展望の1下位概念である時間的指向性を時間的連続性と時間意識に分け、それぞれの測定方法を作成する。第1節では時間的連続性尺度を作成してその妥当性および信頼性を検討し、第2節では時間意識尺度を作成してその妥当性および信頼性を検討する。そして第3節において、それらを含めた、本研究で扱う時間的展望の概念整理を行う。

次に、第3章においては、アイデンティティ形成のプロセスとプロダクトの両側面から検討がなされてきていないという問題点を乗り越えるため、先述したアイデンティティ形成の二重サイクルモデル (Luyckx, Goossens, and Soenens, 2006) およびアイデンティティ形成の3次元モデル (Crocetti, Rubini, & Meeus, 2008) に基づいて検討を行う。第1節において



は、アイデンティティ形成の二重サイクルモデルに基づき、時間的態度とアイデンティティ形成のプロセスとの関連について検討を行う。第2節においては、アイデンティティ形成の3次元モデルに基づき、時間的態度および時間的指向性と、アイデンティティ形成のプロセスおよびプロダクトとの関連について検討を行う。そして第3節において、これら2つのモデルを用いて得られた知見から、過去、現在、未来すべての時間的展望とアイデンティティ形成のプロセスおよびプロダクトとの関連について考察する。

そして、第4章においては、終点を踏まえた人生全体の時間という視点が検討されてきていないという問題点を解決するため、死について考える課題に取り組みさせることで、終点を踏まえた人生全体の時間について検討する。第1節においては、死について考えることが青年の時間的態度にどのような影響を及ぼすのかについて検討を行う。第2節においては、第1節で明らかとなった影響の個人差について、時間意識の観点から検討を行う。第3節においては、死について考えることが、青年のアイデンティティ形成プロセスにどのような影響を及ぼすのかについて検討する。そして第4節では、これらの知見から、終点を踏まえた人生全体の時間という視点を持つことが、アイデンティティや時間的展望の確立といった青年期の発達課題にとってどのような意味を持つのかについて考察する。

最後に、第5章において、これまでの内容を総括し、本論文で明らかにされた結果を整理する。そうした結果に基づき、本論文が時間的展望やアイデンティティ形成を中心とした青年期発達に関する研究にもたらす意義、および応用的、実践的意義について論じる。また、本論文の限界点と今後の展望について議論を行う。

なお、研究1～7は、それぞれ以下を加筆・修正したものである。

【研究1】石井 僚 (2015). 時間的連続性尺度の作成 青年心理学研究, 27, 39-47.

【研究2】石井 僚 (2015). 時間的指向性に関する概念整理の試み——時間意識尺度の作成—— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 62, 67-74.

【研究3】Ishii, R. (2016). The relationship between time attitude and identity formation. In contributed symposium. Chishima, Y., Ishii, R., Mello, Z., Frank, W., Konowalczyk, S., and Shirai, T. Cross-Cultural Considerations for Time Attitudes: Perspectives from the United States, Germany, and Japan. The 3rd International Conference on Time Perspective.

【研究4】石井 僚 (2016). 時間的展望とアイデンティティ形成との関連——形成プロセスとプロダクトの両側面からの検討—— 発達心理学研究, 27, 189-200.

- 【研究 5】石井 僚 (2013). 青年期において死について考えることが時間的態度に及ぼす影響 教育心理学研究, 61, 229-238.
- 【研究 6】Ishii, R. (2015). Present-orientation and the outcome of contemplating death. *Time & Society*. Advance online publication. doi:10.1177/0961463X15604534
- 【研究 7】石井 僚 (2016). 青年のアイデンティティと死について考えることの効果 日本発達心理学会第 27 回大会

## 第 2 章

### 時間的展望の概念と測定方法

## 第1節 時間的連続性尺度の作成（研究1）

### 1. 問題と目的

青年期は時間的展望の獲得期であり、多くの研究がなされてきた。時間的展望とは、ある一定の時点における個人の心理的過去および未来についての見解の総体 (Lewin, 1951 猪股 1979) のことであり、青年期の発達課題である自我同一性確立の基礎とされる (都筑, 1994; 渡邊・赤嶺, 1996)。自己評価 (山本, 2011) や仮想的有能感 (杉本・速水, 2012)、レジリエンス (大石・岡本, 2009) などとの関連が検討されていたり、臨床事例においても時間的展望を手がかりとして考察がなされたりしている (山本, 2008; 河野, 2003)。時間とは自己の形式であるという木村 (1982) の主張からも、時間的展望の持ち方は、青年の自己の在り方に迫ることのできるものと考えられる。

その中でもとりわけ、時間的連続性は青年期において時間的展望の重要な1側面である。時間的連続性とは、自分の過去・現在・未来がつながっているという実感 (河野, 2003) のことであり、白井 (1994a, 1995) の時間的展望をめぐる概念整理の中では、時間の流れる速さやその方向性、連続性などに関する評価や判断と定義される狭義の時間知覚の1つに分類され、専念、焦り、時間的展望の混乱や拡散、時間不安などとかかわるとされている。また、時間的連続性は青年期の発達課題である自我同一性の基礎に位置づけられる基本的信頼感との関連も指摘されている (谷, 1998)。さらに村田 (2008) は、臨床的な問題を時間的連続性から捉えることの重要性を指摘しており、実際に河野 (2003) では時間的連続性を1軸として青年期の2事例が考察されている。青年期の発達課題や臨床心理学的実践とも関連が深い時間的連続性は、時間的展望の中でも青年期において特に重要な下位概念といえる。

時間的連続性は、過去と現在の連続性および、現在と未来の連続性の2つから成ると考えられる。河野 (2003) の事例では、時間的連続性が認識されていく過程において、過去の自分と現在の自分を比較して、過去と現在が関連性を持つものとして認識、整理、言語化されること、また現実にして未来を展望したり、近い未来から現在の行動を統制したりすることが報告されている。大学生活の過ごし方について調査を行った溝上 (2009) においても、学生の1つのタイプとして将来展望と日常、つまり未来と現在とをよりつなげている学生が報告されており、奥田 (2002a) においては、過去展望が現在の行動に影響を与え

ていることが示されている。また、こうした過去から現在までの連続性と現在から未来への連続性は、関連を持つものと考えられる。河野 (2003) の事例においてこれら2つの認識は時期としてはほぼ同じくして現れており、大橋・鈴木 (1988) では、過去を豊かに展望できない者は、自己の将来を豊かに思い描くことができないとされている。こうした知見からも、時間的連続性は、過去と現在の連続性および、現在と未来の連続性から成り、またそれらの間には正の相関関係が想定される。

青年の時間的連続性は検討する必要性が示されている一方、概念的に想定される構造を持った適切な尺度は見当たらない。谷 (1998) において作成された尺度には「基本的信頼・時間的連続性」という下位因子がみられるものの、その項目には Beck, Weissman, Lester, and Trexler (1974) の絶望感尺度の翻訳と白井 (1994a) の時間的展望体験尺度の項目が用いられている。時間的展望体験尺度は、我が国における時間的展望研究には頻回に利用される尺度であるが、過去・現在・未来に対する感情的評価のことである時間的態度 (白井, 1994a) を測定するものであり、時間的態度は時間的連続性とは異なる概念である (白井, 1994a; 1995)。過去、現在、未来それぞれについての感情的評価と、自分自身の未来に関するネガティブな予期と定義される絶望感の測定 (谷, 1998) によっては、過去と現在の連続性および現在と未来の連続性は測定できない。また、国外で最も頻回に用いられるものとして Zimbardo Time Perspective Inventory (Zimbardo & Boyd, 1999) が開発されており、日本語版も作成されている (下島・佐藤・越智, 2012)。しかしこの尺度に関しても、未来・現在快樂・現在運命・過去肯定・過去否定という下位尺度からも、過去・現在・未来をそれぞれ捉えているのみであり、それらの連続性は測定されていない。

白井 (1997) の時間的指向性質問項目に関しては、時間的連続性の一部を測定していると考えられる。時間的指向性質問項目とは、「あなたにとって一番大切な時は次のうちいつですか」と尋ねて、過去・現在・未来のうちから1つ選択させ、その時を選択した理由、また他のものを選択しなかった理由を書かせる方法であり、選択された時間とその理由に関する記述から、その時間と他の時間とのつながりを判断して5つのタイプに個人を分類する。そもそも時間的指向性とは、過去・現在・未来の相互関係についての信念体系による過去の過去・現在・未来の重要性の順序づけ (白井, 1997) と定義される時間的展望の1下位概念であり、時間的連続性とは異なる概念であるものの、時間的指向性質問項目による分類には、時間的連続性の一部が捉えられていると考えられる。

しかし、この質問項目において分類されているのは現在と未来の連続性についてのみで

あり、過去と現在の連続性については測定されていない。その理由として白井 (1997) は、そもそも過去を重視する人の数が少ないことを挙げている。一方で村田 (2009) や柏尾 (1998a; 1998b) では、時間的連続性は他者との関係形成と関わるものとされており、愛着関係との関連も指摘されている。先述した自我同一性や他者との関係形成において、過去と現在の連続性はその根幹を成す重要なものと考えられる。過去、現在、未来の中から重要な時間を1つ選択するという方法で過去を選択する青年は少ないが、あらかじめ過去と現在がつながっている感覚を尋ねる項目を用意し、それらに対して回答を要求することで、過去と現在の連続性は測定することが可能と思われる。また、河野 (2003) や溝上 (2009) から、連続性の認識には強弱といった程度の範囲が想定されるが、時間的指向性質問項目のように質的な分類を行うことではその程度を量的に測定できない。そこで本研究において、過去と現在の連続性および現在と未来の連続性の双方を量的に測定することのできる尺度を作成する。

自分の過去と現在、現在と未来がつながっているという実感は、事例や調査で得られた記述から尺度項目を作成して尋ねることによって測定できると思われる。白井 (1997) においては、時間的指向性質問項目に対する調査参加者の実際の記述と、時間的なつながりの有無の判断が記されており、河野 (2003) においても、実際の面接過程に対して時間的連続性の考察がなされている。時間的なつながりの判断に利用された調査参加者の記述と、面接過程から判断された時間的連続性に関わる研究協力者の言動や認識から項目を作成すること、加えてそれらの項目が時間的なつながりを測定している項目と考えられるか、第三者による評定を行うことで、尺度項目の内容的な妥当性が担保できると考えられる。

時間的連続性尺度の妥当性は、時間的指向性質問項目 (白井, 1997) との関連を検討することによって検証可能と考えられる。時間的指向性質問項目において現在と未来のつながりが認められる群は、そうでない群に比べて、本研究で作成した尺度の現在と未来の連続性の得点が高くなると考えられる。過去と現在の連続性に関しても、現在と未来の連続性と同様の手続きによって項目の選定を行っているため、現在と未来の連続性の妥当性が示されることで、一定の妥当性が示されると考えられる。また、現在と未来の連続性と、過去と現在の連続性には正の相関関係が想定されるため、過去と現在の連続性得点についても、時間的指向性質問項目によって時間的なつながりが認められる群は、そうでない群に比べて高くなると考えられる。

時間的連続性尺度の作成に当たっては、時間的展望体験尺度 (1994a) との関連を検討す

ることで、時間的態度との弁別的妥当性、また収束的妥当性を検討する必要があるだろう。時間的展望体験尺度は、未来に対する時間的態度である目標指向性と希望、現在に対する時間的態度である現在の充実感、過去に対する時間的態度である過去受容の4下位尺度から成る。目標を指向するためには、現在と未来の連続性が認識されている必要があるため、現在と未来の連続性と目標指向性との間には正の相関が予想される。希望に関しても同様ではあるが、現在を否定し、現状とはかけ離れた希望を未来に抱く人の存在を考えれば、現在と未来の連続性と希望の相関関係は、より具体性のある目標指向性との相関関係よりも弱いものになると予想される。また、過去と現在の連続性が認識されていなければ、過去を受容することはできないと考えられる。そのため、過去と現在の連続性と過去受容との間にも正の相関関係が予想される。

以上の検討を通して、本研究では時間的連続性尺度の作成と、その信頼性および妥当性の検討を行うこととする。妥当性に関しては、探索的因子分析を行うことによって尺度構造の妥当性を、時間的指向性質問項目および時間的展望体験尺度との関連を検討することによって基準関連妥当性を確認する。信頼性に関しては、内的一貫性の検討および再検査法によって行う。

## 2. 方法

### 調査協力者

A 県内の国立大学1校および私立大学4校の学生計335名。その内、欠損値を含むデータを除いた308名(男性123名、女性182名、性別不明3名；平均年齢19.92歳、年齢範囲18～23歳)を因子分析の分析対象とした。時間的指向性質問項目との関連の検討には、両尺度へ不備なく回答が得られた292名(男性114名、女性173名、性別不明5名；平均年齢20.00歳、年齢範囲18～24歳)を、同様にして時間的展望体験尺度との関連の検討には310名(男性119名、女性186名、性別不明5名；平均年齢19.96歳、年齢範囲18～24歳)を、再検査信頼性の検討には3週間後の調査にも不備なく回答の得られた35名(男性14名、女性19名、性別不明2名；平均年齢20.14歳、年齢範囲18～23歳)を分析対象とした。

### 手続き

時間的連続性尺度の項目を作成するため、白井(1997)の時間的指向性質問項目の分析結

果にみられる記述例から、時間的なつながりの有無を判断するのに使用可能と考えられる記述を抜粋した。そうした記述例や河野 (2003) の事例を参考にして合計 22 項目を作成した。次に、本研究の主旨について知らない心理学を専攻する大学院生 2 名に、作成された 22 項目が時間的なつながりを測定している項目と考えられるか、「1 そう思わない」から「5 そう思う」までの 5 件法で回答を求めた。その結果、「3 どちらともいえない」を下回る得点の項目は見られなかったため、それら全 22 項目を時間的連続性尺度の暫定項目とした。教示は「以下の項目について、あなたがどのように考えているのか「あてはまらない (1 点)」から「あてはまる (5 点)」までのうち、自分に最も当てはまると思う数字に○をつけてください。」とし、「1 あてはまらない」「2 どちらかといえばあてはまらない」「3 どちらともいえない」「4 どちらかといえばあてはまる」「5 あてはまる」の 5 件法で回答を求める形式とした。

これらの作成した項目を用いて信頼性、妥当性を検討して尺度を作成するため、質問紙調査を行った。再検査法による信頼性の確認も行うため、質問紙調査は 2 回、大学の講義時間の一部を使い、著者が集団で一斉に実施した。調査は無記名で実施され、回答は任意であること、いつでも中断できること等をフェイスシートに明記した上、口頭での説明も行った。また、1 回目と 2 回目の回答を照合するために個人情報の一部の記入を求めたが、その目的、そして拒否が可能であることも明記し、説明を行った。なお、学籍番号と携帯電話番号のそれぞれ下 3 ケタ、下 4 ケタのみを記入する形式をとることで、個人を特定できないよう配慮した。

## 調査時期

2013 年 6 月から 7 月。1 回目と 2 回目の調査の間隔は 3 週間であった。

## 調査内容

**時間的連続性尺度** 先述した手続きによって著者が作成した 22 項目を時間的連続性尺度の暫定項目として用いた。項目の回答形式は「1 あてはまらない」から「5 あてはまる」までの 5 件法で、得点が高いほど時間的連続性を持つことが示されるように得点化した。

**時間的指向性質問項目** 「あなたにとって過去・現在・未来のうち最も大切な時間はいつですか。その理由も書いて下さい。」と教示し、大切な時間を過去・現在・未来のうちから 1 つ選択させ、その理由を記述するよう求めた。白井 (1997) では、時間的態度との弁別



性による構成概念妥当性が確認されている。白井 (1997) での分類方法に従い、選択された時間と記述の内容から、ポジティブな未来指向・ポジティブな現在指向・ネガティブな未来指向・ネガティブな現在指向・過去指向の 5 タイプのうち 1 つのタイプに個人を分類した。ここでの「ポジティブ」とは時間的なつながりを持つことを、「ネガティブ」とは時間的なつながりを持たないことを意味している。

**時間的展望体験尺度** 未来に対する時間的態度を測定する「目標指向性」と「希望」、現在に対する時間的態度を測定する「現在の充実感」、過去に対する時間的態度を測定する「過去受容」の 4 下位尺度、計 18 項目。目標指向性は「私には将来の目標がある」など 5 項目、希望は「私の将来には希望がもてる」など 4 項目、現在の充実感は「毎日の生活が充実している」など 5 項目、過去受容は「私は自分の過去を受け入れることができる」など 4 項目からなる。白井 (1997) では本尺度の内的整合性による信頼性と構成概念妥当性が確認されている。項目の回答形式は「1 あてはまらない」から「5 あてはまる」までの 5 件法で、得点が高いほど時間的態度が肯定的であることが示されるように得点化した。

### 3. 結果

#### 時間的連続性尺度の構成

1 回目の調査への回答を用いて、時間的連続性尺度の暫定 22 項目の平均値と標準偏差を算出し、度数分布も参考にして、識別力が低いと判断された 9 項目を削除した。その後、残った 13 項目に対して一般化した最小二乗法による因子分析を行ったところ、初期の固有値は、第 1 因子から 3.82, 1.45, 1.17, 1.12, ...であった。次に、固有値の減少状況と解釈可能性の観点から 2 因子を仮定し、一般化した最小二乗法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果から、どちらの因子にも負荷量が低い 3 項目を削除した 10 項目に対して、再度、一般化した最小二乗法・Promax 回転による因子分析を行った。最終的な 10 項目の因子負荷量と記述統計量を Table 1-1 に示す。第 1 因子の寄与は 2.59 であり、第 2 因子への寄与は 2.23 であった。第 1 因子には「未来があるから頑張ることができる」、「未来に向かって今生きている」などの 6 項目の負荷量が高く、第 2 因子には「現在は過去の積み重ねである」、「過去があるから今がある」などの 4 項目の負荷量が高かった。第 1 因子に負荷量の高い項目はすべて現在と未来のつながりについての内容であり、第 2 因子に負荷量の高い項目はすべて過去と現在のつながりについての内容であったため、第 1 因子を「現在と

Table 1-1  
時間的連続性尺度の因子分析結果と記述統計量 (N=308)

|                             | F1         | F2         | Mean | SD   |
|-----------------------------|------------|------------|------|------|
| 16. 未来があるから頑張ることができる。       | <b>.78</b> | -.15       | 3.57 | 0.97 |
| 15. 未来に向かって今生きている。          | <b>.73</b> | -.03       | 3.79 | 0.98 |
| 12. 未来は、現在の私の行動に影響を与えている。   | <b>.51</b> | -.01       | 3.31 | 1.09 |
| 13. 将来に向けて、現在行っていることがある。    | <b>.50</b> | -.01       | 3.54 | 1.06 |
| 17. 今は将来のためのステップである。        | <b>.49</b> | .23        | 3.81 | 0.93 |
| 21. 今を大切にしていると未来もよくなる。      | <b>.42</b> | .14        | 4.00 | 0.89 |
| 2. 現在は過去の積み重ねである。           | -.06       | <b>.72</b> | 3.95 | 0.93 |
| 9. 過去があるから今がある。             | -.02       | <b>.72</b> | 4.09 | 0.82 |
| 10. 現在のあり方は過去のあり方に影響を受けている。 | -.07       | <b>.49</b> | 3.94 | 1.02 |
| 6. 過去は現在のためのステップであった。       | .21        | <b>.49</b> | 3.58 | 1.05 |
| 因子間相関                       |            |            | .52  |      |

未来の連続性」因子，第2因子を「過去と現在の連続性」因子と命名した。因子間相関は.52であった。それぞれ負荷量の高い項目群で下位尺度を構成し， $\alpha$ 係数を算出したところ，現在と未来の連続性が.75，過去と現在の連続性が.68であった。

### 時間的指向性質問項目との関連

白井 (1997) の分類方法に従い，個人を5つのタイプに分類した。その内，ポジティブな未来指向とポジティブな現在指向の2つを時間的つながりのある群，ネガティブな未来指向とネガティブな現在指向の2つを時間的つながりのない群とした。過去指向については，そもそも人数が少ないこと，時間的つながりに関する情報が得られないことにより，分析から除外した。各群の時間的連続性尺度得点の平均値と標準偏差および標準誤差を Table 1-2 に示す。なお，過去指向の青年は9名であり，現在と未来の連続性 ( $M=3.41$ ,  $SD=0.76$ ) は時間的つながりなし群と，過去と現在の連続性 ( $M=4.08$ ,  $SD=0.79$ ) は時間的つながりあり群と近い平均値であった。

時間的つながりのある群とない群で，時間的連続性尺度の各下位尺度得点の平均値に差がみられるかを検討するため  $t$  検定を行った。その結果，現在と未来の連続性 ( $t(281)=$

Table 1-2  
時間的つながりあり群・なし群の時間的連続性尺度の記述統計量および標準誤差 (N=283)

|                   | 現在と未来の連続性 |      |      | 過去と現在の連続性 |      |      |
|-------------------|-----------|------|------|-----------|------|------|
|                   | Mean      | SD   | SE   | Mean      | SD   | SE   |
| 時間的つながりあり (n=188) | 3.88      | 0.57 | 0.04 | 4.02      | 0.66 | 0.05 |
| 時間的つながりなし (n=95)  | 3.42      | 0.64 | 0.07 | 3.73      | 0.67 | 0.07 |

Table 1-3  
時間的連続性尺度と時間的展望体験尺度の各下位尺度得点相関係数 (N=310)

|           | 目標指向性              | 希望                 | 現在の充実感             | 過去受容               |
|-----------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|
| 現在と未来の連続性 | .44 <sup>***</sup> | .35 <sup>***</sup> | .18 <sup>**</sup>  | .15 <sup>***</sup> |
| 過去と現在の連続性 | .16 <sup>***</sup> | .20 <sup>***</sup> | .21 <sup>***</sup> | .12 <sup>*</sup>   |

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

6.12,  $p < .001$ ,  $r = .34$ ), 過去と現在の連続性 ( $t(281) = 3.56$ ,  $p < .001$ ,  $r = .21$ ) の両下位尺度において有意差がみられ、いずれも時間的なつながりのある群の方が時間的連続性尺度の得点の平均値が高かった。

### 時間的展望体験尺度との関連

時間的展望体験尺度との関連を検討するため、時間的連続性尺度と時間的展望体験尺度の各下位尺度得点および総得点の相関係数を算出した (Table 1-3)。なお、時間的展望体験尺度の平均値と標準偏差、 $\alpha$  係数は Table 1-4 に示す通りである。現在と未来の連続性については、目標指向性との間に中程度の正の相関が、希望との間には低い正の相関がみられたが、現在の充実感や過去受容との間にはほとんど相関がみられなかった。過去と現在の連続性については、現在の充実感と希望の間にそれぞれ低い正の相関がみられたが、目標指向性や過去受容との間ではほとんど相関がみられなかった。

### 再検査信頼性の検討

再検査法による時間的連続性尺度の信頼性を検討するため、1 回目の調査時と 2 回目の調査時における時間的連続性尺度の各下位尺度得点および総得点の相関係数を、再検査信頼性係数として算出した。現在と未来の連続性の再検査信頼性係数は.77、過去と現在の連続性では.60 であった。

Table 1-4  
時間的展望体験尺度の各下位尺度の記述統計量と  $\alpha$  係数 (N=310)

|        | Mean | SD   | $\alpha$ 係数 |
|--------|------|------|-------------|
| 目標指向性  | 3.10 | 0.82 | .78         |
| 希望     | 2.98 | 0.76 | .70         |
| 現在の充実感 | 3.13 | 0.80 | .76         |
| 過去受容   | 3.41 | 0.86 | .70         |

#### 4. 考察

本研究の目的は、青年の時間的連続性を測定する尺度を作成し、その信頼性と妥当性の検討を行うことであった。大学生を対象に2回の質問紙調査を行い、再検査信頼性および内的一貫性を指標とした信頼性の確認を行った。妥当性に関しては因子分析によって尺度構造を検討した上で、時間的指向性質問項目および時間的展望体験尺度との関連から基準関連妥当性を検討した。

先行研究を参考に作成された暫定項目に対して探索的因子分析を行った結果、最終的に2因子構造が示され、因子間には正の相関関係がみられた。河野 (2003) の事例研究や溝上 (2009)、奥田 (2002a) や大橋・鈴木 (1988) から、時間的連続性は過去と現在の連続性、現在と未来の連続性によって構成され、これら2つは正の相関関係を持つと予想されていた。因子分析の結果はこれらの理論的な想定に従うものであり、時間的連続性尺度の構造的な妥当性が示されたといえる。

次に、時間的なつながりの有無をタイポロジーとして捉えていると考えられる時間的指向性質問項目との関連を検討した。時間的指向性質問項目によって分けられた群を独立変数、時間的連続性尺度の各下位尺度得点を従属変数として  $t$  検定を行ったところ、時間的指向性質問項目によって時間的なつながりがあると判断された群の方が、そうでない群より両下位尺度とも得点が高いことが示された。先述した通り、時間的指向性質問項目は、主に現在と未来の時間的なつながりが測定されているため、現在と未来の連続性に関しては、直接的に妥当性が示されたといえる。また、時間的指向性質問項目では過去と現在の時間的なつながりについては考慮されていないものの、理論的にも、本研究で得られたデータからも過去と現在の連続性と、現在と未来の連続性には正の相関関係が見られている。そのため、過去と現在の連続性に関しても、時間的指向性質問項目との間に関連が見られたこと、そして全く同様の手続きによって作成された現在と未来の連続性の妥当性が、時間的指向性質問項目との関連によって示されたことから、間接的に妥当性が示されたと考えられる。従って、時間的指向性質問項目との間でみられた関連から、本尺度の基準関連妥当性が示されたといえるだろう。

時間的展望の尺度として頻回に利用される時間的展望体験尺度 (白井, 1994a) との関連も示された。現在と未来の連続性と目標指向性との間には中程度の正の相関、希望との間にはそれよりも低い正の相関がみられ、いずれも仮説通りの関連であった。目標指向性の

項目内容からも、未来にある目標に現在の意識を向けるためには現在と未来の連続性を持つ必要がある。しかし反対に、現在と未来の連続性を持つことで必ずしも目標を指向するようになるわけではないため、正の相関関係は中程度であると考えられる。また、希望を持つことは、より明確な目標を指向することよりも漠然としたことであるため、現在との関連も弱くなる。現在と切り離して希望を持つ人の存在の可能性も含め、希望との関連は目標指向性との関連よりも弱くみられたと考えられる。

過去と現在の連続性に関しては、正の相関が予想された過去受容との間にほぼ相関がみられなかった。過去と現在の連続性が認識されていなければ過去を受容することはできないため、過去と現在の連続性と過去受容との間には正の相関関係が想定されていたが、過去と現在の連続性には、受容できる過去とのつながりに加え、受容できない過去とのつながりが考えられる。例えば、受容できない過去があるからこそ、現在も十分に生きることができないという考えを持つ人などが後者に該当するだろう。河野 (2003) の事例においても、過去と現在の連続性が認識され始める頃には内的な混乱が深まることが示されており、過去と現在のつながりを感じていても、過去を受容しているとは限らないと考えるのが妥当と思われる。現在の充実感や希望との間にみられた弱い正の相関は、受容できる過去とのつながりを持つ場合にのみ関連がみられるためではないだろうか。過去と現在の連続性に関しても、連続性を捉える尺度として説明可能な関連がみられており、時間的連続性尺度全体において時間的態度との基準関連妥当性が示されたと考えられる。

信頼性に関しては、内的一貫性および再検査法によって検討された。現在と未来の連続性と比較して、過去と現在の連続性ではやや低めの値となったものの、両指標において相応の信頼性が示されたといえるだろう。今後、本研究で作成された尺度を利用して、時間的連続性の観点から青年期に関する研究、また時間的展望に関する研究が発展していくことが期待される。

## 第2節 時間意識尺度の作成（研究2）

### 1. 問題と目的

時間的展望とは、ある一定の時点における個人の心理的過去および未来についての見解の総体 (Lewin, 1951 猪股訳 1979) のことであり、青年期の発達課題である自我同一性確立の基礎とされる (都筑, 1994; 渡邊・赤嶺, 1996)。時間的指向性はその一下位概念であり、過去・現在・未来の相互関係についての信念体系によるところの過去・現在・未来の重要性の順序づけ (白井, 1997) と定義されている。社会的自立という将来の目標を達成することが課題となる青年期においては、未来指向と自我同一性達成との関連が示されている一方 (白井, 1997), 園田 (2003) や吉田・小熊・小倉 (1990), 木村 (1982) は、青年期においても現在指向で生きることの意義を述べている。青年の発達と時間的指向性の関係は依然明らかにされていないといえる。

時間的指向性に関するこうした研究結果の不一致は、測定方法やそもそもの定義に起因している可能性がある。時間的指向性は、「あなたにとって一番大切な時は次のうちいつですか」と尋ねて、過去・現在・未来のうちから1つ選択させ、その時を選択した理由、また他のものを選択しなかった理由を書かせるという時間的指向性質問項目 (白井, 1997) によって測定されることが多い。この方法によって個人は5つのタイプに分類される。一方で河野 (2003) の事例研究では、時間的指向性は過去・現在・未来に対する個人の意識と定義され、個人が複数持ち得るものとして扱われている。現在指向の重要性を主張する園田 (2003) や吉田ら (1990), 木村 (1982) においても、未来への意識の重要性が併記されていることから、時間的指向性を複数の時間への意識として扱っていると考えられる。研究者間で定義が異なるなど、時間的指向性は概念的に未整理な状態であるため、研究結果にも不一致が生じていると思われる。

白井 (1997) の定義する時間的指向性は、河野 (2003) の定義する時間的指向性を包含する概念と考えられる。時間的指向性質問項目 (白井, 1997) は、選択された時間とその理由に関する記述から、その時間と他の時間とのつながりを判断してタイプ分けを行う。最も大切な時制を選ばせた後、他の時間とのつながりの有無によってタイプ分けするという測定方法からは、河野 (2003) が過去・現在・未来に対する個人の意識と定義する時間的指向性 (以下、時間意識とする) と、自分の過去・現在・未来がつながっているという実感と定

義する時間的連続性とが混ざったものが測定されていると思われる。つまり、最も大切な時制を選択させるという方法によって過去・現在・未来の意識を相対的な順序として捉え、さらにその理由に関する記述から時間的なつながりの一部を捉えていると考えられる。定義に関しても、「過去・現在・未来の相互関係についての信念体系」という前半部分が時間的連続性を、「過去・現在・未来の重要性の順序づけ」という後半部分が時間意識を表していると思われる。白井 (1997) が定義する時間的指向性は、時間的連続性と時間意識の2つによって構成されていると考えることができる。

時間的連続性と時間意識は異なる概念であり、分けて測定する必要がある。時間的指向性質問項目 (白井, 1997) のようにこれらを合わせてタイポロジーとして捉えると、選択された時間以外の時間意識を検討することができず、その結果、園田 (2003) や吉田ら (1990)、木村 (1982) が主張するような現在意識と青年の発達等との関連を検討することができない。さらに過去という時間に着目する有用性も指摘されているため (白井, 2001; 尾崎・上野, 2001)、各時間に対する意識をそれぞれ測定する必要がある。時間的連続性に関しては、他者との関係形成 (村田, 2009) や、精神的な健康 (Shostrom, 1968) との関連が指摘されており、石井 (2015a) では尺度が作成されている。時間的指向性の中でも、時間的連続性と時間意識は青年の発達や適応の異なる側面を表すことが予想され、さらに時間意識に関しては各時間について検討することが必要と考えられるため、新たな尺度が必要である。

時間意識は、過去・現在・未来に対する個人の意識という定義からも、過去に対する意識、現在に対する意識、未来に対する意識の3つから成ると考えられる。河野 (2003) の事例においてもそれぞれを過去指向性、現在意識、未来指向性として、その強さについての議論がなされている。白井 (1997) の測定方法においても、時間的なつながりの有無を除けば、過去指向、現在指向、未来指向の3タイプに分けられる。河野 (2003) において考察されている複雑な時間体験に裏打ちされた現在指向といった時間的指向性の現れ方や、大橋・鈴木 (1988) が過去展望と未来展望の関連性をあげていることなどから、それぞれの時間に対する意識の間には関連があると思われる。そのため、時間意識は過去意識と現在意識および未来意識から成り、それらには関連が想定される。

こうした構造が想定されることに加え、既存の尺度との関連も予想される。先述してきたように、白井 (1997) の時間的指向性質問項目では2つの下位概念が混ざっていたり、量的な検討が不可能であったりするものの、この質問項目において過去指向に分類される群は、過去意識の得点が高く、同様にして現在指向に分類される群は現在意識の得点が、

未来指向に分類される群は未来意識の得点が高くなるという仮説を立てることができる。

時間的態度との関連も予想される。未来に対する時間的態度である「目標指向性」や「希望」は、未来に対する意識、つまり未来意識があることで持つことができる態度であり、これらの間には正の相関関係が予想される。同様に現在に対する時間的態度である「現在の充実感」を持つには、現在意識が必要であり、これらの間にも正の相関関係が予想される。しかし現在に対する意識は、河野 (2003) でいうところの、突出して現在意識が強い状態においては必ずしも「現在の充実感」を感じているわけではないため、未来に対する時間的態度と未来意識との関連よりは純粋な関係ではなく、少し弱い関連となることが予想される。過去指向性に関しては、過去への意識が高い人が必ずしも過去を受容しているとは限らないため、相関関係は予想されない。

時間意識は、共に時間的指向性の概念を構成していると思われる時間的連続性との関連も予想される。2時点間の時間的連続性を認識するためには、その2時点それぞれに対する意識が必要である。つまり、2時点の時間的連続性が高い群においては、その2時点の両方の時間意識が高いことが予想される。具体的には、過去と現在の連続性が高い群においては、過去意識と現在意識の両方の得点が高いことが予想され、現在と未来の連続性が高い群においては、現在意識と未来意識の両方の得点が高いことが予想される。

以上のことから本研究では、時間意識を測定する尺度の作成を行う。既存の測定方法に対しては、1項目と限られた情報のみから行われる評定者の評定に依存しているといった問題点が指摘されている (Shirai, Nakamura, & Katsuma, 2012) ため、複数の項目で量的な検討が可能な尺度を作成し、妥当性および信頼性の検討を行うこととする。妥当性の検討に関しては、探索的因子分析を行うことによって尺度構造の妥当性を、時間的指向性質問項目 (白井, 1997) と時間的展望体験尺度 (白井, 1994a)、時間的連続性尺度 (石井, 2015a) との関連を確認することによって基準関連妥当性の検討を行う。信頼性の検討に関しては内的一貫性による検討を行う。

## 2. 方法

### 調査協力者

A 県内の私立大学および B 県内の公立短期大学の学生計 199 名。その内、欠損値を含むデータを除いた 157 名 (男性 77 名, 女性 76 名, 不明 4 名; 平均年齢 19.46 歳, 年齢範囲 18



～26 歳) を分析対象とした。

## 手続き

時間意識尺度の項目を作成するため、河野 (2003) の事例や白井 (1997) の時間的指向性質問項目を参考に、過去・現在・未来への意識を測定することが可能と考えられる項目を合計 16 項目作成し、時間意識尺度の暫定項目とした。教示は「以下の項目について、最近の自分の行動や考えにどの程度あてはまるか、「あてはまらない (1 点)」から「あてはまる (5 点)」までのうち、自分に最も当てはまると思う数字に○をつけてください。」とし、「1 あてはまらない」「2 どちらかといえばあてはまらない」「3 どちらともいえない」「4 どちらかといえばあてはまる」「5 あてはまる」の 5 件法で回答を求める形式とした。

これらの作成した項目を用いて信頼性、妥当性を検討して尺度を作成するため、質問紙調査を行った。調査は大学の講義時間の一部を使い、著者が集団で一斉に実施した。調査は無記名で実施され、回答は任意であること、いつでも中断できること等をフェイスシートに明記した上、口頭での説明も行った。

## 調査時期

2013 年 10 月。

## 調査内容

**時間意識** 先述した手続きによって著者が作成した 16 項目を暫定項目とした時間意識尺度を用いた。項目の回答形式は「1 あてはまらない」から「5 あてはまる」までの 5 件法で、得点が高いほど時間意識を持つことが示されるように得点化した。

**時間的連続性** 石井 (2015a) の時間的連続性尺度を用いた。この尺度は現在と未来のつながりを測定する「現在と未来の連続性」6 項目と、過去と現在のつながりを測定する「過去と現在の連続性」4 項目の 2 下位尺度、計 10 項目からなる。現在と未来の連続性は「未来があるから頑張ることができる」、過去と現在の連続性は「現在は過去の積み重ねである」などの項目からなる。石井 (2015a) では本尺度の内的整合性および再検査法による信頼性と構成概念妥当性が確認されている。項目の回答形式は「1 あてはまらない」から「5 あてはまる」までの 5 件法で、得点が高いほど時間的連続性を持つことが示されるように得点化した。

**時間的指向性質問項目** 白井 (1997) の時間的指向性質問項目を用いた。「あなたにとって過去・現在・未来のうち最も大切な時間はいつですか。その理由も書いて下さい。」と教示し、大切な時間を過去・現在・未来のうちから1つ選択させ、その理由を記述するよう求めるもの。白井 (1997) では、構成概念妥当性や、時間的態度との弁別性による妥当性が確認されている。先行研究での分類方法に従い、選択された時間と記述の内容から、ポジティブな未来指向・ポジティブな現在指向・ネガティブな未来指向・ネガティブな現在指向・過去指向の5タイプのうち1つのタイプに個人を分類した。ここでの「ポジティブ」とは時間的なつながりを持つことを、「ネガティブ」とは時間的なつながりを持たないことを意味している。

**時間的展望体験尺度** 白井 (1994a) の時間的展望体験尺度を用いた。この尺度は、未来に対する時間的態度を測定する「目標指向性」5項目と「希望」4項目、現在に対する時間的態度を測定する「現在の充実感」5項目、過去に対する時間的態度を測定する「過去受容」4項目の4下位尺度、計18項目からなる。目標指向性は「私には将来の目標がある」、希望は「私の将来には希望がもてる」、現在の充実感は「毎日の生活が充実している」、過去受容は「私は自分の過去を受け入れることができる」などの項目からなる。白井 (1994a) では本尺度の内的整合性による信頼性と構成概念妥当性が確認されている。項目の回答形式は「1あてはまらない」から「5あてはまる」までの5件法で、得点が高いほど時間的態度が肯定的であることが示されるように得点化した。

### 3. 結果と考察

#### 時間意識尺度の構成

時間意識尺度の暫定16項目に対して一般化した最小二乗法による因子分析を行ったところ、初期の固有値は、第1因子から3.39, 2.02, 1.74, 1.29, ...であった。次に、固有値の減少状況と解釈可能性の観点から3因子を仮定し、一般化した最小二乗法・Promax回転による因子分析を行った。その結果から、どの因子にも負荷量が低い項目や、2つの因子に負荷量の高い項目、さらに項目の平均値や標準偏差、度数分布などから識別力も考慮して合計4項目を削除した。残りの12項目に対して、再度、一般化した最小二乗法・Promax回転による因子分析を行った。最終的な12項目の因子負荷量と記述統計量をTable 2-1に示す。

第1因子の寄与は1.97であり、第2因子への寄与は1.71、第3因子への寄与は1.46であ

Table 2-1  
時間意識尺度の因子分析結果と記述統計量 (N=157)

|                      | F1         | F2         | F3         | Mean | SD   |
|----------------------|------------|------------|------------|------|------|
| 10. 今が大事だと思う。        | <b>.67</b> | -.12       | .08        | 4.15 | 0.85 |
| 8. 毎日が幸せだと感じる。       | <b>.65</b> | -.02       | -.05       | 3.35 | 1.02 |
| 6. 今を一生懸命生きている。      | <b>.64</b> | .26        | -.15       | 3.39 | 1.13 |
| 11. 目の前のことを意識している。   | <b>.45</b> | .03        | -.01       | 3.62 | 0.96 |
| 7. 現在を充実させたいと思う。     | <b>.43</b> | -.12       | .15        | 4.31 | 0.89 |
| 4. 人生設計を考えることがある。    | -.01       | <b>.80</b> | .02        | 3.32 | 1.15 |
| 1. 未来の自分を想像することがある。  | -.05       | <b>.64</b> | .04        | 3.52 | 1.24 |
| 2. 将来の夢がある。          | -.02       | <b>.61</b> | .04        | 3.22 | 1.36 |
| 16. 過去のことにこだわっている。   | -.18       | .13        | <b>.66</b> | 2.82 | 1.18 |
| 15. 昔に戻りたいと思う。       | -.05       | -.07       | <b>.62</b> | 3.27 | 1.39 |
| 12. 昔のことを思い出すことがある。  | .14        | .06        | <b>.53</b> | 4.08 | 0.95 |
| 13. 思い出にひたることが好きである。 | .29        | -.01       | <b>.50</b> | 3.50 | 1.24 |
| 因子間相関                | F1         | .31        | .12        |      |      |
|                      | F2         |            | .03        |      |      |

った。第1因子には「今が大事だと思う」、「毎日が幸せだと感じる」などの5項目の負荷量が高く、第2因子には「人生設計を考えることがある」、「未来の自分を想像することがある」などの3項目、第3因子には「過去のことにこだわっている」、「昔に戻りたいと思う」などの4項目の負荷量が高かった。第1因子に負荷量の高い項目はすべて現在について、第2因子に負荷量の高い項目はすべて未来について、第3因子に負荷量の高い項目はすべて過去についての内容であったため、第1因子を「現在意識」因子、第2因子を「未来意識」因子、第3因子を「過去意識」因子と命名した。因子間相関は第1因子と第2因子が.31、第1因子と第3因子が.12、第2因子と第3因子が.03であった。それぞれ負荷量の高い項目群で下位尺度を構成し、 $\alpha$ 係数を算出したところ、現在意識が.69、未来意識が.70、過去意識が.64であった。過去意識を中心として $\alpha$ 係数は全体的に若干低めの値にはなったものの、探索的因子分析の結果は理論的に想定された通りの3因子構造が示されており、時間意識尺度の構造的な妥当性が示されたといえる。因子間の関連については、現在意識と未来意識の因子間には想定された通りの相関関係がみられている一方、過去意識と他の意識の因子間には関連がほぼみられなかった。他の尺度との関連の検討も通して、過去意識に関して検討していくこととする。

Table 2-2  
各時間的指向群における時間意識尺度得点の平均値と標準偏差および標準誤差 (N=157)

|                  | 現在意識 |      |      | 未来意識 |      |      | 過去意識 |      |      |
|------------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
|                  | Mean | SD   | SE   | Mean | SD   | SE   | Mean | SD   | SE   |
| 過去指向群<br>(n=6)   | 3.47 | 0.60 | 0.25 | 2.44 | 1.36 | 0.56 | 3.96 | 0.75 | 0.31 |
| 現在指向群<br>(n=119) | 3.84 | 0.61 | 0.06 | 3.32 | 0.93 | 0.09 | 3.41 | 0.82 | 0.08 |
| 未来指向群<br>(n=32)  | 3.56 | 0.75 | 0.13 | 3.64 | 1.07 | 0.19 | 3.34 | 0.87 | 0.15 |

### 時間的指向性質問項目との関連

既存の尺度との関連を検討するため、時間的指向性質問項目において選択された時間によって、個人を過去指向群、現在指向群、未来指向群に分類した。各群の時間意識尺度得点の平均値と標準偏差および標準誤差を Table 2-2 に示す。

時間的指向性質問項目によって分類された群の間で、時間意識尺度得点の平均値に差がみられるかを検討するため、時間意識尺度の各下位尺度得点を従属変数、時間的指向性質問項目によって分類された群を独立変数とした 1 要因 3 水準の分散分析を行った。その結果、現在意識 ( $F(2, 154) = 3.07, p < .05, \eta^2_p = .04$ )、未来意識 ( $F(2, 154) = 4.01, p < .05, \eta^2_p = .05$ ) を従属変数とした場合に群の主効果がみられた。Tukey 法による調整を行った多重比較の結果、現在意識得点については、現在指向群の方が未来指向群よりも高い傾向がみられた ( $p < .10, d = 0.44$ )。未来意識得点については、未来指向群の方が過去指向群より有意に高く ( $p < .05, d = 2.29$ )、現在指向群の方が過去指向群よりも高い傾向がみられた ( $p < .10, d = 0.93$ )。過去意識を従属変数とした場合には群の主効果はみられなかった ( $F(2, 154) = 1.43, n.s., \eta^2_p = .02$ )。

各時間意識得点は、その時間の指向群において最も高い得点となっているが、統計的に有意な差であることが示されたのは一部にとどまった。現在意識得点において、有意差が見られた現在指向群と未来指向群の平均値差より大きな差である現在指向群と過去指向群との間に有意差がみられないという結果は、分散分析の前提条件である等分散性は統計的に仮定できているものの、そもそもの過去指向群の人数の少なさが影響を与えている可能性も否定できない。しかし、各指向群が他の指向群と比較して統計的に有意にその時間に対する意識を高く持つと示されないことは、他の指向群においてもその時間に対する意識を持っていることの現れであり、個人が複数の時間意識を持つことを傍証していると思われる。個人が複数持つ時間意識に関して、既存の尺度との関連がある程度示された。

Table 2-3  
時間意識尺度と時間的展望体験尺度の各下位尺度得点および総得点の相関係数 (N=157)

|           | 目標指向性              | 希望                 | 現在の充実感             | 過去受容               | 時間的展望体験尺度総得点       |
|-----------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|--------------------|
| 現在意識      | .13                | .36 <sup>***</sup> | .44 <sup>**</sup>  | .33 <sup>***</sup> | .42 <sup>***</sup> |
| 未来意識      | .62 <sup>***</sup> | .45 <sup>***</sup> | .20 <sup>*</sup>   | .12                | .51 <sup>***</sup> |
| 過去意識      | -.01               | -.15               | -.09               | -.09               | -.11               |
| 時間意識尺度総得点 | .35 <sup>***</sup> | .32 <sup>***</sup> | .27 <sup>***</sup> | .18 <sup>*</sup>   | .40 <sup>***</sup> |

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

### 時間的展望体験尺度との関連

時間的展望体験尺度との関連を検討するため、時間意識尺度と時間的展望体験尺度の各下位尺度得点および総得点の相関係数を算出した (Table 2-3)。尚、時間的展望体験尺度の平均値と標準偏差、 $\alpha$  係数は Table 2-4 に示す通りである。過去受容の  $\alpha$  係数は少し低くなっているが、時間的展望体験尺度全体では .83 という一貫性もみられているため、先行研究通りの尺度構成を用いた。

未来意識と、未来に対する時間的態度である目標指向性および希望との間に中程度の正の相関がみられた。目標を指向したり、将来に対して希望を持ったりすることには、未来への意識が関連していることが予想されるため、未来に対する時間的態度との間に正の相関が認められたことは、未来意識の収束的妥当性を示しているといえるだろう。また、現在の充実感や過去受容との間にほとんど相関がみられないことは、未来意識の弁別的妥当性を示していると考えられる。

現在意識と現在の充実感との間にも中程度の正の相関がみられた。予想された通り、未来意識と未来に対する時間的態度との間にみられた相関係数よりは相対的に低くなっている。これは突出して現在意識が強い状態 (河野, 2003) や、刹那主義的な状態などにより、現在への意識が必ずしもそのまま充実感につながっていないためと考えることができる。

Table 2-4  
時間的展望体験尺度の各下位尺度の記述統計量と  $\alpha$  係数

|              | Mean | SD   | $\alpha$ 係数 |
|--------------|------|------|-------------|
| 目標指向性        | 3.02 | 0.94 | .82         |
| 希望           | 2.86 | 0.76 | .65         |
| 現在の充実感       | 3.00 | 0.80 | .72         |
| 過去受容         | 3.42 | 0.77 | .58         |
| 時間的展望体験尺度総得点 | 3.07 | 0.59 | .83         |

Table 2-5  
時間意識下位尺度得点の組合せ群ごとの時間的連続性尺度の記述統計量および標準誤差 (N=157)

|           | 両意識高群    |             |           |           | 片方の意識のみ高群 |             |           |           | 両意識低群    |             |           |           |
|-----------|----------|-------------|-----------|-----------|-----------|-------------|-----------|-----------|----------|-------------|-----------|-----------|
|           | <i>n</i> | <i>Mean</i> | <i>SD</i> | <i>SE</i> | <i>n</i>  | <i>Mean</i> | <i>SD</i> | <i>SE</i> | <i>n</i> | <i>Mean</i> | <i>SD</i> | <i>SE</i> |
| 現在と未来の連続性 | 50       | 4.08        | 0.60      | 0.08      | 61        | 3.42        | 0.65      | 0.08      | 46       | 3.15        | 0.67      | 0.10      |
| 過去と現在の連続性 | 55       | 4.14        | 0.60      | 0.08      | 68        | 3.93        | 0.72      | 0.09      | 34       | 3.68        | 0.88      | 0.15      |

また、希望や過去受容との間には低い正の相関がみられた。現在意識の項目内容には「毎日が幸せだと感じる」といった現在に対して肯定的なものが含まれている。現在に対して肯定的であることと、過去を受容していたり、将来に希望を持っていたりといった、過去や未来に対して肯定的であることにはある程度の関連が想像される場所である。現在に対する意識の中の、特に肯定的な側面と、過去や未来に対する態度の肯定的な側面との関連によって、希望や過去受容との間には低い正の相関がみられたと考えられる。過去や未来の時間的態度と多少の相関関係がみられ、現在に対する時間的態度との相関が最も高くみられているため、現在への意識を広く測定した現在意識に関しても一定の弁別的、収束的妥当性が示されたと考えられる。

過去意識は、どの時間に対する時間的態度ともほとんど相関がみられなかった。予想された通り、過去への意識と過去の受容とは関連がほとんどみられなかったため、過去意識の弁別的妥当性が示されたと見える。以上のことから、時間的態度を測定している時間的展望体験尺度 (白井, 1994a) との関連においても、本尺度の基準関連妥当性がある程度示されたと考えられる。

### 時間的連続性尺度との関連

時間意識尺度の基準関連妥当性を確認するため、時間的連続性尺度 (石井, 2015a) との関連を検討した。時間意識尺度の各下位尺度得点の平均値を算出し、その平均値以上の得点群と平均値より低い得点群に分けた。時間意識の高低によって時間的連続性尺度の得点に違いがみられるのか検討するため、時間的連続性尺度の各下位尺度得点を従属変数、各連続性に対応する2つの時間意識に関して、両方の時間への意識が高い群、片方の時間への意識のみが高い群、両方の時間への意識が低い群の3群を独立変数として、被験者間計画の1要因分散分析を行った。片方の時間意識のみが高い群は、どちらの時間意識が高いかによってさらに2群に分けることが可能である。しかし、確認すべき時間意識の基準関連妥当性として想定されるのは、どちらか片方の時間に対する意識が低いことによって連続性が低くなるということであるため、上述の3群で検討を行った。時間意識の下位尺度得

Table 2-6  
時間的連続性尺度の各下位尺度の記述統計量と $\alpha$ 係数

|             | Mean | SD   | $\alpha$ 係数 |
|-------------|------|------|-------------|
| 現在と未来の連続性   | 3.55 | 0.74 | .75         |
| 過去と現在の連続性   | 3.95 | 0.74 | .74         |
| 時間的連続性尺度総得点 | 3.71 | 0.63 | .80         |

点の組合せによって分けられた群ごとの、時間的連続性尺度の各下位尺度得点の平均値と標準偏差および標準誤差を Table 2-5 に示す。尚、時間的連続性尺度の平均値と標準偏差、 $\alpha$ 係数は Table 2-6 に示す通りである。

分散分析の結果、現在と未来の連続性を従属変数とした場合に群の主効果がみられ ( $F(2, 154) = 27.31, p < .001, \eta^2_p = .26$ )、Tukey 法による調整を行った多重比較の結果、両意識高群と片方の意識のみ高群との間 ( $p < .001, d = 1.05$ )、および両意識高群と両意識低群との間 ( $p < .001, d = 1.47$ ) で有意差がみられ、いずれも両意識高群の平均値が高かった。また、過去と現在の連続性を従属変数とした場合にも群の主効果がみられ ( $F(2, 154) = 4.40, p < .05, \eta^2_p = .05$ )、同様に Tukey 法による調整を行った多重比較の結果、両意識高群と両意識低群との間で有意差がみられ ( $p < .05, d = 0.64$ )、両意識高群の平均値が高かった。

現在と未来の連続性に関しては、両意識高群が統計的に最も高い得点であることが示され、仮説通りの結果が示された。過去と現在の連続性を従属変数とした場合、両意識高群と両意識低群との間では有意差がみられたが、片方の意識のみ高群の間には有意差がみられなかった。先述したように、過去と現在の連続性における過去の認知は一樣でない可能性が高い。受容できない過去と、辛い現在との連続性を感じている場合などには、必ずしも過去と現在両方の意識を高く持つとは限らない。過去にこだわるなどの過去意識のみが高かったり、過去への意識は一切持たず、現在のみ意識を向けていたりする可能性が考えられる。そのため、片方の時間に対する意識のみ高群においても連続性の得点が高く、両意識高群との有意差がみられなかったと思われる。過去に関する意識内容については、場合によって詳細な検討の必要はあるものの、時間的連続性との関係においてもおよそ仮説通りの関係が示され、各時間への意識を測定する本尺度の一定の基準関連妥当性が示されたといえるだろう。

### 第3節 時間的展望の概念整理

本章では、研究者によって扱い方が異なるなど概念的に未整理な状態であった時間的指向性を、時間的連続性および時間意識の2下位概念に分け、それぞれを測定する尺度の作成を行い、信頼性と妥当性が確認された。本論文に関連する時間的展望の概念は Table 2-7 のように整理することができる。本章において概念整理および測定方法の作成を行ったことにより、今後の時間的指向性研究は系統立てて行われていくことが期待される。

一方で、本章において作成された尺度および示された概念間の関連の一般化については限界点もある。本研究における対象者はいずれも青年期後期にあたると考えられる大学生であった。先述した通り、時間的展望の獲得期は青年期とされているため、その初期や中期、あるいはそれ以降の年齢や発達段階に対して本研究で作成された尺度を使用する際には、結果の解釈も含めて慎重になる必要があるだろう。

こうした限界点は残るものの、時間的指向性が時間的連続性と時間意識に分けて測定可能となったことにより、先述した先行研究における結果の不一致を検討することができると思われる。時間意識尺度はそれぞれの時間について量的な検討ができるため、青年の発達に対して白井 (1997) が主張している未来意識の大切さに加え、園田 (2003) などが主張する現在意識の大切さに関しても、同時に検討することができる。またその際に、時間的連続性尺度 (石井, 2015a) を組み合わせて用いることで、時間的指向性質問項目では検討で

Table 2-7  
本研究に関連する時間的展望の概念整理

---

#### 時間的展望

ある一定の時点における個人の心理的過去および未来についての見解の総体。

##### A. 時間的態度

過去・現在・未来に対する感情的評価。

##### B. 時間的指向性

過去・現在・未来の相互関係についての信念体系によるところの過去・現在・未来の重要性の順序づけ。

##### B1. 時間意識

過去・現在・未来に対する個人の意識。

##### B2. 時間的連続性

自分の過去・現在・未来がつながっているという実感。

---



きなかった過去と現在の連続性も含めて検討することができる。こうした検討を今後行っていくことで、先行研究で得られてきた知見が体系的に理解されることが望まれる。

時間的連続性と時間意識は、時間的指向性を構成するものとしてのみでなく、個別の検討にも意義があると思われる。未来への意識や現在への意識の動機づけに対する有効性が文脈に依存するといった白井 (1995) の研究や、達成動機との関連 (Sorrentino, 1973) といった研究からも、時間意識は主に動機づけとの関係が予想される。時間的連続性に関しては、親密な友好関係との関連 (柏尾, 1998a; 1998b)、さらには愛着や心理療法との関係も指摘されている (村田, 2008; 2009)。個別での検討も重ねていくことで、臨床的な問題も含め、青年の適応への貢献につながる可能性がある。先行知見の捉え直しと新たな知見を積み重ねていくことで、青年の発達や適応に対してさらなる有用な知見の確立が期待される。

## 第3章

現在・過去・未来の時間的展望と

アイデンティティ形成

## 第1節 時間的態度とアイデンティティ形成プロセスとの関連（研究3）

### 1. 問題と目的

過去や現在，未来についての見方は，個人によって様々であり，その差異は個人の行動に影響を与える。例えば，肯定的な未来への展望を持つほど，動機づけが高まることが古くから示されてきている (Nuttin, 1984; Nuttin & Lens, 1985; Simons, Vansteenkiste, Lens, & Lacante, 2004)。こうした時間についての見方は時間的展望として，Lewin (1951 猪股訳 1979) によって場の理論の中に位置づけられ，「ある与えられた時に存在する個人の心理学的未来及び心理学的過去の見解の総体」(p. 86) と定義されている。

#### 時間的展望とアイデンティティ

時間的展望は特に，青年期発達において重要な意味を持つ。Erikson (1963 仁科訳 1977) は，青年期の発達課題としてアイデンティティの確立を挙げており，その基礎には時間的展望の確立が必要とされている (都筑, 1993)。アイデンティティとは，個人が自分の内部に斉一性と連続性を感じられることと，他者がそれを認めてくれることの，両方の事実の自覚であるとされる (Erikson, 1968 西平・中島訳 2011)。アイデンティティ形成は，過去，現在，未来を生きる個人の時間的なまとまりを問題にしているため (Erikson, 1963 仁科訳 1977)，時間的展望と深い関係にある。青年期発達の理解やその支援にとって，この時期の発達課題であるアイデンティティ形成と，その基盤とされる時間的展望との関連を詳細に明らかにすることは重要と考えられる。

青年期における時間的展望とアイデンティティ形成との関連は，これまでも研究が積み重ねられてきている。そうした多くの研究が立脚しているのが，アイデンティティ・ステータス・モデル (Marcia, 1966) である。アイデンティティ・ステータスとは，自分のアイデンティティに関わる事柄について，積極的に関与できると感じられるもの (コミットメント) を持っているか，およびコミットメントの様々な選択肢について思案したか (探索) によって，達成，早期完了，モラトリアム，拡散という4つの地位に分類するものである。例えば都筑 (1994) は，達成地位，早期完了地位，モラトリアム地位では過去より現在，現在より未来を肯定的に捉えている一方，拡散地位では現在や未来よりも過去を肯定的に捉えていること，また達成地位において未来を最も肯定的に捉えていることを示して

いる。他にも, Laghi, Baiocco, Liga, Guarino, and Baumgartner (2013) では, 達成地位において過去を肯定的に捉え, 未来への志向性が高い一方, 拡散地位の過去の経験は否定的で, 未来への志向性は低く, 現在については運命論的な考えを持っていることが示されている。Rappaport, Enrich, and Wilson (1985) や都筑 (1993) などにおいても, 同様にアイデンティティ・ステータスによる時間的展望の持ち方の違いが示されており, 総じて, アイデンティティ達成地位の青年は, 各時間への肯定的な展望と未来への志向性を高く持ち, 反対に拡散地位では, 各時間への否定的な展望を持ち, 未来への志向性は低いことが示されている。

### アイデンティティに関するモデル

しかし, 時間的展望とアイデンティティ形成との関連を明らかにするためには, アイデンティティ・ステータス・モデルの観点からの検討だけでは不十分である。中間 (2011) は, アイデンティティに関する研究がこれまで, アイデンティティ達成地位 (Marcia, 1966) やその程度 (Rasmussen, 1964) について多く検討されてきたが, 近年では, アイデンティティがいかに形成されるかという形成プロセスへの関心 (杉村, 2005) も高まっていると述べている。アイデンティティ・ステータス・モデルは, アイデンティティの形成プロセスに着目する一方, 個人の分類を行うことに主眼が置かれているため, 形成プロセスを詳細に検討することができない。そのため, 蓄積の多い Marcia (1966) のモデルを踏襲した上で, コミットメントと探索をそれぞれ複数の側面に分けてアイデンティティの形成プロセスを詳細に検討するモデルが提起されてきている (Crocetti, Rubini, & Meeus, 2008; Luyckx, Goossens, Soenens, & Beyers, 2006)。こうしたモデルに基づいて, アイデンティティの形成プロセスと時間的展望の関連を明らかにすることが必要である。

本研究では, Luyckx, Goossens, Soenens et al. (2006) によって妥当性が確認されているアイデンティティ形成の二重サイクルモデル (a dual-cycle model of identity formation) に基づいて, 時間的展望とアイデンティティ形成プロセスとの関連について検討する。アイデンティティ形成の二重サイクルモデルでは, アイデンティティの形成プロセスは, コミットメントを形成するために多様な選択肢を探求するプロセスと, 選択した対象が真にコミットメントに値するかを検討し, コミットメントを深めていくプロセスから構成される。このモデルに基づき, Luyckx, Schwartz, Berzonsky, Soenens, Vansteenkiste, Smits, and Goossens (2008) によって作成された多次元アイデンティティ発達尺度 (the Dimensions of Identity Development Scale: DIDS) においては, 2つのコミットメントの次元と, 2つの適応的な探

求の次元に加え、アイデンティティ形成に寄与しない探求の否定的な側面であり、発達過程において陥る可能性のある反芻的探求についても加えられている。Luyckx, Goossens, Soenens et al. (2006) のモデルに基づき、DIDS を用いることで、時間的展望とアイデンティティ形成プロセスとの詳細な関連が検討可能と考えられる。

### 時間的展望とアイデンティティの形成プロセス

アイデンティティ形成の二重サイクルには、未来に対する時間的展望が大きく作用していると考えられる。Kroger and Green (1996) は、将来どうなりたいかという可能自己が、アイデンティティ達成地位への移行の契機になりうるとしている。可能自己とアイデンティティ形成との関連を検討した千島 (2016) においても、理想自己に変わった姿をイメージすることや変わるための計画を持つことと、コミットメントや探求との関連が示されている。こうした可能自己についての研究知見は、未来の自己像の描き方とアイデンティティ形成との関連を示しており、自己像を含むより広範な未来に対する時間的展望とアイデンティティ形成の間には以下のような関連が想定される。つまり、こうなりたいといった理想のイメージが持てるような肯定的な未来展望は、コミットメントや適応的な探求と正の関連を持ち、反対にそうしたイメージが持てないような否定的な未来展望は、コミットメントや適応的な探求と負の関連を持つと予想される。また、否定的な未来しか描けないことは、アイデンティティ形成に寄与せず不安の高い反芻的探求 (中間・杉村・畑野・溝上・都筑, 2015) と関連すると考えられる。

またアイデンティティは、幼少期に主として同一化によって形成された様々な自己像を青年期に統合していくことで明確になっていく (Erikson, 1968 西平・中島訳 2011) とされる。人生の過去の出来事を他の出来事に結び付けたり、自分自身のアイデンティティや人格に結び付けたりしようとする自伝的推論 (Negele & Habermas, 2010) が、青年期に多く行われることも明らかにされている (Habermas & Bluck, 2000; Habermas & Paha, 2001)。アイデンティティを形成していく際に青年が自伝的推論を行うとすれば、様々な過去の出来事等をどのように自己像に統合しようか模索していくと思われるため、過去に対する肯定的および否定的な展望と、探求のプロセスとの間には関連が予想される。

現在についての時間的展望は、コミットメントの次元に関わると考えられる。園田 (2003) は、アイデンティティ形成と関連の深い進路選択と時間的展望との関連を検討している。大学生を対象とした質問紙調査の結果、現在についての肯定的な時間的展望を持っている

と、進路決定に関する自己効力感と充実感が高いことを見出している。園田 (2003) で見出された知見は、現在を肯定的に捉えると、積極的に関与する (コミットメント) ことができるからこそ、自己効力感が高く、そこから生み出される充実感も高いと解釈できる。つまり、現在についての時間的展望は、コミットメントの形成や同一化に関連すると考えられる。

## 時間的展望に対する2つのアプローチ

時間的展望については、上述のような各時間に対する展望の持ち方それぞれと、それらを合わせたプロフィールの両方から検討する必要がある。前者はそれぞれの時間に対する展望の持ち方に着目するのに対し、後者は過去、現在、未来に対してある時間的展望の持ち方をする個人に着目している点で異なる。しかし、時間的展望に関するこれまでの研究は、前者のような過去、現在、未来に対する展望の持ち方それぞれを分けて検討されることが多かった。個人の時間的展望の持ち方に着目した研究においても、Zimbardo and Boyd (1999) のように下位尺度の中で得点の高い時間に個人を分類したり、Shirai, Nakamura, and Katsuma (2012) のように、優勢な時間を1つ選択させる形式で個人を分類したりする研究が多く、優勢な時間以外の時間に対する展望は検討されてこなかった。しかし近年、Andretta (2011) や Boniwell, Osin, Linley, and Ivanchenko (2010) のように、時間的展望のプロフィールを分析した研究も行われるようになってきた。実際に Andretta (2011) では、各時間に対する展望の持ち方と、時間的展望のプロフィールとでは、学業成績に対して異なる影響が得られたとしている。アイデンティティとの関連を検討する際にも、各時間に対する展望の持ち方が、各形成プロセスにどのように関連しているのかに加え、ある時間的展望の持ち方をする個人が、どのようなアイデンティティの形成プロセスを行っているのか、その両方を明らかにする必要がある。

各時間に対する展望の持ち方と、時間的展望のプロフィールは、Worrell, Mello, and Buhl (2013) の青年時間的態度尺度 (Adolescent Time Attitude Scale: ATAS) を用いることで検討が可能である。時間的展望の測定方法については、古くからその不十分さが指摘され、開発の必要性が主張され続けてきた (Daltrey & Langer, 1984; 下島・佐藤・越智, 2012; 都筑, 1982)。現在、日本では時間的展望体験尺度 (白井, 1994) が頻回に使用されているが、未来に関する項目に偏っているという欠点が指摘されているほか (下島他, 2012)、国際的な利用も少なく、知見の比較や共有には限界がある。一方、国際的には、Zimbardo Time Perspective Inventory

(Zimbardo & Boyd, 1999) が最も頻回に利用されているが、構造的な妥当性に関する問題や信頼性の低さといった欠点が指摘されている (Andretta, Worrell, Mello, Dixson, & Baik, 2013; Worrell & Mello, 2007; Worrell et al., 2013)。こうした問題点を乗り越え、高い信頼性と妥当性が確認され、また各国で翻訳版も開発されているのが Worrell et al. (2013) の開発した ATAS である。ATAS は、過去、現在、未来の肯定面と否定面をそれぞれ測定することが可能であり、またそれらを合わせてプロフィール分析を行うことも可能である (Andretta et al., 2013)。そのため本研究では ATAS を用いて、各時間に対する展望の持ち方と、時間的展望のプロフィールについて検討を行う。

時間的展望プロフィールに関しては、未だ少数の知見しか見当たらないのが現状である。Boniwell and Zimbardo (2004) は、バランスの取れた時間的展望という概念を提案しており、Shirai, Nakamura, and Katsuma (2012) においても、バランスの取れた時間的展望がアイデンティティの形成に関わるとされている。しかし、過去、現在、未来への展望それぞれがどのような状態になっている場合に、バランスの取れた時間的展望なのかについては明確でない。Andretta et al. (2013) においてもバランス型と名付けられたプロフィールは存在するものの、なぜその型がバランス型であるのかについての記述はなされていない。文化的な差異も考慮し、本研究では日本人青年の時間的展望プロフィールの特徴および時間的展望プロフィールとアイデンティティ形成との関連について、探索的に検討を行うこととする。

## 本研究の目的

以上のことから本研究では、時間的展望とアイデンティティ形成プロセスとの関連について検討する。その際、アイデンティティに関しては、アイデンティティ形成の二重サイクルモデル (Luyckx, Goossens, Soenens et al., 2006) に基づき、時間的展望に関しては、過去、現在、未来それぞれに対する展望の持ち方と、それらの組み合わせから成るプロフィールの両方について検討を行う。

## 2. 方法

### 調査協力者

4年制の国立大学と私立大学の学生計 196 名 (男性 68 名, 女性 128 名; 平均年齢 19.2 歳, 年齢範囲 18~26 歳)。

## 時期

2015年5月から7月。

## 手続き

Web アンケート Qualtrics を用いて質問紙調査を行った。調査への協力依頼は各学校の心理学関連科目の講義時間内に行った。調査協力者への倫理的配慮として、回答は任意であり、いつでも中断できること、回答しなかったことや途中でやめたことによって不利益を被らないことを、調査依頼シートおよび調査のフェイスページに明記した。

## 調査内容

**アイデンティティ** 中間・杉村・畑野・溝上・都筑 (2015) の日本語版多次元アイデンティティ発達尺度 (以下 DIDS-J) を用いた。この尺度は、Luyckx, Goossens, & Soenens (2006) の議論をもとに作成された多次元アイデンティティ発達尺度 (Luyckx et al., 2008) の翻訳版であり、2つのコミットメント次元と2つの探求次元、そして探求の否定的側面の次元から成る。コミットメントは「コミットメント形成」と「コミットメントとの同一化」、探求は「広い探求」と「深い探求」、そして探求の否定的側面は「反芻的探求」の5下位尺度、各5項目、計25項目からなる。コミットメント形成は「自分がどんな人生を進むか決めた」、コミットメントとの同一化は「私の将来の計画は、自分の本当の興味や大切だと思うものに合っている」、広い探求は「自分が進もうとする人生にはどのようなものがあるのか、すすんで考える」、深い探求は「自分がすでに決めた人生の目的が本当に自分に合うのかどうか、考える」、反芻的探求は「人生で本当にやりとげたいことは何か、はっきりしない」などの項目からなる。項目の回答形式は「1 あてはまらない」「2 どちらかといえばあてはまらない」「3 どちらともいえない」「4 どちらかといえばあてはまる」「5 あてはまる」の5件法で、得点が高いほどそれぞれの発達プロセスに傾倒していることが示されるように得点化した。

**時間的展望** Chishima, Murakami, Worrell, and Mello (in press) の日本語版青年時間的態度尺度 (以下 ATAS-J) を用いた。この尺度は、青年時間的態度尺度 (Worrell et al., 2013) の翻訳版であり、過去、現在、未来の肯定的態度および否定的態度を測定する「過去肯定」、「過去否定」、「現在肯定」、「現在否定」、「未来肯定」、「未来否定」の6下位尺度、各5項目、



計 30 項目からなる。過去肯定は「自分には幼い頃のとても幸せな思い出があります」、過去否定は「私にとって、過去の人生は忘れたいものです」、現在肯定は「今の生活に満足しています」、現在否定は「私は、今の生活に不満があります」、未来肯定は「自分の将来が楽しみです」、未来否定は「私は将来、成功するとは思えません」などの項目からなる。項目の回答形式は「1 まったくそう思わない」「2 そう思わない」「3 どちらともいえない」「4 そう思う」「5 とてもそう思う」の 5 件法で、得点が高いほど、それぞれの態度を強く持つことが示されるように得点化した。

### 3. 結果

#### 尺度構成と記述統計量およびプロフィール分析のための群分け

**尺度構成と記述統計量** 先行研究での尺度構成に従い、DIDS-J および ATAS-J の各項目の得点を合計し、そのそれぞれの平均値を各下位尺度の得点とした。また、各下位尺度それぞれの内的整合性を検討するため、Cronbach の  $\alpha$  係数を算出したところ、すべての下位尺度において十分な内的整合性が確認されたため ( $\alpha = .71 - .92$ )、以下ではすべての下位尺度を分析対象とした。各尺度の得点の平均値と標準偏差および  $\alpha$  係数を Table 3-1 に示した。

**時間的展望プロフィール** 個人の時間的展望プロフィールについて検討を行うため、ATAS-J の各下位尺度の得点を用いて群分けを行った。Andretta et al. (2013) に倣い、階層的

Table 3-1  
各尺度の平均値と標準偏差および  $\alpha$  係数 ( $N=196$ )

|              | <i>Mean</i> | <i>SD</i> | $\alpha$ 係数 |
|--------------|-------------|-----------|-------------|
| コミットメント形成    | 3.15        | 1.01      | .87         |
| コミットメントとの同一化 | 2.99        | 0.83      | .83         |
| 広い探求         | 3.79        | 0.80      | .83         |
| 深い探求         | 3.46        | 0.75      | .71         |
| 反芻的探求        | 3.73        | 0.78      | .73         |
| 過去肯定         | 3.43        | 0.81      | .82         |
| 過去否定         | 2.97        | 0.93      | .84         |
| 現在肯定         | 3.53        | 0.84      | .90         |
| 現在否定         | 2.73        | 0.91      | .87         |
| 未来肯定         | 3.22        | 0.89      | .92         |
| 未来否定         | 2.46        | 0.78      | .79         |

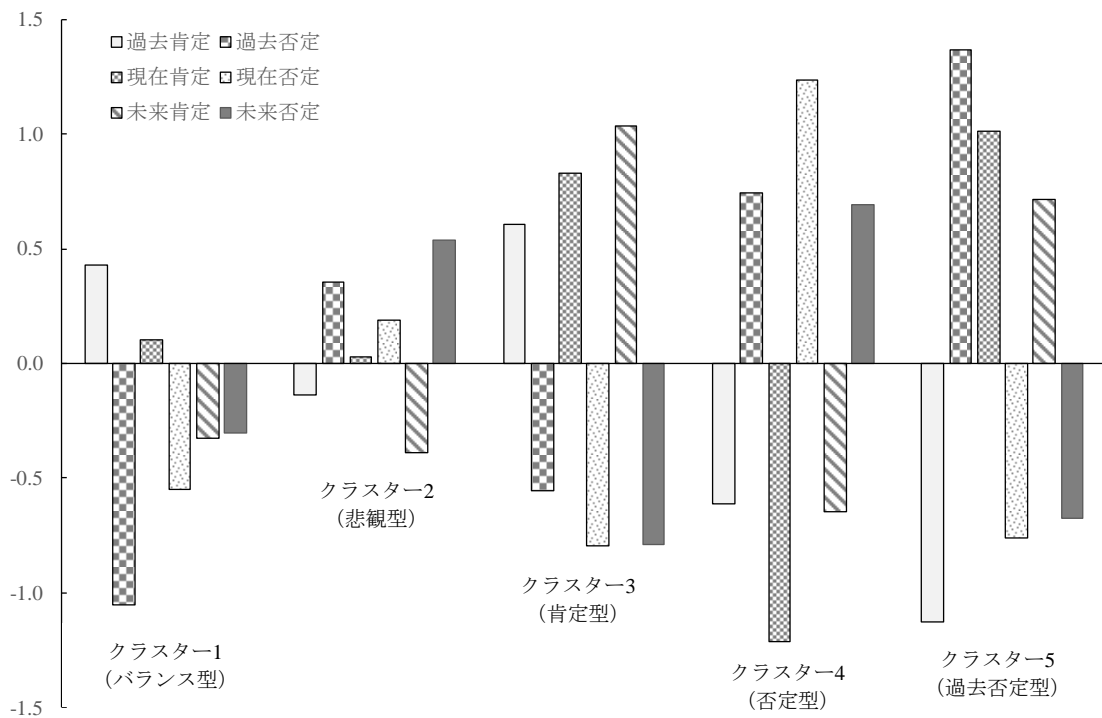


Figure 3-1. 時間的展望プロフィール

クラスター分析 (Ward 法, 平方ユークリッド距離) を行った。その結果, Figure 3-1 のような 5 つのクラスターが抽出された。Andretta et al. (2013) と同様の枠組みから, クラスター1 は「バランス型」, クラスター2 は「悲観型」, クラスター3 は「肯定型」, クラスター4 は「否定型」と解釈された。クラスター5 については, Andretta et al. (2013) では, 過去と現在に対しては否定的態度が強く, 未来に対しては肯定的態度が強いという特徴の楽観型というクラスターが抽出されていたが, 本研究では再現されなかった。本研究で抽出されたクラスターの特徴は, 過去と未来に関しては Andretta et al. (2013) と同様だった一方, 現在に関しては正反対で, 肯定的な態度を有していた。つまり, 現在と未来については肯定的な態度を有するが, 過去についてのみ否定的な態度を有する「過去否定型」のクラスターが抽出された。

### 時間的展望とアイデンティティの各形成プロセスとの関係の検討

各時間的展望と, アイデンティティの各形成プロセスとの関係について検討するため, ATAS と DIDS-J の各下位尺度間の相関係数を算出した (Table 3-2)。その結果, コミットメント形成と, 現在肯定の間に弱い正の相関, 未来肯定の間に中程度の正の相関, 現在否定の間に弱い負の相関, 未来否定の間に弱い負の相関がみられた。コミットメントとの同一

Table 3-2  
時間的展望とアイデンティティの形成過程の相関係数およびその信頼区間

|      | コミットメント形成 |             | コミットメントとの同一化 |             |  | 広い探求     |             | 深い探求     |             | 反芻的探求    |             |
|------|-----------|-------------|--------------|-------------|--|----------|-------------|----------|-------------|----------|-------------|
|      | <i>r</i>  | CI          | <i>r</i>     | CI          |  | <i>r</i> | CI          | <i>r</i> | CI          | <i>r</i> | CI          |
| 過去肯定 | .14*      | [.00 .28]   | .17*         | [.04 .31]   |  | .14      | [.00 .27]   | .03      | [-.11 .17]  | -.19**   | [-.32 -.05] |
| 過去否定 | -.19**    | [-.32 -.05] | -.15*        | [-.28 -.01] |  | .04      | [-.10 .18]  | .12      | [-.02 .26]  | .33**    | [.20 .45]   |
| 現在肯定 | .35**     | [.22 .47]   | .37**        | [.25 .49]   |  | .27**    | [.14 .40]   | .15*     | [.01 .29]   | -.16*    | [-.29 -.02] |
| 現在否定 | -.34**    | [-.46 -.21] | -.27**       | [-.39 -.13] |  | -.13     | [-.27 .01]  | -.06     | [-.20 .08]  | .27**    | [.13 .39]   |
| 未来肯定 | .54**     | [.43 .63]   | .63**        | [.53 .71]   |  | .43**    | [.31 .54]   | .32**    | [.19 .44]   | -.17*    | [-.31 -.03] |
| 未来否定 | -.44**    | [-.55 -.32] | -.51**       | [-.61 -.40] |  | -.39**   | [-.50 -.26] | -.27**   | [-.40 -.14] | .24**    | [.10 .37]   |

†*p*<.10, \**p*<.05, \*\**p*<.01

化と、現在肯定との間には弱い正の相関、未来肯定との間には強い正の相関、現在否定との間には弱い負の相関、未来否定との間に中程度の負の相関がみられた。広い探求に関しては、現在肯定との間に弱い正の相関、未来肯定との間に中程度の正の相関、未来否定との間に弱い負の相関がみられ、深い探求に関しては、未来肯定との間に弱い正の相関、未来否定との間に弱い負の相関がみられた。反芻的探求については、過去否定、現在否定、未来否定との間にそれぞれ弱い正の相関がみられた。

次に、アイデンティティの各形成プロセスを独立変数、各時間的展望を従属変数として重回帰分析（強制投入法）を行った。その際、多重共線性の問題を避けるため、そして標準偏回帰係数の解釈を適切に行うため、従属変数を各時間に対する肯定的な展望（過去肯定、現在肯定、未来肯定）とする分析と、従属変数を各時間に対する否定的な展望（過去否定、現在否定、未来否定）とする分析とに分けて行った。いずれの分析においても多重共線性の指標となる VIF は 1.15～1.66 であり、問題を示す経験的な基準である 10 を下回るものであった。それぞれの偏回帰係数と標準誤差および標準偏回帰係数、決定係数を Table 3-3 および Table 3-4 に示した。決定係数については、全ての下位尺度において有意となった ( $R^2 = .05 - .39$ ,  $F(3, 192) = 3.44 - 41.52$ ,  $p < .05$ )。標準偏回帰係数については、コミットメント形成を従属変数とした場合には未来肯定 ( $\beta = .52$ ,  $t(194) = 6.77$ ,  $p < .01$ ) と現在否定 ( $\beta = -.19$ ,  $t(194) = -2.41$ ,  $p < .05$ ) および未来否定 ( $\beta = -.38$ ,  $t(194) = -5.02$ ,  $p < .01$ )、コミットメン

Table 3-3  
肯定的な時間的展望によるアイデンティティの形成過程の重回帰分析の結果

|       | コミットメント形成 |      |         | コミットメントとの同一化 |      |         | 広い探求     |      |         | 深い探求     |      |         | 反芻的探求    |      |         |
|-------|-----------|------|---------|--------------|------|---------|----------|------|---------|----------|------|---------|----------|------|---------|
|       | <i>b</i>  | SE   | $\beta$ | <i>b</i>     | SE   | $\beta$ | <i>b</i> | SE   | $\beta$ | <i>b</i> | SE   | $\beta$ | <i>b</i> | SE   | $\beta$ |
| (切片)  | 1.17**    | 0.33 |         | 1.17**       | 0.25 |         | 2.51**   | 0.28 |         | 2.83**   | 0.27 |         | 4.63**   | 0.29 |         |
| 過去肯定  | -.03      | 0.08 | -.03    | -.01         | 0.06 | -.01    | .01      | 0.07 | .01     | -.06     | 0.07 | -.07    | -.13†    | 0.07 | -.14    |
| 現在肯定  | .05       | 0.09 | .04     | -.01         | 0.07 | -.01    | .01      | 0.08 | .01     | -.05     | 0.08 | -.06    | -.04     | 0.08 | -.05    |
| 未来肯定  | .59**     | 0.09 | .52     | .59**        | 0.07 | .64     | .37**    | 0.07 | .42     | .32**    | 0.07 | .38     | -.09     | 0.08 | -.10    |
| $R^2$ | .29**     |      |         | .39**        |      |         | .18**    |      |         | .11**    |      |         | .05*     |      |         |

†*p*<.10, \**p*<.05, \*\**p*<.01

Table 3-4  
否定的な時間的展望によるアイデンティティの形成過程の重回帰分析の結果

|       | コミットメント形成 |           |         | コミットメントとの同一化 |           |         | 広い探求     |           |         | 深い探求     |           |         | 反芻的探求    |           |         |
|-------|-----------|-----------|---------|--------------|-----------|---------|----------|-----------|---------|----------|-----------|---------|----------|-----------|---------|
|       | <i>b</i>  | <i>SE</i> | $\beta$ | <i>b</i>     | <i>SE</i> | $\beta$ | <i>b</i> | <i>SE</i> | $\beta$ | <i>b</i> | <i>SE</i> | $\beta$ | <i>b</i> | <i>SE</i> | $\beta$ |
| (切片)  | 4.71 **   | 0.26      |         | 4.22 **      | 0.21      |         | 4.40 **  | 0.21      |         | 3.70 **  | 0.20      |         | 2.68 **  | 0.21      |         |
| 過去否定  | .08       | 0.08      | .08     | .11          | 0.07      | .12     | .23 **   | 0.07      | .27     | .24 **   | 0.06      | .30     | .21 **   | 0.07      | .25     |
| 現在否定  | -.21 *    | 0.09      | -.19    | -.06         | 0.07      | -.06    | -.01     | 0.07      | -.01    | -.01     | 0.07      | -.01    | .09      | 0.07      | .11     |
| 未来否定  | -.50 **   | 0.10      | -.38    | -.57 **      | 0.08      | -.53    | -.51 **  | 0.08      | -.50    | -.38 **  | 0.08      | -.40    | .08      | 0.08      | .08     |
| $R^2$ | .22 **    |           |         | .27 **       |           |         | .21 **   |           |         | .15 **   |           |         | .13 **   |           |         |

†  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

トとの同一化を従属変数とした場合には未来肯定 ( $\beta = .64, t(194) = 8.93, p < .01$ ) と未来否定 ( $\beta = -.53, t(194) = -7.16, p < .01$ ), 広い探求を従属変数とした場合には未来肯定 ( $\beta = .42, t(194) = 5.04, p < .01$ ) と過去否定 ( $\beta = .27, t(194) = 3.47, p < .01$ ) および未来否定 ( $\beta = -.50, t(194) = -6.47, p < .01$ ), 深い探求を従属変数とした場合には, 未来肯定 ( $\beta = .38, t(194) = 4.35, p < .01$ ) および過去否定 ( $\beta = .30, t(194) = 3.80, p < .01$ ) と未来否定 ( $\beta = -.40, t(194) = -4.99, p < .01$ ), そして反芻的探求を従属変数とした場合には過去肯定 ( $\beta = -.14, t(194) = -1.85, p < .10$ ) と過去否定 ( $\beta = .25, t(194) = 3.06, p < .01$ ) を独立変数とした係数が有意もしくは有意傾向となった。

### 時間的展望プロフィールとアイデンティティの各形成プロセスとの関係の検討

時間的展望プロフィール間で, DIDS-J の各下位尺度の得点の平均値に差がみられるかを検討するため, DIDS-J の各下位尺度の得点を従属変数, 時間的展望プロフィール群を独立変数とした 1 要因 5 水準の分散分析を行った。その結果, コミットメント形成 ( $F(4, 191) = 10.98, p < .01, \eta^2_p = .22$ ), コミットメントとの同一化 ( $F(4, 191) = 14.75, p < .01, \eta^2_p = .24$ ), 広い探求 ( $F(4, 191) = 3.76, p < .01, \eta^2_p = .07$ ), 深い探求 ( $F(4, 191) = 2.86, p < .05, \eta^2_p = .06$ ), 反芻的探求 ( $F(4, 191) = 3.28, p < .01, \eta^2_p = .07$ ) のすべてにおいて有意差がみられた。Tukey 法による調整を行った多重比較の結果, コミットメント形成は, 否定型とその他の型との間 (悲観型との間は 5%水準 ( $d = 0.59$ ), その他は 1%水準 ( $d = 0.83 - 1.41$ )), 悲観型と肯定型 ( $p < .01, d = 0.76$ ), 過去否定型 ( $p < .10, d = 0.88$ ) との間において有意差が見られ, 否定型および悲観型の得点が低かった。コミットメントとの同一化については, バランス型と悲観型, 肯定型と過去肯定型を除いて, 全ての型間に有意差が見られた (否定型とバランス型および悲観型, バランス型と過去否定型の間は有意傾向 ( $d = 0.53 - 1.07$ ), 悲観型と過去否定型の間は 5%水準 ( $d = 0.97$ ), その他は 1%水準 ( $d = 0.91 - 1.38$ ))。得点は, 肯定型と過去否定型, バランス型と悲観型, 否定型の順に高かった。広い探求については, 肯定型とバラン

Table 3-5  
各時間的展望プロフィールにおけるアイデンティティの形成過程の平均値と標準偏差

|              | バランス型<br>(n = 36) |      | 悲観型<br>(n = 48) |      | 肯定型<br>(n = 53) |      | 否定型<br>(n = 49) |      | 過去否定型<br>(n = 10) |      |
|--------------|-------------------|------|-----------------|------|-----------------|------|-----------------|------|-------------------|------|
|              | M                 | SD   | M               | SD   | M               | SD   | M               | SD   | M                 | SD   |
| コミットメント形成    | 3.25              | 0.90 | 3.03            | 0.92 | 3.68            | 0.80 | 2.47            | 0.97 | 3.86              | 1.05 |
| コミットメントとの同一化 | 2.90              | 0.58 | 2.88            | 0.72 | 3.51            | 0.73 | 2.48            | 0.80 | 3.62              | 0.96 |
| 広い探求         | 3.64              | 0.70 | 3.69            | 0.86 | 4.12            | 0.59 | 3.61            | 0.90 | 3.98              | 0.82 |
| 深い探求         | 3.36              | 0.82 | 3.48            | 0.75 | 3.64            | 0.69 | 3.23            | 0.73 | 3.86              | 0.60 |
| 反芻的探求        | 3.57              | 0.71 | 3.88            | 0.75 | 3.49            | 0.87 | 3.99            | 0.66 | 3.54              | 0.67 |

ス型 ( $p < .05, d = 0.75$ ), 悲観型 ( $p < .05, d = 0.59$ ), 否定型 ( $p < .01, d = 0.68$ ) との間に有意差が見られ, 肯定型の得点が高かった。深い探求については肯定型と否定型の間 ( $p < .05, d = 0.58$ ) に有意差が見られ, 肯定型の得点が高かった。反芻的探求については, 肯定型と悲観型 ( $p < .10, d = 0.48$ ), 否定型 ( $p < .01, d = 0.64$ ), およびバランス型と否定型との間 ( $p < .10, d = 0.62$ ) に有意差および有意傾向が見られた。肯定型とバランス型の得点が低かった。各時間的展望プロフィールにおける DIDS-J の各下位尺度の得点を Table 3-5 に示した。

#### 4. 考察

本研究の目的は, 時間的展望とアイデンティティ形成プロセスとの関連について検討することであった。大学生を対象に質問紙調査を行い, アイデンティティ形成の二重サイクルモデル (Luyckx, Goossens, Soenens et al., 2006) に基づくアイデンティティの各形成プロセスと, 過去, 現在, 未来それぞれに対する展望の持ち方, およびそれらの組み合わせから成る時間的展望プロフィールとの関連について検討した。

##### 各時間に対する展望とアイデンティティの形成プロセス

ATAS-J と DIDS-J の相関係数および重回帰分析の結果, 各時間に対する展望とアイデンティティの各形成プロセスとの関連は, およそ仮説通りの結果であった。過去に対する時間的展望については, 重回帰分析の結果, 過去に対する否定的な展望が, 反芻的探求を含む全ての探求と関連することを示し, 過去に対する肯定的な展望については, 反芻的探求との関連のみが見られた。水間 (2002) は, 自己を形成する意識の 1 つに否定性変容志向があることを指摘しており, 自己の形成は, 嫌な自分を変えようとする否定的な志向からも進むと考えられている。本研究の結果は, こうした否定的な志向が主に過去に対する否定的

な展望から成り、コミットメントの様々な選択肢について思案する探求のプロセスに関わることを示唆している。

一方で過去に対する否定的な展望は、反芻的探求とも関連することが示された。探求の否定的側面である反芻的探求については、想定された通り未来に対する否定的な展望、そして現在に対する否定的な展望とも正の相関がみられているが、重回帰分析の結果からは、過去に対する否定的な展望の影響のみが示されている。過去否定の偏回帰係数の値は、現在否定および未来否定の影響を統制したときの影響を表すものであり、同様にして現在否定の場合には過去否定と未来否定を、未来否定に関しては過去否定と現在否定を統制したときの影響である。他の時間を統制した場合に、過去否定のみが反芻的探求に説明力を持つことは、否定的展望の中でも、過去が独自に持つ否定的な展望によって、反芻的探求に陥りやすいことを示している。日瀧・齊藤 (2007) では、過去と他の時間との関連が見出されており、石川 (2014) では、過去を受容していくことで、希望や目標を持つことができるとされている。つまり、現在や未来に対する否定的な展望と反芻的探求との間に見出された正の相関は、過去に対する否定的展望から生み出されたものと考えられる。進路選択においても過去を問い直すことが有用とする白井 (2001) の知見も、過去に対する展望がアイデンティティの探求と関わることを支持しており、さらに、日瀧・齊藤 (2007) や石川 (2014) の知見からは、そうした過去の否定的な出来事を受容を促していくことで、反芻的探求という探求の否定的側面は抑えられる可能性を示唆している。

アイデンティティの形成と関連するのはこうした過去に対する展望のみではなく、むしろ主には未来に対する展望がアイデンティティの形成と関わる。重回帰分析の結果、反芻的な探求を除くすべてのアイデンティティ形成プロセスに対して、未来に対する肯定的な展望は正の影響を、未来に対する否定的な展望は負の影響を持つことが示された。つまり、アイデンティティ形成の *dual-cycle* には、未来に対する時間的展望が大きく作用するという仮説は支持された。先述した水間 (2002) においても、否定性変容志向の他に、理想自己志向および自己成長志向という 2 つの自己形成に関する意識が見出されている。理想的な自己や自己の成長といった肯定的な未来展望を持つこと、否定的な未来展望を持たないことが、コミットメントを形成し、維持し、またそれを深めていくために探求をしていくといったアイデンティティを形成するすべてのプロセスに関わる。溝上・中間・畑野 (2016) においても、自己形成活動が未来展望を介してアイデンティティ形成に影響を及ぼすことが示されている。溝上他 (2016) の知見が再現されたことに加え、さらに本研究においては、

標準偏回帰係数の大きさから、肯定的な未来展望は特にコミットメントの次元に強い影響を与えること、否定的な未来展望はそれに加えて広い探求にも強い影響を与えることが示された。肯定的な未来展望を持つことで、特定のコミットメントを形成したり、同一化したりできる一方、否定的な未来展望を持つと、広く他の選択肢について思案することも強く妨げてしまうことが示唆された。

現在に対する時間的展望については、アイデンティティ形成のコミットメントの次元に関わると予想されたが、本研究で示された影響は、限定的なものであった。相関係数からは、現在に対して肯定的であればコミットメントの形成と同一化、広い探求をしており、現在に対して否定的であれば、コミットメントの形成や同一化をせず、反芻的探求をしている傾向がみられた。一方で重回帰分析の結果は、現在否定のコミットメント形成に対する影響を除き、その他の影響は示されなかった。過去展望や未来展望の得点が一定である場合に現在展望が影響力を持たないのは、過去や未来への展望は、現在を起点としており(都筑, 1999)、先述した通り、各時間に対する展望がそれぞれ関連を持つ(日湯・齊藤, 2007; 石川, 2014)ためと考えられる。つまり、肯定的あるいは否定的な過去や未来に支えられる肯定的、否定的な現在展望が、コミットメントの各次元や広い探求、反芻的探求と関連していると考えられる。しかし現在に対する否定的な展望は、過去や未来に対する否定的な展望の影響を統制した際にも、コミットメント形成に対して否定的な影響を与えることが示された。過去の体験や、未来の希望や目標に関わらず、現在をどのように捉えて生きているかが、コミットメントを形成していくことには関わっており、特に、現在を否定的に捉えていると、コミットメントを形成することができないと考えられる。青年期において特に重要な側面は未来と考えられてきており(都筑, 1999)、現在に関する十分な先行知見はないものの、先述した園田(2003)は、アイデンティティの確立と関連の深い進路選択に関して、現在に対する肯定的な態度の重要性を指摘しており、本研究における結果もこれを支持するものである。過去や未来とつながった現在に対して肯定的な展望を持つこと、そして過去や未来には縛られず現在を否定的に捉えないことが、アイデンティティの形成、特にコミットメントの形成と関連すると考えられる。

### 日本人青年の時間的展望プロフィール

ATAS-Jのクラスター分析の結果示された日本人青年の時間的展望プロフィールは、先行研究におけるプロフィールとは一部異なるものであった。Andretta et al. (2013)では抽出さ

れなかった、現在と未来については肯定的な態度を有するが、過去についてのみ否定的な態度を有する「過去否定型」のクラスター5 が抽出された。日本人の大学生を対象として、個人の時間的展望の持ち方を検討した日瀧・齊藤 (2007) においても、過去にのみ否定的な態度を持ち、現在と未来については肯定的な態度を持つ群が見出されている。一方で Andretta et al. (2013) では、過去に加えて現在も否定的で、未来のみが肯定的というクラスターが抽出されている。また、クラスター1 の「バランス型」、クラスター2 の「悲観型」に関しても、Andretta et al. (2013) と比較すると、現在肯定の得点が平均よりも高くなっていたため、現在の肯定的な態度については文化によって差異がみられる可能性がある。Andretta et al. (2013) とは若干異なる結果が得られていることに留意し、日本独自の特徴として理解していくことに加え、今後こうした文化的な差異についての観点も踏まえた国際的な研究を行う必要があるだろう。

### 時間的展望プロフィールとアイデンティティの形成プロセス

時間的展望プロフィールによるアイデンティティの形成プロセスの違いを検討した分散分析の結果、先行研究で適応的とされるバランス型のプロフィールを持つ青年のコミットメントとの同一化や広い探求は、悲観型と有意差がみられない水準で低かった。一方、反芻的探求に関しても、肯定型などと有意差がみられない水準で低かった。Andretta et al. (2013) においては、同様の時間的展望プロフィールは肯定的なプロフィールとされているが、日本においては異なる可能性が示唆される。実際に、過去に対して肯定的な展望を持ち、現在や未来に対しては平均的かやや否定的な展望を持つというプロフィールは、日瀧・齊藤 (2007) においても見られているが、精神的健康は良好ではないことが示されている。むしろすべての時間に対して肯定的な展望を持つ群において精神的な健康は良好であることが示されており、本研究における分散分析の結果も、肯定型の青年が最も、アイデンティティの形成プロセスに傾倒していることを示している。日本人青年のアイデンティティ形成にとっては、肯定型のプロフィールが最適な状態と考えられる。先述した通り、Bonniwell and Zimbardo (2004) は、Balanced Time Perspective という概念を提唱し、それ以降の研究では、過去、現在、未来のバランスが重視されているが、その具体的な内容については未だ明らかにされていないため、アイデンティティを含む様々な概念との関連において、文化差を含めて明らかにしていく必要がある。

日本独自のプロフィールとして抽出された過去否定型は、どのアイデンティティ形成プ



ロセスにおいても肯定型との有意差が見られず、反芻的探求を除きいずれも高い水準であり、反芻的探求は低い水準だった。日瀉・齊藤 (2007) でみられた同様の群では、過去の否定的な出来事を受け止めて、未来を肯定的に捉えようとする意識がみられている。過去に対して否定的であっても、そこから現在および未来を肯定的に捉えようとすることで、全ての時間に対して肯定的な展望を持つ群と変わらない水準で、アイデンティティの各形成プロセスに傾倒できると考えられる。過去の否定的な展望が広い探求や深い探求を促すという重回帰分析の結果とも整合的である。そして、重回帰分析の結果は、否定的な過去展望が反芻的探求を促してしまうことを示していたが、プロフィールとして検討した結果、現在や未来に対して肯定的な展望を持てていれば、反芻的探求は低くなることも明らかになった。否定的な過去を意味づけることが自己の様々な感情と関わることを示されているため (松下, 2007)、今後は、現在や未来を肯定的に捉えようとすることで起こる過去展望の縦断的な変化について、文化的な観点も踏まえて、検討を行う必要がある。

否定型と悲観型は、コミットメント形成以外の指標では有意差が見られず、コミットメントとの同一化、2つの探求は低い水準で、反芻的探求については高い水準であった。上述の通り、重回帰分析の結果、未来展望はアイデンティティの各形成プロセスに対して強い影響力を持つことが明らかとなっている。否定型と悲観型は未来に対する否定的な展望が共通特徴であり、肯定的な未来展望が持てないために、アイデンティティの各形成プロセスに傾倒しにくいと考えられる。一方、有意差の見られたコミットメント形成に対しては、現在に対する否定的な展望が影響していることが、重回帰分析の結果から示されている。否定型に比べて悲観型は、現在に対して否定的ではない点の特徴であり、否定的な現在展望が弱いため、悲観型は否定型に比べるとコミットメントの形成を行うことが可能と考えられる。白井 (1997) では、調査対象の大学生の内、76.2%が過去や未来よりも現在への指向性を高く持っていることが示されているため、現在に対する展望に何らかの介入を行うことで、時間的展望プロフィールが変化し、コミットメントの形成を促すことができると考えられる。

## 今後の課題

アイデンティティ形成と時間的展望は相互に影響を与え合うことが指摘されているため (Luyckx, Lens, Smits, & Goossens, 2010; Shirai, Nakamura, & Katsuma, 2012)、今後は縦断研究を行い、その相互影響過程について明らかにしていく必要がある。

## 第2節 時間的態度および時間的指向性とアイデンティティ形成との関連—— 形成プロセスとプロダクトの両側面からの検討——（研究4）

### 1. 問題と目的

人は、過去から現在、そして未来へという時間の流れの中で生きており、その流れの中で自分というものを確立させていく。木村 (1982) は、その著書「時間と自己」の中で、時間が時間として流れているという感じと、自分が自分として存在しているという感じとは、同じことであると述べている。心理学領域において、前者は時間的展望、後者はアイデンティティとして扱われ、その関連についても検討がなされてきている。

時間的展望とは、ある一定の時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体 (Lewin, 1951 猪股訳 1979) のことであり、その獲得時期は青年期とされる。他方、アイデンティティは、個人が自分の内部に斉一性と連続性を感じられることと、他者がそれを認めてくれることの、両方の事実の自覚であるとされる (Erikson, 1968 西平・中島訳 2011)。都筑 (1993) は、アイデンティティの達成は、過去、現在、未来の時間的な流れの中での自己についての継続性や統合性の意識の上に初めて成り立つものであるため、その基礎には時間的展望の確立が必要であるとしている。アイデンティティの確立は青年期の発達課題であり (Erikson, 1963 仁科訳 1977)、その基盤となる時間的展望との関係を明らかにすることは、青年期発達の理解やその支援にとって重要なことと考えられる。

時間的展望とアイデンティティとの関連はこれまでも検討されてきている。上述の都筑 (1993) においては、アイデンティティ・ステータスと時間的展望との関連が検討され、アイデンティティ達成地位は未来指向的であり、各時間を最も統合させた形で捉えていること、反対に拡散地位では過去指向的であることが示されている。Rappaport, Enrich, and Wilson (1985) や都筑 (1994), Shirai, Nakamura, and Katsuma (2012) などにおいても、同様にアイデンティティ・ステータスによる時間的展望の持ち方の違いが示されており、総じて、アイデンティティ達成地位において各時間の統合が進んでおり、未来指向的で肯定的な展望を持っていることが示されている。人生の選択肢や目標、計画等に関する決定を現実的に行う能力が向上することで、青年の未来への意識は増加していくと考えられており (Greene, 1986; Poole & Cooney, 1987)、認知能力の発達に伴う未来指向的かつ肯定的な将来展望が、アイデンティティ確立の基礎となっていると考えられる。

時間的展望とアイデンティティを扱った先行研究の多くは、アイデンティティ・ステータスの観点から検討がなされている。アイデンティティ・ステータス (Marcia, 1966) とは、自分のアイデンティティに関する事柄について、積極的に傾倒できると感じられるもの (コミットメント) を持っているか、および、それを問い直したり探求したりする経験を持っているかの 2 つの観点から判断され、その両方を持つアイデンティティ達成地位に至ることがゴールと考えられてきた。しかし、研究の進展に伴い、アイデンティティ達成地位から別の地位への移行が起こることが示されるなど (Stephen, Fraser, & Marcia, 1992), アイデンティティの探索は繰り返し起こるものであることが明らかとなった。つまり、アイデンティティ・ステータスは、繰り返されるアイデンティティ探求のプロセスの途上を表しているにすぎないと考えられる。それにも関わらず、アイデンティティ・ステータスのモデルでは、個人を分類することに主眼が置かれているため、各ステータスにおけるコミットメントや探求の状態について詳細な検討ができない。アイデンティティの確立と、その基礎に位置づく時間的展望との関係を理解するためには、より詳細な形成プロセスと時間的展望との関連を検討していく必要がある。

アイデンティティ形成の詳細なプロセスに関するモデルとして、Crocetti, Rubini, and Meeus (2008) は、アイデンティティ形成の 3 次元モデルを提唱している。このモデルは、コミットメント、コミットメントに対する深い探求、コミットメントの再考という 3 側面からなるサイクルとして、アイデンティティの形成過程を捉えている。Crocetti et al. (2008) はこれら 3 次元を測定する尺度も開発しており (Utrecht-Management of Identity Commitments Scale), 現在は日本を含む 4 か国において翻訳版が作成され、信頼性と妥当性が報告されている。日本版の尺度を作成した畑野・杉村 (2014) は、これら 3 つの次元について以下のように説明している。つまり、コミットメントは、青年が発達の様々な領域について行った選択や、そうした選択から引き出される自信を指し、深い探求は、青年が現在のコミットメントについて熟考したり、さらなる情報を収集したり、他者と話をしたりする程度を表し、コミットメントの再考は、青年が現在のコミットメントに満足できず、それを放棄したり、新たなコミットメントを求めることを示す。アイデンティティ形成の 3 次元モデルは、プロセス重視の他のモデルとも中心的な考えを共有しており (e.g., Bosma & Kunnen, 2001), アイデンティティ形成のプロセスを、環境との相互作用の中で、コミットメントを絶えず見直していく営みと捉えている。アイデンティティの確立は、コミットメントとその深い探求、そしてその再考を繰り返しながら進んでいくと考えられる。

こうしたアイデンティティの形成プロセスは、そのプロセスを経て生み出されるプロダクトと合わせて検討する必要がある。これまでのアイデンティティ研究では「できあがった結果としての」斉一性・連続性の感覚を捉えてきた一方、近年のプロセスやメカニズムを捉えようとする研究では、斉一性・連続性の感覚を維持していく「営みあるいは働き」を捉えている(杉村, 2008)。溝上(2008)や、畑野・杉村・中間・溝上・都筑(2014)においても前者と後者をそれぞれプロダクト、プロセスとして弁別して捉えている。しかし、後者のようなアイデンティティの形成プロセスは、前者のプロダクト、つまり斉一性・連続性の感覚に応じて異なる意味や働きを持つ可能性がある。例えば、斉一性・連続性の感覚がまだ不明確な段階ではいろいろな選択肢を模索することは肯定的な意味を持つが、明確になってきた段階では自身の決定が揺らぐ否定的な徴候を表すかもしれない。Schwartz(2007)も、前者のようなプロダクトと、後者のようなプロセスの両側面からアイデンティティを理解していくことの重要性を指摘している。時間的展望とアイデンティティ形成との関連を検討する際にも、プロダクトとプロセスの両側面から、総合的に検討する必要がある。

プロダクトとしての斉一性・連続性の感覚は、アイデンティティの感覚として捉えられている。アイデンティティの感覚について谷(2008)では、アイデンティティの確立と拡散の相対的達成によって得られる感覚とされている。また、畑野ほか(2014)は、アイデンティティの感覚を測定しようとするアプローチは、アイデンティティ形成の結果に着目したアプローチとしている。アイデンティティの感覚は、形成プロセスを経て生み出されたプロダクトを表すものと考えられるのである。時間的展望の様相、時間的展望とアイデンティティ形成プロセスとの関連は、アイデンティティの感覚によって異なると予想される。

時間的展望の様相は、アイデンティティ形成のプロダクト、つまりアイデンティティの感覚の高さによって異なると考えられる。都筑(1993)や都筑(1994)、白井(1997)、Shirai, Nakamura, and Katsuma(2012)、Laghi, Baiocco, Liga, Guarino, and Baumgartner(2013)などにおいては、未来への意識と各時間に対する意識の統合、各時間への肯定的な態度が、アイデンティティの確立と関連していると指摘されている。一方で河野(2003)は、青年期に体験される時間的展望の変化として、現在への意識が高い段階から未来への意識が高い段階、そしてまた現在への意識が高い段階へという変遷があると指摘しており、未来のみでなく、現在への意識も青年期を通して増加していくと考えられ、こうした両時間への意識の増加がアイデンティティの確立の基礎となっていることが予想される。過去に関しては、先行

知見の少なさが指摘され (勝俣, 1995; 奥田, 2001, 2002b), 数少ない先行研究では主に中年期以降に高まりや影響が指摘されているが (日瀧・岡本, 2008), 最近では青年期においても知見が出されてきている (千島, 2016; 石川, 2014)。千島 (2016) は, 青年期における自己変容に関する志向性の発達について時間的展望の観点から検討し, 過去焦点的な志向性から, 将来焦点的な志向性へと発達していくことを示している。アイデンティティは, 幼少期に主として同一化によって形成された様々な自己像を青年期に統合していくことで明確になっていく (Erikson, 1968 西平・中島訳 2011) ことも踏まえると, 過去への意識に関しては, アイデンティティ確立の初期においてその基盤になると考えられる。また石川 (2014) では, 過去の捉え方による目標意識の差異が検討され, 過去を過去として受容し, 現在や未来とつながるものとして捉えていると, 希望や将来目標を持つことが示されている。そのため, アイデンティティの感覚が低い場合には過去への意識は高く, その後, 過去を過去として受容していくことで現在への意識と未来への意識が増加し, それに伴って過去への意識は減少していくと考えられる。さらに, 各時間に対して肯定的な態度を持つようになり, それぞれの時間への意識同士の関連が増していくことが, アイデンティティの確立を進めていく下支えになると考えられる。

時間的展望と形成プロセスの 3 側面との関連についても, アイデンティティの感覚の高さによって異なると考えられる。先述した通り, アイデンティティは, 幼少期の同一化による様々な自己像を統合していくことで明確になっていくため, アイデンティティの感覚が低い場合には, 過去への意識がコミットメントの形成や深い探求を行う基盤となると考えられる。神谷 (2008) においても, 無意図的に想起される自分自身に関する過去の記憶には, 過去の自分と現在の自分とを結び付け, 連続性の感覚を付与する役割があると指摘している。一方で, アイデンティティの確立が進んでいくことには, 現在のコミットメント対象と向き合い, 将来を見通して自己決定を行っていくことなどが伴う。そのため, アイデンティティの感覚が高い場合には, 現在および未来を意識することが, コミットメントの探求や再考に必要と思われる。アイデンティティの感覚が低い場合には, 過去への意識や態度と各プロセスに, アイデンティティの感覚が高い場合には, 現在や未来への意識や態度と各プロセスに関連がみられると予想される。

以上のことから本研究では, 青年期における時間的展望とアイデンティティ形成の関連について, そのプロセスとプロダクトの両側面から検討することを目的とする。プロダクトについてはアイデンティティの感覚, プロセスについては Crocetti et al. (2008) の 3 次元

モデルに基づいて検討する。時間的展望に関しては、認知的側面と感情的・態度的側面の2つの側面があることが指摘されている(都筑, 1982, 1999)。認知的側面と感情的・態度的側面のそれぞれとアイデンティティの関連については先行知見が積み重ねられてきた(白井, 2003)。一方、これらの2側面がアイデンティティ形成に対して持つ働きの相違については明確にされていない。本研究では、認知的側面と感情的・態度的側面の両側面とアイデンティティ形成との関連をみることで、それらの働きの相違についても検討する。その際、本研究ではその両側面の指標として時間意識と時間的態度を用いる。上述の白井(2003)では、時間的展望とアイデンティティの関連についての先行知見をまとめて記述する際、時間的指向性と時間的態度が時間的展望の指標とされている。都筑(1982, 1999)において、時間的態度は感情的・態度的側面とされており、時間的指向性は、密度や方向と関連する認知的側面の1つと考えられる。しかし、認知的側面の指標として先行研究で扱われてきた時間的指向性には、最も認知的に優勢な時間しか検討できないという問題点がある(石井, 2015b)。そのため本研究では、過去・現在・未来に対する個人の意識と定義され(河野, 2003)、時間的指向性の下位概念として概念整理された時間意識(石井, 2015b)を認知的側面の指標とし、過去、現在、未来それぞれへの程度意識を向けているのかについて検討する。感情的・態度的側面の指標とする時間的態度は、過去・現在・未来に対する感情的評価(白井, 1994a)と定義される。なお、アイデンティティ形成は青年期後期に本格化すること(杉村, 2008)、大学生においてアイデンティティの感覚が強くなっていくことが示されていること(谷, 2001)から、大学生を中心とした18~26歳の青年を対象とする。

## 仮説

(1) 時間的展望とアイデンティティ形成のプロダクトに関連があるとすると、アイデンティティの感覚と時間的展望との間に以下のような関連がみられる。(1a) アイデンティティの感覚が高い群ほど、現在への意識と未来への意識は高く、過去への意識は低い。(1b) アイデンティティの感覚が高い群ほど、各時間に対する意識同士の関連が強くなる。(1c) 各時間への態度は、アイデンティティの感覚が高い群ほど、肯定的になる。

(2) 時間的展望とアイデンティティ形成プロセスとの関連が、プロダクトの様相に応じて異なるとすると、アイデンティティの感覚によって、時間的展望と各プロセスとの関連には以下のような差異がみられる。つまり、アイデンティティの感覚が低い群では、過去への意識や態度と各プロセスに、アイデンティティの感覚が高い群では、現在や未来への意

識や態度と各プロセスに関連がみられる。

## 2. 方法

### 調査協力者

4年制の国立大学と私立大学，2年制の私立短期大学，専門学校の学生計108名（男性26名，女性82名；平均年齢20.5歳，年齢範囲18～26歳）。

### 時期

2014年6月から7月，および2015年7月。

### 手続き

Web アンケート Qualtrics を用いて質問紙調査を行った。調査への協力依頼は各学校の心理学関連科目の講義時間内に行った。調査協力者への倫理的配慮として，調査は無記名式であること，回答は任意であり，いつでも中断できること，回答しなかったことや途中でやめたことによって不利益を被らないことを，調査依頼シートおよび調査のフェイスページに明記した上，調査協力依頼の際にも口頭で説明した。

### 調査内容

**アイデンティティの感覚** 多次元自我同一性尺度（谷，2001）を用いた。この尺度は「自己斉一性・連続性」，「対自的同一性」，「対他的同一性」，「心理社会的同一性」各5項目ずつの4下位尺度，計20項目からなる。自己斉一性・連続性は「過去において自分をなくしてしまったように感じる」，対自的同一性は「自分が望んでいることがはっきりしている」，対他的同一性は「自分のまわりの人々は，本当の私を分かっていないと思う」，心理社会的同一性は「現実の社会の中で，自分らしい生き方ができると思う」などの項目からなる。谷（2001）では，本尺度の内的整合性および再検査法による信頼性，併存的妥当性，構成概念的妥当性が確認されている。項目の回答形式は「1 全くあてはまらない」「2 ほとんどあてはまらない」「3 どちらかというにあてはまらない」「4 どちらともいえない」「5 どちらかというにあてはまる」「6 かなりあてはまる」「7 非常にあてはまる」の7件法で，得点が高いほどアイデンティティの感覚を感じていることが示されるように得点化した。

**アイデンティティ形成のプロセス** 畑野・杉村 (2014) の日本版アイデンティティ・コミットメント・マネジメント尺度 (以下 U-MICSJ) を用いた。この尺度は、ユトレヒト版アイデンティティ・コミットメント・マネジメント尺度 (Crocetti, Rubini, & Meeus, 2008) の翻訳版であり、教育領域と対人関係領域におけるコミットメント、深い探求、コミットメントの再考の程度を測定するものである。それぞれ「コミットメント」5項目、「深い探求」5項目、「コミットメントの再考」3項目の3下位尺度、計13項目からなる。本研究では、畑野・杉村 (2014) において内的整合性による信頼性および因子的妥当性、併存的妥当性が十分に確認された教育領域の尺度のみを用いた。コミットメントは「私の教育は私に、人生における安心を与えてくれる」、深い探求は「私は自分の教育について多くのことを知ろうととても努力している」、コミットメントの再考は「私はよく、別の教育を見つけるようにした方がよいと考える」などの項目からなる。項目の回答形式は「1 あてはまらない」「2 どちらかといえばあてはまらない」「3 どちらともいえない」「4 どちらかといえばあてはまる」「5 あてはまる」の5件法で、得点が高いほどそれぞれのプロセスに傾倒していることが示されるように得点化した。

**時間意識** 河野 (2003) の概念定義に基づいて作成された石井 (2015b) の、時間意識尺度を用いた。この尺度は、現在、未来、過去への意識の高さをそれぞれ測定する「現在意識」5項目、「未来意識」3項目、「過去意識」4項目の3下位尺度、計12項目からなる。現在意識は「今を一生懸命生きている」、未来意識は「未来の自分を想像することがある」、過去意識は「昔のことを思い出すことがある」などの項目からなる。石井 (2015b) では、本尺度の内的整合性による信頼性、構成概念妥当性が検討されている。項目の回答形式は U-MICSJ と同様の5件法で、得点が高いほど、それぞれの意識を高く持つことが示されるように得点化した。

**時間的態度** 時間的展望体験尺度 (白井, 1994a) を用いた。この尺度は、未来に対する時間的態度を測定する「目標指向性」5項目と「希望」4項目、現在に対する時間的態度を測定する「現在の充実感」5項目、過去に対する時間的態度を測定する「過去受容」4項目の4下位尺度、計18項目からなる。目標指向性は「私には将来の目標がある」、希望は「私の将来には希望がもてる」、現在の充実感は「毎日の生活が充実している」、過去受容は「私は自分の過去を受け入れることができる」などの項目からなる。白井 (1997) では本尺度の内的整合性による信頼性、構成概念妥当性が確認されている。項目の回答形式は U-MICSJ と同様の5件法で、得点が高いほど時間的態度が肯定的であることが示されるように得点



化した。

## 結果

### 各尺度の構成と記述統計量および群分け

**尺度構成と記述統計量** 先行研究での尺度構成に従い、多次元自我同一性尺度とU-MICSJ、時間意識尺度および時間的展望体験尺度の各項目の得点を合計し、そのそれぞれの平均値を各下位尺度の得点とした。また、各下位尺度それぞれの内的整合性を検討するため、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出した。過去意識はやや低めの値となったため、結果の解釈には慎重になる必要はあるが、以下ではすべての下位尺度を分析対象とした。なお、多次元自我同一性尺度に関しては、谷(2001)において全項目を合計した総得点を用いて発達の観点からの構成概念妥当性が示されていること、本研究においても総得点において.92という高い内的一貫性が得られたことから、群分けの変数として総得点を用いた。各尺度の得点の平均値と標準偏差および $\alpha$ 係数をTable 4-1に示した。

**群分け** アイデンティティの感覚の高さによる時間的展望の差異について検討を行うため、多次元自我同一性尺度の総得点を用いて群分けを行った。多次元自我同一性尺度の全項目の得点を合計し、その平均値をアイデンティティの感觉得点とした。アイデンティティの感觉得点が調査協力者全体のうち下位1/3の協力者36名をアイデンティティの感覚低

Table 4-1  
各尺度の平均値と標準偏差および $\alpha$ 係数 (N=108)

|               | Mean | SD   | $\alpha$ 係数 |
|---------------|------|------|-------------|
| 多次元自我同一性尺度総得点 | 3.97 | 0.97 | .92         |
| コミットメント       | 3.10 | 0.87 | .85         |
| 深い探求          | 3.21 | 0.84 | .81         |
| コミットメントの再考    | 2.81 | 0.85 | .68         |
| 現在意識          | 4.03 | 0.59 | .74         |
| 未来意識          | 3.71 | 0.90 | .68         |
| 過去意識          | 3.54 | 0.78 | .56         |
| 目標指向性         | 3.11 | 0.90 | .78         |
| 希望            | 2.86 | 0.83 | .77         |
| 現在の充実感        | 3.14 | 0.83 | .79         |
| 過去受容          | 3.19 | 0.93 | .75         |

群, 中位 1/3 の協力者 37 名をアイデンティティの感覚中群, 上位 1/3 の協力者 35 名をアイデンティティの感覚高群とした。上位と中位の弁別得点は 3.55, 中位と下位の弁別得点は 4.35 であった。各群における時間意識尺度と時間的展望体験尺度の各下位尺度の平均値と標準偏差および標準誤差を Table 4-2 に示した。

### アイデンティティ形成のプロダクトと時間的展望

**アイデンティティの感覚と時間意識** アイデンティティの感覚群で, 時間意識尺度の得点の平均値に差がみられるかを検討するため, 時間意識尺度の各下位尺度の得点を従属変数, アイデンティティの感覚群を独立変数とした 1 要因 3 水準の分散分析を行った。その結果, 現在意識 ( $F(2, 105) = 5.76, p < .01, \eta^2_p = .10$ ), 未来意識 ( $F(2, 105) = 7.54, p < .01, \eta^2_p = .13$ ), 過去意識 ( $F(2, 105) = 11.32, p < .01, \eta^2_p = .18$ ) のすべてにおいて有意差が見られた。Tukey 法による調整を行った多重比較の結果, 現在意識は低群と高群との間 ( $p < .01, d = 0.87$ ), 中群と高群との間 ( $p < .05, d = 0.58$ ) に, 未来意識も低群と高群との間 ( $p < .01, d = 0.91$ ) に有意差がみられ, 中群と高群との間 ( $p < .10, d = 0.51$ ) の差は有意傾向であった。いずれもアイデンティティの感覚が強い方の得点が高かった。過去意識に関しては, 同様に低群と高群との間 ( $p < .01, d = 1.14$ ), 中群と高群との間 ( $p < .01, d = 0.74$ ) に有意差がみられたが, いずれも現在意識と未来意識とは反対に, アイデンティティの感覚が低い方の得点が高かった。どの時間意識においても, 低群と中群の間には有意差がみられなかった。

**アイデンティティの感覚と各時間意識同士の関連** 各アイデンティティ感覚群における時間意識同士の関連を検討するため, 各群における時間意識尺度の下位尺度間の相関係数

Table 4-2

アイデンティティの感覚低中高群における時間意識尺度と時間的展望体験尺度の平均値と標準偏差および標準誤差 ( $N=108$ )

|        | アイデンティティの<br>感覚低群 ( $n=36$ ) |      |      | アイデンティティの<br>感覚中群 ( $n=37$ ) |      |      | アイデンティティの<br>感覚高群 ( $n=35$ ) |      |      |
|--------|------------------------------|------|------|------------------------------|------|------|------------------------------|------|------|
|        | Mean                         | SD   | SE   | Mean                         | SD   | SE   | Mean                         | SD   | SE   |
| 現在意識   | 3.86                         | 0.54 | 0.09 | 3.95                         | 0.69 | 0.11 | 4.29                         | 0.44 | 0.07 |
| 未来意識   | 3.33                         | 0.87 | 0.14 | 3.68                         | 0.83 | 0.14 | 4.11                         | 0.85 | 0.14 |
| 過去意識   | 3.88                         | 0.66 | 0.11 | 3.64                         | 0.76 | 0.12 | 3.09                         | 0.73 | 0.12 |
| 目標指向性  | 2.61                         | 0.77 | 0.13 | 3.10                         | 0.73 | 0.12 | 3.62                         | 0.91 | 0.15 |
| 希望     | 2.19                         | 0.62 | 0.10 | 2.89                         | 0.64 | 0.11 | 3.52                         | 0.65 | 0.11 |
| 現在の充実感 | 2.42                         | 0.59 | 0.10 | 3.21                         | 0.49 | 0.08 | 3.79                         | 0.75 | 0.13 |
| 過去受容   | 2.73                         | 0.91 | 0.15 | 3.15                         | 0.80 | 0.13 | 3.71                         | 0.81 | 0.14 |

Table 4-3

アイデンティティの感覚低中高群における各時間意識の相関係数 (N=108)

|      | アイデンティティの感覚低群 (n=36) |      | アイデンティティの感覚中群 (n=37) |      | アイデンティティの感覚高群 (n=35) |      |
|------|----------------------|------|----------------------|------|----------------------|------|
|      | 未来意識                 | 過去意識 | 未来意識                 | 過去意識 | 未来意識                 | 過去意識 |
| 現在意識 | .17                  | -.12 | .41*                 | .06  | .43**                | .42* |
| 未来意識 |                      | .15  |                      | .29  |                      | .24  |

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ 

を算出した (Table 4-3)。アイデンティティの感覚低群においては、どの時間意識同士もほぼ無相関であるが、中群においては現在意識と未来意識の間に中程度の正の相関が、高群においては現在意識と未来意識の間に加えて、現在意識と過去意識の間に、それぞれ中程度の正の相関がみられた。

次に、アイデンティティの感覚の群間で、時間意識同士の相関係数に差がみられるかを検討するため、群間でのそれぞれの相関係数の相当性の検定を行った。その結果、現在意識と過去意識との相関係数の群間差のみ有意傾向であった ( $\chi^2(2) = 5.47, p < .10, r = .23$ )。アイデンティティの感覚低群および中群ではほぼ無相関であるのに対し、高群では中程度の正の相関がみられた。

**アイデンティティの感覚と時間的態度** アイデンティティの感覚群で、時間的展望体験尺度の得点の平均値に差がみられるかを検討するため、時間的展望体験尺度の各下位尺度の得点を従属変数、アイデンティティの感覚群を独立変数とした 1 要因 3 水準の分散分析を行った。その結果、目標指向性 ( $F(2, 105) = 13.89, p < .01, \eta^2_p = .21$ )、希望 ( $F(2, 105) = 39.13, p < .01, \eta^2_p = .43$ )、現在の充実感 ( $F(2, 105) = 43.97, p < .01, \eta^2_p = .46$ )、過去受容 ( $F(2, 105) = 12.00, p < .01, \eta^2_p = .19$ ) のすべてにおいて有意差が見られた。Tukey 法による調整を行った多重比較の結果、4 下位尺度すべての、全水準間に有意差がみられた ( $d = 0.49 - 1.20$ )。ただし、目標指向性の低群と中群との間、中群と高群との間、過去受容の中群と高群との間は 5%水準、過去受容の低群と中群の間は有意傾向、その他は全て 1%水準であり、いずれもアイデンティティの感覚が高い方の得点が高かった。

### アイデンティティの形成プロセスと時間的展望

**形成プロセスと時間意識** アイデンティティの感覚の各群におけるアイデンティティ形成プロセスと時間意識の関連を検討するため、各群における U-MICSJ と時間意識尺度の各下位尺度間の相関係数を算出した (Table 4-4)。アイデンティティの感覚低群においては、未

Table 4-4  
アイデンティティの感覚低中高群におけるU-MICSJと時間意識尺度および時間的展望体験尺度の関連  
(N=108)

|        | アイデンティティの感覚<br>低群 (n=36) |         |                    | アイデンティティの感覚<br>中群 (n=37) |        |                    | アイデンティティの感覚<br>高群 (n=35) |      |                    |
|--------|--------------------------|---------|--------------------|--------------------------|--------|--------------------|--------------------------|------|--------------------|
|        | コミット<br>メント              | 深い探求    | コミット<br>メントの<br>再考 | コミット<br>メント              | 深い探求   | コミット<br>メントの<br>再考 | コミット<br>メント              | 深い探求 | コミット<br>メントの<br>再考 |
| 現在意識   | .26                      | .24     | .13                | .33 *                    | .45 ** | .25                | .22                      | .20  | -.43 **            |
| 未来意識   | .03                      | .11     | .29 †              | .56 **                   | .41 ** | .06                | .46 **                   | .21  | -.12               |
| 過去意識   | -.11                     | .14     | .18                | .12                      | -.15   | -.11               | .01                      | -.01 | -.26               |
| 目標指向性  | .23                      | .17     | .24                | .44 **                   | .43 ** | .46 **             | .43 *                    | .13  | -.17               |
| 希望     | .63 **                   | .41 *   | -.04               | .24                      | .34 *  | .19                | .47 **                   | .11  | -.22               |
| 現在の充実感 | .17                      | .06     | -.31 †             | .11                      | .43 ** | .15                | .42 *                    | -.01 | -.51 **            |
| 過去受容   | -.28                     | -.47 ** | -.32 †             | -.19                     | .15    | .05                | -.16                     | -.10 | -.01               |

†  $p < .10$ , \*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

来意識とコミットメントの再考の間に弱い正の相関がみられた。アイデンティティの感覚中群においては、現在意識とコミットメントの間に弱い正の相関、深い探求との間に中程度の正の相関がみられ、未来意識とコミットメント、深い探求との間にも中程度の正の相関がみられた。アイデンティティの感覚高群においては、現在意識とコミットメントの再考との間に中程度の負の相関、未来意識とコミットメントの間に中程度の正の相関がみられた。

アイデンティティの感覚群の間で、各時間意識と各プロセスの相関係数に差がみられるかを検討するため、群間でのそれぞれの相関係数の相当性の検定を行った。その結果、現在意識とコミットメントの再考との相関係数 ( $\chi^2(2) = 9.52, p < .01, r = .30$ )、および未来意識とコミットメントとの相関係数 ( $\chi^2(2) = 6.65, p < .05, r = .25$ ) には群間で有意差がみられた。現在意識とコミットメントの再考との相関は、アイデンティティの感覚低群および中群ではほぼ無相関から弱い正の相関であるのに対し、高群では中程度の負の相関がみられた。未来意識とコミットメントの相関は、アイデンティティの感覚低群では無相関なのに対し、中群および高群では中程度の正の相関がみられた。

**形成プロセスと時間的態度** アイデンティティの感覚の各群におけるアイデンティティ形成プロセスと時間的態度の関連を検討するため、各群における U-MICSJ と時間的展望体験尺度の各下位尺度間の相関係数を算出した (Table 4)。アイデンティティの感覚低群においては、希望とコミットメント、深い探求の間に中程度の正の相関、過去受容と深い探求との間に中程度の負の相関、現在の充実感および過去受容と、コミットメントの再考との間に弱い負の相関がみられた。アイデンティティの感覚中群においては、目標指向性とコミットメント、深い探求、コミットメントの再考との間に中程度の正の相関、希望と深い

探求との間に弱い正の相関，現在の充実感と深い探求との間に中程度の正の相関がみられた。アイデンティティの感覚高群においては，目標指向性，希望および現在の充実感と，コミットメントとの間に中程度の正の相関，現在の充実感とコミットメントの再考との間に中程度の負の相関がみられた。

アイデンティティの感覚の群間で，各時間的態度と各プロセスの相関係数に差がみられるかを検討するため，群間でのそれぞれの相関係数の相当性の検定を行った。その結果，目標指向性とコミットメントの再考との相関係数 ( $\chi^2(2) = 7.49, p < .05, r = .26$ )，現在の充実感とコミットメントの再考との相関係数 ( $\chi^2(2) = 8.75, p < .05, r = .28$ )，および過去受容と深い探求との相関係数 ( $\chi^2(2) = 7.44, p < .05, r = .26$ ) には群間で有意差がみられた。目標指向性とコミットメントの再考との相関は，アイデンティティの感覚低群および高群ではほぼ無相関から弱い正の相関であるのに対し，中群では中程度の正の相関がみられた。現在の充実感とコミットメントの再考との相関は，アイデンティティの感覚中群ではほぼ無相関なのに対し，低群では弱い負の相関，高群では中程度の負の相関がみられた。過去受容と深い探求との相関は，アイデンティティの感覚低群では中程度の負の相関なのに対し，中群および高群ではほぼ無相関であった。

#### 4. 考察

本研究の目的は，青年期における時間的展望とアイデンティティ形成の関連について，そのプロセスとプロダクトの両側面から検討することであった。質問紙調査を行い，研究参加者を，アイデンティティの感覚低群・中群・高群の3群に分けた。プロダクトとしてのアイデンティティの感覚および Crocetti et al. (2008) の3次元モデルによるアイデンティティの形成プロセスと，時間的展望の認知的側面である時間意識および感情的・態度的側面である時間的態度との関連について検討した。

##### 時間的展望とアイデンティティ形成のプロダクト

時間意識とアイデンティティの感覚との関連について行った分散分析の結果，現在への意識と未来への意識は，アイデンティティの感覚が高い群において強く，過去への意識はアイデンティティの感覚が低い群において強いことが示され，仮説 1a が支持された。先行研究では，最も優勢な時間のみに着目しているため，未来への意識との間にのみアイデン

アイデンティティの確立は関連が見出されており (e.g., 白井, 1997), 青年期において特に重要な側面として未来は考えられてきた (都筑, 1999)。しかし, 本研究で示された結果は, 未来への意識のみでなく, 現在への意識が強まることも, また過去への意識が弱くなっていくことも, アイデンティティの確立に関連することを示している。園田 (2003) は, アイデンティティの確立と関連の深い進路選択に関して, 現在への意識の重要性を指摘しており, 本研究における結果もこれを支持するものである。また白井 (2010) は, 将来を見通す際に過去を回想することの有用性を明らかにしており, アイデンティティを形成していく初期における過去への意識の高さは, 将来への見通しを持つこと, ひいてはアイデンティティを確立していくことを補助する役割を持つと考えられる。いずれの時間への意識も多重比較で有意差がみられたのは低群及び中群と高群の間であり, アイデンティティ形成の初期ではなく, ある程度の段階からの形成に関連するものと思われる。いずれにしても, 未来のみならず, 現在と過去への意識についても, アイデンティティとの関連においてその役割等, 今後詳細に検討を重ねていく必要性が示されたといえるだろう。

各時間への意識同士の関連の群間での差異, つまり時間意識同士の相関係数の相当性の検定結果は, 各時間への意識の統合度合の差異を示していると考えられる。相当性の検定の結果, 過去と現在の意識の関連に群間差がみられ, 高群においてのみ中程度の正の相関がみられていた。横井・川本 (2008) では, 過去と現在の関連性を持ちつつ, 過去を過去化して受容できるようになることが青年の発達と関わると指摘されている。本研究の結果についても, アイデンティティの感覚高群において, 過去と現在の意識の間に関連が見られることは, 過去と現在の関連性を表しており, 感覚が高い群ほど過去への意識が低く, 過去受容の得点が高くなることは, 過去を過去化して受容していることを示していると考えられる。また, 群間の差の検定では有意差が示されなかった一方, 現在への意識と未来への意識との関連については, 低群ではほとんど関連はみられず, 中群と高群では統計的にも有意な中程度の関連がみられている。アイデンティティの感覚が高い群ほど, 現在と未来それぞれへの意識が高くなることも示されている。2つの時間への意識が関連を持って高くなることで, その2つの時間の連続性も認識されると考えられる。そのため, アイデンティティの中でも自分が時間的に連続しているという自覚 (Erikson, 1959 小此木訳 1973) に影響を与え, その結果として実際にアイデンティティの感覚も高くなっていると思われる。過去と未来への意識の関連については, いずれの群においてもほとんど関連がみられなかった。石川 (2014) では, 過去と未来の意識に関連がみられているものの, 過去の捉え

方は 4 タイプあること、そしてそのタイプによって未来への意識も異なることが示されている。本研究では意識の量的な側面について検討しており、質的な違いについては検討できていないため、関連がみられなかったのではないだろうか。今後は石川 (2014) で見出されているような質的な違いにも踏み込んで、アイデンティティ形成との関連を検討する必要がある。こうした今後の検討課題はあるものの、先行研究で示されてきた各時間意識の統合とアイデンティティの確立との関連 (e.g., Shirai et al., 2012) を支持する結果が本研究でもみられており、全体として仮説 1b は概ね支持されたといえるだろう。

各群における時間意識同士の相関係数は、アイデンティティ形成を基準として、どのような順序で各時間を統合させていくのかに関しても示唆に富む結果を示している。先述した通り、現在と未来の意識との関連は、低群においては有意でなく、中群および高群において有意であった。また、現在と過去の意識の関連は、低群と中群では有意でなく、高群において有意であった。つまり、現在と未来との関連が先に強くなり、その後現在と過去との関連が強くなると予想することができる。白井 (2008) では、時間的展望の生成について、過去に関心を向け、次に未来に関心が向いて未来を立ち上げる活動が起き、そして現在へと返ってきて現在を豊かにする活動となるとしている。本研究においても、過去への意識は低群において最も高いことから、初めに過去への関心を向けるものの、様々な同一化対象を持つ過去と現在との統合は、未来と現在との統合よりも困難で、アイデンティティ形成がかなり進んだ段階でようやくなされるものと考えられるのではないだろうか。

時間的態度についての分散分析の結果については、先行知見および仮説 1c の通り、アイデンティティの感覚が高い群において、各時間への態度が肯定的であることを示しており、全ての群間に有意差がみられた。時間的態度、各時間への意識の強さ、各時間への意識同士の関連、それぞれの変化の時期や役割、機序を含むより包括的で詳細な検討が今後の課題といえるだろう。

### **時間的展望とアイデンティティ形成プロセス**

時間的展望とアイデンティティの形成プロセスとの間に関連があり、その関連がプロダクトの様相に応じて異なるとすると、各群における時間意識と時間的態度について算出された、アイデンティティの形成プロセスとの相関係数は、群間で異なると考えられる。相関係数の相当性の検定を行った結果、アイデンティティの感覚の高さによって、その形成

プロセスと時間意識および時間的態度との関連には差異がみられた。そのため、時間的展望とアイデンティティ形成プロセスとの関連が、プロダクトの様相に応じて異なるという仮説 2 は支持されたといえる。しかし一方で、結果としてみられた関連の差異は、アイデンティティの感覚が低い場合には過去と、感覚が高い場合には現在や未来と、アイデンティティの各形成プロセスが関連するという仮説よりも、複雑な様相を示していた。以下では、未来、過去、現在の順に、それぞれの時間とアイデンティティの形成プロセスとの間にみられた関連について考察していく。

未来への意識とコミットメントの関連の群間差については、仮説通りの結果であった。アイデンティティの感覚が低い場合には無相関、中群と高群で中程度の正の関連がみられており、未来への意識がコミットメントに関わるのは、アイデンティティ形成の初期ではなく、少し進んだ段階からと考えられる。アイデンティティ形成と時間的展望についての縦断研究を行った Luyckx, Lens, Smits, and Goossens (2010) においても、未来への意識とコミットメントは互いに影響を与え合うという結果を示しているが、そのパス係数は.1 台と低かった。未来への意識とコミットメントとの間の関連が、アイデンティティの感覚に応じて異なるという本研究の結果を踏まえると、関連を持つ段階にある青年と、そうでない青年が混在することを考慮していないためと解釈できる。また、低群においてはコミットメントと希望の間に中程度の関連がみられる一方、中群においてはコミットメントと目標指向性との間に中程度の関連がみられている。アイデンティティの感覚が低い場合には、漠然とした希望を持ってコミットメントをしていく一方、感覚が高くなってくると、より具体的で現在ともつながりのある目標を意識しながらコミットメントできるようになることを示している。日潟・齊藤 (2007) は、過去への葛藤を抱えている青年は、未来を肯定的に捉えようとしているが、現実的な未来に対する視点を持っていないと指摘しており、低群における過去への意識の高さ、過去受容の低さ、そして上述の関連の差異とも整合的なものである。高群では両方と関連がみられており、具体的な目標に伴う希望も持ちながらコミットメントをしていると思われる。今後は、プロダクトの指標も加味しながら、Luyckx et al. (2010) のような縦断研究で、さらに未来への意識や態度の違いにも踏み込んで、コミットメントとの関連について明らかにしていく必要があるだろう。

アイデンティティの感覚が低い場合に、形成プロセスと過去とが関連するという仮説は、深い探求のプロセスにおいて支持された。アイデンティティの感覚低群でみられた関連は、過去を受容しているほど、深い探求を行わないことを示している。先述した通り、アイデ



アイデンティティの形成は、過去からの同一化対象を統合していくという過程 (Erikson, 1968 西平・中島訳 2011) とされている。低群における過去意識の高さからは、過去の同一化対象への意識の高さが窺える。一方で過去受容についての分散分析の結果からは、低群において過去受容の得点は低いことが示されている。形成の進んでいない低群では、様々な同一化対象としての過去への意識は高いものの未だ統合できておらず、受容の程度は高くはないと思われる。アイデンティティの形成初期においては、過去への意識を高く持つとともに、過去の受容のできなさが、現在のコミットメント対象に対して深く考えることにつながると考えられる。また、有意傾向ではあるがコミットメントの再考と過去受容の間にも負の関連がみられているため、過去が受容できないからこそ、その葛藤の中で、コミットメント対象を再考していくことにもつながるのではないだろうか。いずれにしても、アイデンティティ形成の初期においては、過去、特にその受容のできなさが、形成プロセスと関連を持つことが示された。

現在への意識や態度について、プロダクトの様相によって差異が認められたのは、コミットメントを再考するプロセスとの関連であった。現在への意識や充実感とコミットメントの再考との関連は、低群や中群においてはほとんど見られないのに対し、高群ではいずれも中程度の負の関連がみられている。一方で、中群におけるコミットメントの再考には、目標指向性と中程度の正の関連がみられており、高群においてはそのような関連は見られなかった。目標指向的な態度がコミットメントの再考につながることが示されている。これらのことから、アイデンティティの感覚を高く持っている青年は、現在に、ひいては現在の自己に意識を向けることでコミットメント対象に向き合っており、そうした活動から現在に充実感を得られている場合には、コミットメント対象を考え直す必要がないと考えられる。反対に、現在への意識、現在に対する充実感を持っていない場合に、コミットメントの再考を行うことが示唆される。有意傾向ではあるが、低群においても現在の充実感とコミットメントの再考に弱い負の関連がみられており、アイデンティティの形成初期においても、充実感の持てなさがコミットメント対象を考え直す契機になると考えられる。先述した通り、過去の受容のできなさが形成初期において再考の契機になることも踏まえると、アイデンティティの形成初期にコミットメントを考え直すことは、現在や過去を改善したいという動機が関係しているといえるだろう。アイデンティティの形成中期にある青年は、現在のコミットメント対象以外にも多くの可能性に対して開かれており、目標指向的に複数の可能性からコミットメント対象を選択しようとしていると考えられる。このように、

アイデンティティの形成段階に応じて、コミットメントを再考していく契機が異なることが明らかとなった。

## まとめと今後の課題

本研究では、時間的展望を認知的側面と感情的・態度的側面から捉え、その両側面とアイデンティティ形成のプロセスおよびプロダクトとの関連が示された。認知的側面については、アイデンティティ形成初期において過去への意識が過去の同一化対象への意識を持たせ、中期以降では現在と未来への意識が現在と未来の自己への意識を持たせることで各形成プロセスに取り組み、そしてその意識同士の関連が自己の連続性を見出させることが示唆された。感情的・態度的側面については、初期においては過去の受容のできなさがコミットメントの探索に、中期においては肯定的な現在と未来が3つの各プロセスに、そして後期においては肯定的な未来と現在がコミットメントとその維持につながっていることが示唆された。アイデンティティ形成の文脈において、時間的展望の認知的側面は、各時間の自己に意識を向けたり、そうした意識同士の関連を持たせたりする役割を、感情的・態度的側面は、各時間の自己にどのように意識を向けるのか、またその動機となる役割を果たしていると考えられる。

時間的展望はアイデンティティ確立の基礎であるとされながらも、形成途上で分けられたアイデンティティ・ステータスとの関連の検討にとどまっていた先行知見に対して、本研究では、アイデンティティの形成プロセスにまで踏み込み、プロダクトと合わせて両側面から検討することで、時間的展望との関連をより詳細に明らかにすることができた。また、先行研究では時間的展望の認知的側面を典型的に捉え、未来の重要性を指摘するのみであったのに対し、本研究ではそれぞれの時間をすべて検討し、未来に加えて現在や過去への意識と、アイデンティティ形成との関連を明らかにできた点も意義があると考えられる。

一方で、本研究には限界点および今後の課題も残っている。本研究はU-MICSJを用いた横断調査によってアイデンティティの形成プロセスを捉えているため、ある時点での時間的展望の様相が、アイデンティティ形成にどのような役割を果たすかについては明らかにできていない。時間的展望とアイデンティティ形成は相互規定的であることも指摘されているため(白井, 2003)、その規定関係にも踏み込んで今後検討を重ねていくことで、時間的展望の2側面がアイデンティティ形成とどう関わるのか、その相違の詳細についても明らか

かになるだろう。また、中間・杉村・畑野・溝上・都筑 (2015) は、今回用いた U-MICSJ に関して、既にある程度のコミットメントを形成した後の発達過程を捉えることに力点がおかれているため、コミットメント形成の過程については捉えることができないと指摘している。今後の課題は、本研究で捉えられていないコミットメントの形成過程も含めて、より詳細な時系列を追った変化や役割などについて、縦断調査を行って明らかにしていくことである。

### 第3節 本章の総合的考察

第3章では、過去、現在、未来をすべて含む時間的展望と、アイデンティティ形成のプロセスおよびプロダクトとの関連について検討を行った。

研究3においては、Luyckx, Goossens, Soenens et al. (2006) のアイデンティティの二重サイクルモデルに基づき、各形成プロセスと各時間的態度および時間的展望プロフィールとの関連について検討した。その結果、過去に対する否定的な態度が探求のプロセスと関連していること、未来に対する肯定的および否定的な態度が、アイデンティティ形成を進める全てのプロセスと関連すること、そしてそうした未来や過去に支えられる現在に対する態度が、アイデンティティ形成の各次元と関わっており、特に否定的な現在への態度とコミットメント形成のできなさが関連することが示された。また、時間的展望プロフィールに関しては、肯定型および過去否定型の青年が、各アイデンティティ形成プロセスに傾倒していることが示された。

研究4においては、Crocetti et al. (2008) のアイデンティティ形成の3次元モデルに基づき、各形成プロセスと時間的態度および時間意識との関連について、アイデンティティ形成のプロダクトの様相に分けて検討した。その結果、アイデンティティ形成の初期においては、過去への意識の高さが、中期以降では現在と未来への意識の高さが、アイデンティティ形成の各プロセスと関連することが示唆された。また、アイデンティティ形成の初期においては過去の受容のできなさがコミットメント対象の探索に、中期においては肯定的な現在と未来が各形成プロセスに、後期においては肯定的な未来と現在がコミットメントとその維持につながることを示唆された。

本章で得られた知見は、時間的展望研究の未来への偏重という問題点を克服し、アイデンティティ形成のプロセスに関する研究の必要性に応えるものである。アイデンティティの形成に、時間的展望は未来のみでなく、過去や現在も関連していること、そしてそうした関連は、アイデンティティの形成がどの程度進んでいるかに応じて異なることが示された。従来、アイデンティティ・ステータスなどとの関連から、アイデンティティ形成のプロダクトに応じて、時間的展望の持ち方、特に未来展望が異なることが示されてきたが (e.g. Rappaport, Enrich, & Wilson, 1985; 都筑, 1994), 本章の知見は、アイデンティティ形成のプロセスと各時間についての展望との関連を明らかにした。

本章で明らかになった関連は、時間的展望がアイデンティティを形成していく上でどのような役割を持つのかについても示唆している。アイデンティティの形成は、過去からの同一化対象を統合していく過程 (Erikson, 1968 西平・中島訳 2011) とされるが、その初期においては過去に対する意識を持つこと、そして過去の受容のできなさといった否定的態度がコミットメントを形成していく役割を持つことが示唆された。その際には、過去に対して否定的なだけでなく、現在と未来に対して肯定的な態度を持つことが、アイデンティティ形成を進めることにつながることも示唆されている。時間的展望は、単に肯定的であればアイデンティティ形成を促す役割を持つのではなく、否定的な時間的展望も、アイデンティティ形成の最初の契機といった役割を持つと考えられる。

時間的展望がアイデンティティ形成に対して持つ役割が明らかになったことは、青年期の支援を考える上で有用と思われる。例えば、コミットメントを形成できずにいる青年に対しては、過去を回想させるなどして、過去に対する意識を持たせることが有効かもしれない。そうした際、過去の受容のできなさはアイデンティティ形成の原点とも考えられるため、無理に受容を促すのではなく、むしろその受容のできなさを大事にしながら、現在や未来に対する肯定的な態度を支援していくことが、コミットメントの形成に、ひいてはアイデンティティの形成につながるのではないだろうか。

本章で得られた知見は、今後の研究によってさらに精緻化されていくことが望まれる。その方法として、先述してきた通り、縦断研究を行うことが求められる。また、面接調査や進路指導、カウンセリング等の実践にどのように活かしていくのか、実践的な研究を行っていくことが今後の展望である。

## 第4章

人生の終点を踏まえた時間的展望と

アイデンティティ形成

## 第1節 人生の終点を考えることと時間的態度（研究5）

### 1. 問題と目的

生や死についての学びの不十分さが指摘される現代において、それらの教育は学校教育の中で行う必要が出てきている。病院死の増加や核家族化による死に触れる機会の減少、さらにはテレビゲームなどにおける架空の死の経験等によって、現代の青年は、死について真剣に考える機会を持たずにいるように思われる。一方、文部科学省の実施する学習指導要領では、「生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重すること」を義務教育における道徳の教育内容に掲げている。生と死、いのちについての学びはもはや家庭では得られなくなっており、そうした教育は学校に期待せざるを得ない状況となっている。

学校教育における生や死についての教育の必要性が増す中、実際に死を直接的に扱うデス・エデュケーションの実践は少ない。赤澤 (2004) は、日本の学校教育現場におけるデス・エデュケーションを概観し、その数はかなり少なく散発的であり、体系的でないことを指摘している。また、デス・エデュケーションに関する国内の実証的研究も少なく、これまで行われた海外での効果研究についても、海老根 (2012) は、そのほとんどが効果の指標として死の不安や恐怖の軽減に着目していると述べている。しかし、デス・エデュケーションの効果は、死の不安や恐怖の軽減だけにとどまらない。デーケン (2001) は、人間は生の究極の到達点である死の日まで、自分に与えられた時間をいかに生きようかと考えて、積極的に歩みだすべきであるとし、デス・エデュケーションはそのまま、自分の死までの毎日をよりよく生きるためのライフ・エデュケーションとなり、生と死を深く見つめて生きる原点となるとしている。つまり、デス・エデュケーションは、よりよく生きることに影響を与えると考えられるが、その効果に着目した実証研究はみられず、理論的背景やメカニズムも明らかでないため、実践に結び付いていかないと考えられる。

青年期において死を扱うことは、青年の生き方に影響を与えると考えられるが、その中でも特に、死までの時間の認知に対して影響を与えることが予想される。比較的近い未来について考えることが一般的と考えられる青年期 (Nurmi, 1989) において、人生の最期の時である死について考えることは、青年に死までの未来という、より大きくて広い視野を与えられると思われる。人間は時間的な広がりができはじめるなかで、1回しかない現在のかげがえのなさに気が付くと白井 (2001b) は述べている。また、病気やひとの死と出会い、悲し

みを味わうことで、ひととひとの出会いのすばらしさや生きることのかけがえのなさに気がついていくとし、人生の有限性や死の認識は、生きる意味や今を生きることの大切さについても考えさせるとしている。そして白井 (2001b) は、死を自覚することにより、漫然と過ごしていた時間の貴重さに気がつくようになり、自分の価値観を批判的に吟味しはじめるとまとめている。Hankoff (1975) も、死との対峙が青年に、人生における時間の意義の感覚をもたらすと述べており、青年期において死について考えることは、人生の有限性を改めて意識することによって、現在を中心とした時間の大切さに気付かせる効果を持つと考えられる。

時間の大切さに気付くといった死について考えることの効果は、青年の持つ時間的態度の変化をみることによって検討出来ると思われる。時間的態度とは、時間的展望の下位概念の1つであり、過去・現在・未来に対する感情的評価 (白井, 1994a) のことである。自身の過去の受容や現在に対する充実感、未来への目標や希望など、都筑・白井 (2007) では、過去・現在・未来に対する精神的な姿勢や身構えと説明されている。時間的展望は、その獲得期が青年期とされており、青年期の発達課題である自我同一性との関連も多く見出されている (都筑, 1994; 渡邊・赤嶺, 1996)。予想される死について考えることの影響は、人生における時間の意義の感覚が得られることや、現在という時間の大切さに気付くことなど、どれも時間的態度への影響であり、特に現在に対する時間的態度に中心的な影響を与えることが予想される。死について考えることが、このような現在を中心とした時間の認知に対して効果を持つとすると、死について考えることの効果の測定は、時間的態度を測定することによって可能であると考えられる。

ところで、死について考えることは、生きることについて考えることとは異なる効果を持つと考えられる。デス・エデュケーションがそのままライフ・エデュケーションになるとするデーケン (2001) の指摘は、裏を返せば、生きるということについて考えることが、死について考えることと同じ効果を持つ可能性も示唆している。現在に対する時間的態度を肯定的にしようとする場合にも、死という倫理的な問題をはらむものについて触れるのではなく、生きがいといったポジティブなものについて考えることによっても可能と考えられる。しかし白井 (2001b) や Hankoff (1975)、デーケン (2001) などから考えると、死について考えることの効果には、上述してきたような、人生の有限性を再認識することを通して、時間的態度に影響を与えるという過程が想定される。死について考えることは、デーケン (2001) が指摘するように、その裏返しである生について、つまりは生き方について



考えさせることとなる。こうした死について考えることと、死については触れず、生きがいといったポジティブなものから考えることとを比較することで、死を主題として扱う意義がさらに明確になるであろう。

ただし、死について考えることには、多様な形があることが知られている。一般的な事柄、トピックとしての死のことである第3人称の死、身近な人に関する死のことである第2人称の死、そして自分自身がこれから遭遇するであろう死のことである第1人称の死の3つに分類される (Jankélévitch, 1966 仲沢訳 1978) ことが多い。その中で下島・蒲生 (2009) は、自分自身の死について考えることこそが、人生の延長上にある死を真剣に考えることであるとし、その大切さを強調している。死に限らず生き方について考える際にも、自分自身のこととして実感を持たせるためには、形式的なものや他人のではなく、自分自身の生き方について考える必要があると思われる。そのため、本研究においては、第1人称の死、生き方について考えることの影響を検討する。

以上のことから、生きがいについて考えるときよりも、死について考えたときの方が、今が充実しているといったことをより強く思うようになり、現在に対する時間的態度が肯定的になるという仮説を立てることができる。しかし、現在という時間は過去や未来と密接に関係しており、現在という特定の時間にのみ強い影響を与えるのではなく、その他の時間に対する時間的態度にも少なからず影響を与える可能性が高い。そこで本研究では、以下の仮説の検証を通して、青年期において死について考えることが、時間的態度にどのような影響を及ぼすのかについて検討することを目的とする。その際、課題に対する自由記述の分析を用いて、死について考えることが時間的態度に影響を及ぼすプロセスについても、検討していくこととする。

## 仮説

生きがいについて考えるときよりも、死について考えたときの方が、現在に対する時間的態度を中心として、全体的に時間的態度が肯定的になる。すなわち、現在を充実させたという態度を中心として、未来に対して目標や希望を持ったり、過去を受容したりといった態度が全体的に強くなる。

## 2. 方法

## 対象

国立 A 短期大学学生 192 名を対象として実験を行った。課題およびその前後の質問紙すべてに取り組んだ者のうち、課題や質問紙の回答に不備のあった者、青年期でない可能性の高い 26 歳以上の者を除いた 127 名 (男性 18 名, 女性 109 名, 平均年齢 19.2 歳) を分析対象とした。実験参加者は死について考える群 (41 名; 男性 6 名, 女性 35 名), 生きがいについて考える群 (43 名; 男性 5 名, 女性 38 名), 死や生きがいとは無関係なものについて考える統制群 (43 名; 男性 7 名, 女性 36 名) に無作為配置された。

## 実施時期

2011 年 11 月。

## 手続き

国立 A 短期大学の昼間および夜間過程における「心理学」関連科目の授業において、課題およびその前後の質問紙を順に配布し、その場で回答を求め回収する一斉配布、一斉回収方式での実験を 2 週間に渡って実施した。課題に取り組む 1 週間前に課題前の時間的態度を、課題に取り組んだ後すぐに課題後の時間的態度を測定した。課題後の測定においては、課題をすべて終えたかを全体に確認した後、質問紙を配布した。

また、課題の表紙には、課題の内容が「死」(生きがいの課題群は「生きがい」・統制群は「バイク」) というテーマであることを明記し、そうしたものに抵抗がある場合には課題に取り組まなくて良いこと、いつでも中断して良いことを、口頭でも十分に説明した。その上で協力してもらえる参加者には、実験参加に「同意する」という表紙の項目に丸を付けてもらった後、課題に取り組んでもらうといったように、実験参加者への倫理的な配慮を行った。

## 質問紙

**時間的態度の測定** 白井 (1997) の時間的展望体験尺度を使用した。この尺度は、未来に対する時間的態度を測定する「目標指向性」5 項目と「希望」4 項目、現在に対する時間的態度を測定する「現在の充実感」5 項目、過去に対する時間的態度を測定する「過去受容」4 項目の 4 下位尺度、計 18 項目からなる。目標指向性は「私には将来の目標がある」、希望は「私の将来には希望がもてる」、現在の充実感は「毎日の生活が充実している」、過去受

容は「私は自分の過去を受け入れることができる」などの項目からなる。白井 (1997) では本尺度の内的整合性による信頼性、構成概念妥当性が確認されている。項目の回答形式は「1 あてはまらない」「2 どちらかといえばあてはまらない」「3 どちらともいえない」「4 どちらかといえばあてはまる」「5 あてはまる」の 5 件法で、得点が高いほど時間的態度が肯定的であることが示されるように得点化した。

## 課題

課題群ごとに異なる文章を読ませた後、2つの質問への回答を求めた。1つ目は課題群ごとに異なり、「文章を読んで、あなたは「死」(生きがい課題群では「生きがい」、統制群では「バイク」)について、どのように考えましたか。」という教示文への回答を、2つ目は全群共通で、「文章を読んで、あなたは自分自身の生き方について、どのように考えましたか。」という教示文への回答を自由記述形式で求めた。課題に用いた文章はいずれも 1000 字程度のもので、回答欄は A4 判用紙でそれぞれ 1/3 程度のスペースを設けた。課題全体を通した回答時間は 20 分程度であった。以下はそれぞれの課題に用いた文章の要約およびそれぞれの文章を用いた理由である。

**死について考える課題** 出典は三重大学大学院教育学研究科修士論文 (鈴木, 2004) の冒頭部。バイク事故に遭った筆者の体験談。バイクで正面衝突した筆者は、宙を舞いながら「自分はこのような軽率なことで、このかけがえのない生を失うのか」と後悔と無念さを感じる。数日後に意識不明の重体から脱した筆者は、自分の生が新しくリセットされたことを実感する。死ぬことは容易で当たり前のことであり、恐れるに足りないと感じると同時に、今まで自己の死を無意識の中で否定し、自己実現を至上目標と掲げてきた自分自身の生が、実体のない幻影であることに気付き恐怖に震える。その恐怖は、自己の存在を再認識する中から湧き上ってくる強烈なものであり、生きるということの本質に向かい合った衝撃と恐怖で、その夜から日が昇った後も、夕刻まで一睡もすることができなかつたとくくられている。

死を感じる体験である一方、本当に死ぬわけではない点で、実験参加者への心理的負担は少なく出来ると考えられる。また、誰にでも起こり得る事故という出来事を通して死に触れた体験談であり、実験参加者が死について考えやすいのではないかとと思われるため、この文章を用いた。

**生きがいについて考える課題** 出典は「エッセイ」というインターネット上のサイト。

生きがいとは何かについて、筆者の経験から書かれた文章。脱サラして植木職人となった筆者だが、植木の手入れは義務として仕方なくやっていた時代もあった。しかし、お客さんと接するようになり、確かな手ごたえを感じるようになる。感動と喜びを感じてもらい、さらには「ありがとう」と感謝の気持ちでお金をもらうときに、植木職人になって良かったと思う瞬間であるという。自分のした仕事で人に喜んでもらうと、もっと喜んでもらいたい、感動してもらいたいという一心でさらに研究して腕を上げる。これこそが生きがいであると筆者はいう。筆者は、生きがいのキーワードは人を喜ばせる側に立つことであるとし、そうしたものは無数にあり、それを見つけるのは自分自身であるとまとめている。

青年期における 1 つの課題である職業選択にも関連した文章であり、最終的に生きがいを見つけるのは自分自身であるとしている点も、生きがいについて青年が考えやすいと思われるため、この文章を用いた。

**統制群の課題** 出典は「ツーリングのエッセイ」というインターネット上のサイト。ツーリングの魅力について筆者の経験を含めて書かれた文章。優れた機動力の一方で天候に弱く、また危険性も持つバイクという乗り物の魅力は、1 度や 2 度のツーリングやバイク経験では分からない。筆者自身、1 年を通してバイクに乗っていても、出発から帰路まですべてを通して爽快な 1 日を感じることは少ないという。また、ツーリングと一言で言っても、目的地や人数など、多種多様な形態がある。ソロであっても大勢であっても、それぞれに楽しみ方があり、ツーリングはスポーツのような感覚のものであると筆者はいう。

死や生きがいとは関係の薄いバイクやツーリングについて、説明文に近い文章である一方、筆者の体験を含んでいる点では他群の文章と共通しており、中性的な文章として適切と思われるため、この文章を用いた。

### 3. 結果

#### 尺度の構成

先行研究の尺度構成に従い、時間的展望体験尺度 (白井, 1997) の各項目の得点を合計し、そのそれぞれの平均値を各下位尺度得点とした。また、過去・現在・未来を合わせた全体的な時間的態度の指標として、全ての尺度得点の平均値を時間的展望体験尺度の総得点とした。総得点と下位尺度得点の平均値および標準偏差を Table 5-1 に示す。時間的展望体験尺度の総得点とその下位尺度それぞれの内的整合性を検討するため、Cronbach の  $\alpha$  係数を

Table 5-1  
時間的展望体験尺度の平均値と標準偏差および $\alpha$ 係数 ( $N=127$ )

|              | 課題前      |           |             | 課題後      |           |             |
|--------------|----------|-----------|-------------|----------|-----------|-------------|
|              | <i>M</i> | <i>SD</i> | $\alpha$ 係数 | <i>M</i> | <i>SD</i> | $\alpha$ 係数 |
| 目標指向性        | 3.00     | 0.91      | .82         | 2.97     | 0.93      | .83         |
| 希望           | 2.88     | 0.80      | .78         | 2.88     | 0.85      | .82         |
| 現在の充実感       | 3.13     | 0.72      | .72         | 3.14     | 0.77      | .77         |
| 過去受容         | 3.45     | 0.67      | .57         | 3.43     | 0.77      | .69         |
| 時間的展望体験尺度総得点 | 3.11     | 0.56      | .84         | 3.10     | 0.61      | .86         |

算出したところ、Table 5-1 に示す通り、総得点については  $\alpha=.84$  (課題前) および  $\alpha=.86$  (課題後)、目標指向性については  $\alpha=.82$  および  $\alpha=.83$ 、希望については  $\alpha=.78$  および  $\alpha=.82$ 、現在の充実感については  $\alpha=.72$  および  $\alpha=.77$ 、過去受容については  $\alpha=.57$  および  $\alpha=.69$  となった。過去受容については低い値となったため、十分な内的整合性が得られていないことを考慮する必要はあるが、総得点の内的整合性も高いため、以下では 4 つの下位尺度すべてを分析対象とした。

### 課題が時間的態度に及ぼす影響

課題が時間的態度に及ぼす影響を検討するため、課題前後における各群の時間的展望体験尺度の総得点および各下位尺度得点の平均値の比較を行った。課題前後における各群の平均値および標準偏差を Table 5-2 に示す。

まず時間的展望体験尺度の総得点に対して  $2 \times 3$  (課題前・課題後  $\times$  死・生きがい・統制課題群) の分散分析を行った。課題前後における各群の平均値の推移を Figure 5-1 に示す。分散分析の結果、時期  $\times$  課題の交互作用のみが有意となった ( $F(2, 124) = 5.56, p < .01, \eta^2_p = .08$ )。交互作用は有意となったが、生きがいの課題群における課題前の得点が高く、そのことの

Table 5-2  
各課題群における課題前後の時間的展望体験尺度の平均値および標準偏差

|              | 死の課題群 ( $n=41$ ) |             | 生きがいの課題群 ( $n=43$ ) |             | 統制課題群 ( $n=43$ ) |             |
|--------------|------------------|-------------|---------------------|-------------|------------------|-------------|
|              | 課題前              | 課題後         | 課題前                 | 課題後         | 課題前              | 課題後         |
| 目標指向性        | 2.90 (1.04)      | 3.01 (1.10) | 3.21 (0.85)         | 3.10 (0.87) | 2.88 (0.82)      | 2.79 (0.81) |
| 希望           | 2.82 (0.92)      | 2.90 (0.97) | 3.05 (0.71)         | 2.94 (0.79) | 2.76 (0.76)      | 2.79 (0.79) |
| 現在の充実感       | 3.10 (0.81)      | 3.24 (0.84) | 3.18 (0.61)         | 3.07 (0.65) | 3.12 (0.76)      | 3.12 (0.82) |
| 過去受容         | 3.49 (0.71)      | 3.59 (0.74) | 3.48 (0.62)         | 3.36 (0.74) | 3.37 (0.70)      | 3.36 (0.83) |
| 時間的展望体験尺度総得点 | 3.07 (0.66)      | 3.18 (0.68) | 3.23 (0.49)         | 3.11 (0.55) | 3.03 (0.53)      | 3.01 (0.59) |

注：( ) 内は標準偏差を示す

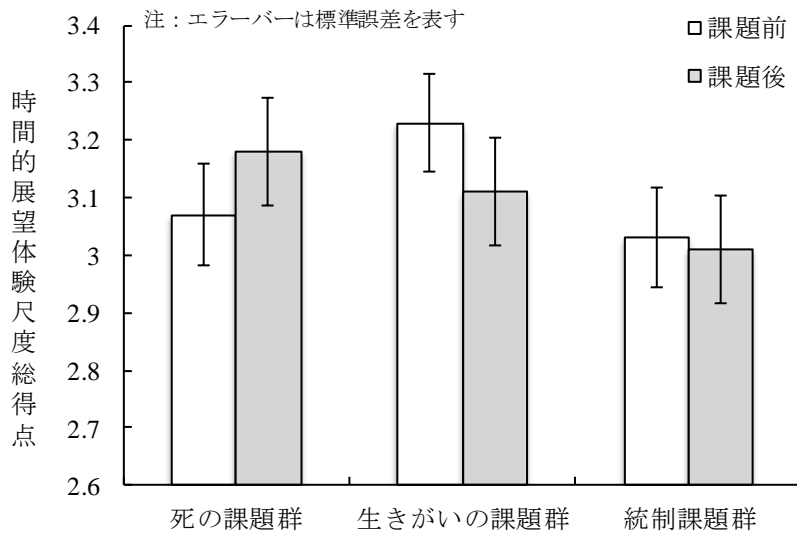


Figure 5-1. 2×3 (課題前・課題後×死・生きがい・統制課題群)の時間的展望体験尺度総得点の平均値

みが交互作用の効果を生み出している可能性も考えられるため、それぞれの課題群について時期の単純主効果を検定した。その結果、死の課題群で有意差がみられ、課題前よりも課題後の方が平均値は有意に高かった ( $F(1, 124) = 5.14, p < .05, \Delta = .17$ )。また生きがいの課題群においても有意差がみられたが、死の課題群とは対称的に、課題前よりも課題後の方が平均値は有意に低かった ( $F(1, 124) = 5.93, p < .05, \Delta = -.23$ )。

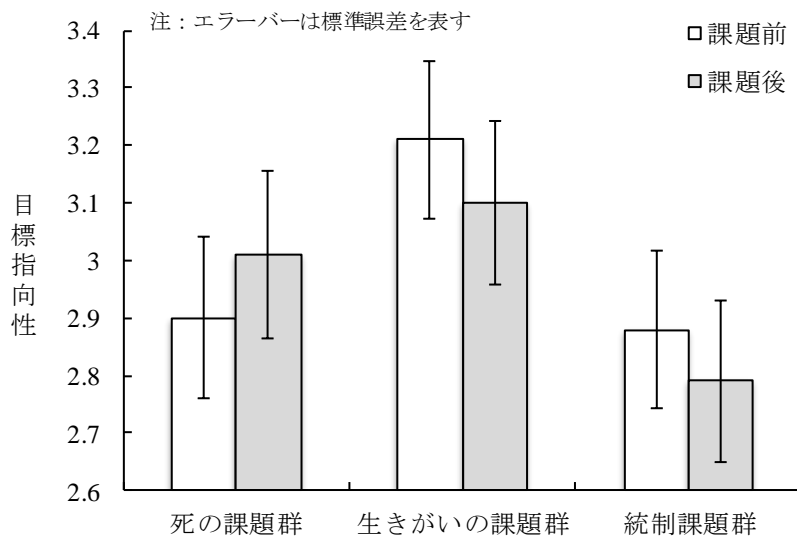


Figure 5-2. 2×3 (課題前・課題後×死・生きがい・統制課題群)の目標指向性の平均値

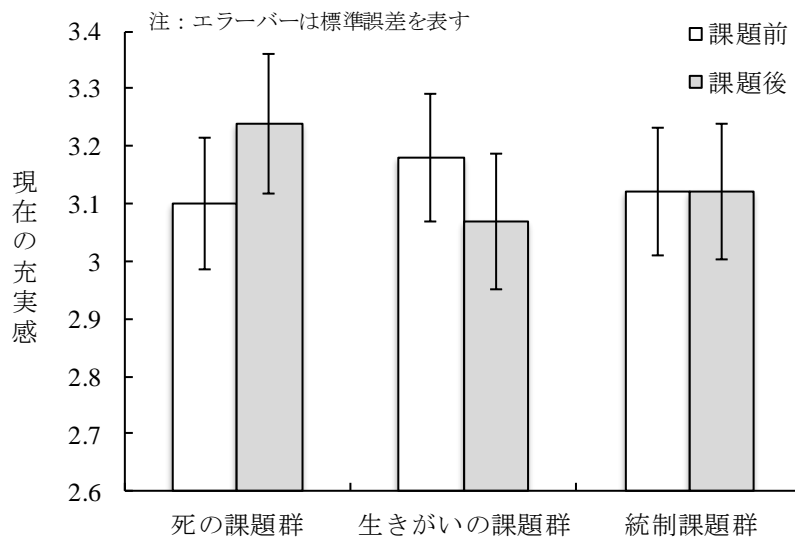


Figure 5-3. 2×3 (課題前・課題後×死・生きがい・統制課題群)の現在の充実感の平均値

続いて、時間的展望体験尺度の各下位尺度得点に対して2×3 (課題前・課題後×死・生きがい・統制課題群) の分散分析を行った。分散分析の結果、目標指向性に対する時期×課題の交互作用が有意傾向であった ( $F(2, 124) = 2.75, p < .10, \eta^2_p = .04$ ) (Figure 5-2)。また、現在の充実感に対する時期×課題の交互作用が有意傾向となった ( $F(2, 124) = 2.37, p < .10, \eta^2_p = .04$ ) (Figure 5-3)。希望、および過去受容に関しては有意差がみられなかった。交互作用が有意傾向であった目標指向性と現在の充実感について時期の単純主効果を検定したところ、死の課題群における現在の充実感のみで有意傾向がみられ、課題前よりも課題後の方が平均値は高かった ( $F(1, 124) = 2.89, p < .10, \Delta = .18$ )。

### 課題における記述の分析

課題が時間的態度に影響を及ぼすメカニズムについて検討を行うため、課題において3群共通である2問目の質問に対する自由記述の分析を行った。

まず、質問に対する回答の合計文字数を記述量とし、各課題群における記述量とその平均値を算出した (Table 5-3)。各群によって課題に対する記述量の平均値に差がみられるかを

Table 5-3  
各群の質問項目に対する記述量の平均値と標準偏差

|           | 死の課題群 (n=41) | 生きがいの課題群 (n=43) | 統制課題群 (n=43) |
|-----------|--------------|-----------------|--------------|
| <i>M</i>  | 66.37        | 97.60           | 67.51        |
| <i>SD</i> | 61.68        | 49.32           | 45.39        |

Table 5-4  
KJ法における分類手法を用いた記述の分類カテゴリと代表的な記述 (N=127)

| 分類カテゴリ  | 代表的な記述                             |
|---------|------------------------------------|
| 時間重視    | 「生きている時間を大切にしようと思う」 「1日1日大切に生きたい」  |
| 現状改善・願望 | 「後悔しないように生きていかなければいけない」 「もっと頑張りたい」 |
| 現状後悔・不安 | 「多くの後悔がある人生だと思う」 「このままで良いのか不安である」  |
| 現状満足・把握 | 「今の生き方は良いと思う」 「これが自分の生き方だと思う」      |
| 死の恐怖    | 「死がとても怖く感じる」                       |
| 無思考     | 「特に何も考えなかった」                       |

検討するため、記述量を従属変数、課題群 (死・生きがい・統制) を独立変数とした被験者間計画で1要因分散分析を行った結果、群の主効果がみられた ( $F(2, 124) = 4.51, p < .05, \eta^2_p = .07$ )。Bonferroniの方法による調整を行った多重比較の結果、生きがいの課題群と死の課題群 ( $p < .05, d = 0.56$ )、および生きがいの課題群と統制課題群 ( $p < .05, d = 0.63$ ) との間に有意差がみられ、いずれも生きがいの課題群の記述量の方が有意に多かった。

次に、2問目の質問に対する記述に関して、KJ法の手法を用いてカテゴリを生成し、その後それらのカテゴリを用いて分類を行った。分類は著者に加え、本研究の主旨を知らない心理学を専攻する大学院生2名と行った。時間を大切にするという記述がみられる場合

Table 5-5  
各課題群における記述の分類 (N=127)

|         | 死            | 生きがい         | 統制           |
|---------|--------------|--------------|--------------|
| 時間重視    | 12<br>29.27  | 1<br>2.33    | 3<br>6.98    |
| 現状改善・願望 | 8<br>19.51   | 17<br>39.53  | 19<br>44.19  |
| 現状後悔・不安 | 5<br>12.20   | 9<br>20.93   | 1<br>2.33    |
| 現状満足・把握 | 8<br>19.51   | 14<br>32.56  | 15<br>34.88  |
| 死の恐怖    | 3<br>7.32    | 0<br>0.00    | 0<br>0.00    |
| 無思考     | 5<br>12.20   | 2<br>4.65    | 5<br>11.63   |
| 合計      | 41<br>100.00 | 43<br>100.00 | 43<br>100.00 |

注：上段は度数・下段は各群における比率 (%) を示す



には「時間重視」のカテゴリに、今の自分の生き方を改善する、またはこうありたいといった記述がみられる場合には「現状改善・願望」のカテゴリに、今までの自分の生き方に後悔していたり、不安を抱えていたりする記述がみられる場合には「現状後悔・不安」のカテゴリに、今の生き方に満足していたり、自分の生き方がどうであるかという記述のみがみられる場合には「現状満足・把握」のカテゴリに、死を恐怖と感じている記述がみられる場合には「死の恐怖」というカテゴリに、そして何も考えなかったといった記述がみられる場合には「無思考」というカテゴリに分類した。それぞれの分類の代表的な記述をTable 5-4に示す。評定者間で分類が異なる場合には協議の上、1つのカテゴリに分類した。その際、「時間重視」のカテゴリに当てはまる記述は、現状を改善したいという気持ちが前提としてあるため、当然「現状改善・願望」のカテゴリにも該当する。しかしそうした現状を改善したいという気持ちは、「時間重視」のカテゴリの前提的な要素であると考えられるため、「現状改善・願望」の数には入れなかった。またその他のカテゴリに関して、1人の記述が複数のカテゴリに重複することはなかった。なお評定者間の一致率は82.7%であった。

課題群によってこれらのカテゴリに入る記述数の比率に差があるのかを調べるため、カテゴリと課題群のクロス表を作成し (Table 5-5), Fisher の正確確率検定を行ったところ、有

Table 5-6  
死の課題群における記述の分類と時間的展望体験尺度の課題前後での変化 (n=41)

|         | 上昇          | 変化なし       | 下降          | 合計           |
|---------|-------------|------------|-------------|--------------|
| 時間重視    | 11<br>26.83 | 0<br>0.00  | 1<br>2.44   | 12<br>29.27  |
| 現状改善・願望 | 4<br>9.76   | 1<br>2.44  | 3<br>7.32   | 8<br>19.51   |
| 現状後悔・不安 | 4<br>9.76   | 1<br>2.44  | 0<br>0.00   | 5<br>12.20   |
| 現状満足・把握 | 5<br>12.20  | 0<br>0.00  | 3<br>7.32   | 8<br>19.51   |
| 死の恐怖    | 1<br>2.44   | 0<br>0.00  | 2<br>4.88   | 3<br>7.32    |
| 無思考     | 1<br>2.44   | 3<br>7.32  | 1<br>2.44   | 5<br>12.20   |
| 合計      | 26<br>63.41 | 5<br>12.20 | 10<br>24.39 | 41<br>100.00 |

注：上段は度数・下段は比率 (%) を示す

有意な結果が得られた ( $p = .00$ )。そこで、統計量がモデル分布に従うと考えられる 5 以上の度数のセルに対して残差分析を行ったところ、死の課題群における「時間重視」( $p < .01$ ) および、生きがいの課題群における「現状後悔・不安」の記述 ( $p < .05$ ) は期待値よりも有意に多く、死の課題群における「現状改善・願望」の記述は期待値よりも有意に少なかった ( $p < .05$ )。次に、課題前後における時間的態度の変化の様相によってカテゴリの比率に差がみられるのかを調べるため、各カテゴリと課題前後での時間的展望体験尺度の変化の様相 (上昇・変化なし・下降) のクロス表を課題群ごとに作成し、Fisher の正確確率検定を行った。その結果、死の課題群におけるクロス表 (Table 5-6) のみ、有意な結果となった ( $p = .02$ )。Table 5-5 と同様に、統計量がモデル分布に従うと考えられる 5 以上の度数のセルに対して残差分析を行ったところ、課題後に時間的展望体験尺度の得点が上昇した実験参加者における「時間重視」の記述が期待値よりも有意に多かった ( $p < .05$ )。

#### 4. 考察

本研究の目的は、青年期において死について考えることが、時間的態度にどのような影響を及ぼすのかについて検討することであった。参加者を死について考える課題を行う群、生きがいについて考える課題を行う群、死や生きがいとは無関係なものについて考える課題を行う統制群の 3 群に分けて実験を行った。死について考えることの効果について、生きがいについて考えることと比較しながら、時間的態度に影響を及ぼすプロセスを含め、実験的に検討した。

時間的展望体験尺度を従属変数とした分散分析の結果、死の課題は、生きがいの課題や統制課題よりも時間的態度を肯定的にすることが示された。時間的展望体験尺度の総得点においてみられた、課題後に死の課題群の得点が高くなり、生きがいの課題群の得点が低くなるという時期と課題の交互作用は、死について考えることが全体的に時間的態度を肯定的にするということを示している。また、目標指向性と現在の充実感を従属変数とした場合にも、有意傾向ではあるが、交互作用がみられている。これは、死について考えることは全体的に時間的態度を肯定的にするが、その効果は今生きている現在という時間を充実しているように思うことや、将来に目標を指向するようになることが中心であることを示唆している。しかし、目標指向性においては時期の単純主効果がみられなかったため、生きがいの課題群における課題前の得点の高さが主に交互作用の効果を生み出している可

能性も排除できない。目標指向性と現在の充実感においてみられた交互作用は有意傾向であることから、現在の充実感と目標指向性に中心的な影響があるということは、あくまで示唆にとどめるべきであろう。

課題に対する記述の分析結果からは、他の群と比較して死の課題群において時間重視のカテゴリが多くみられた。また、死の課題群において多くみられる時間重視のカテゴリに分類された実験参加者は、課題後に時間的態度が肯定的になる比率が高かった。時間重視というカテゴリにおける記述を詳細にみていくと、死の課題群においては、死がいつ訪れるか分からないこと、生きている時間はかけがえのない時間であること、それゆえに日々の時間、一瞬一瞬を大切にしたいといった記述がみられた。一方、生きがいの課題群において唯一時間重視のカテゴリに分類された記述は、「まだ先はだいぶ長いけど、時間の使い方が下手だなと感じ、もっと時間を大切に使用したいと思った。」というものであった。時間を大切に使用したいと考えてはいるものの、「まだ先はだいぶ長い」という記述からは、時間の有限性についての認識が少ないことが窺われる。そしてこの記述を書いた実験参加者の時間的展望体験尺度の得点は、課題後に下がっている。時間重視という同一カテゴリにおいてみられた、死の課題群と生きがいの課題群の記述の差異から、死について考えることには、時間の有限性に気付かせるという効果が存在すること、そしてその効果は生きがいについて考えることによって得られないことが示唆された。以上のことから、中心的な影響が現在に対する時間的態度に対するものであることに関しては示唆にとどまったものの、死について考えることは、人生の有限性を認識するという過程を経て、全体的に時間的態度を肯定的にする効果が示されており、仮説は概ね支持されたといえるのではないだろうか。

死について考えることの中心的な効果として示唆された、現在に充実感を感じるようになるという結果は、現在という時間のみを大切にしようになることを示しているのではない。人生が有限であることを意識した結果、いつまで続くか分からない先のことは何も考えず、今が楽しければそれで良いという開き直った快楽的態度をとるようになってしまっただけでは、よりよく生きるというデス・エデュケーションの目的とは正反対の結果を引き起こしてしまっていることとなる。しかし本研究の結果においては、目標指向性や希望も課題後に下がることはなく、過去受容も含めて全体的に時間的態度は肯定的になっている。そのため、死について考えることは、そうした刹那主義的な態度を生み出すものではなく、デス・エデュケーションは、先述した文部科学省の道徳の学習指導要領に定めることので

きるものであることを示唆している。

青年期における時間的展望の変化について河野 (2003) は、自我発達の状態とも関連して、最終的には時間的連続性を認識し、複雑な時間体験に裏打ちされた現在指向になると述べている。全体的に時間的態度が肯定的になり、その中でも特に現在の充実感が高くなるという結果は、死について考えることが、河野 (2003) のいう、青年期における最良な時間的展望の持ち方に近づけるものであることを示唆していると考えられる。時間的展望の確立が青年期の発達課題の基礎となることも踏まえると、死について考えることは、青年期において発達の意義も持つのではないだろうか。

ところで、時間的展望体験尺度の総得点を従属変数とした分散分析の結果からは、生きがいの課題群において課題後に得点が下がることが示された。目標指向性や現在の充実感に関しても生きがいの課題群の得点は下がっているように見えるが、そもそも課題前の得点が高いこと、下がっても他 2 群の課題前と同程度の得点であることを踏まえると、生きがいについて考えることは、時間的態度を否定的にするわけではないと考えられる。しかし、生きがいについて考える課題群の課題後の得点は、死について考える課題群の課題後の得点よりも低く、死について考えることのように、時間的態度を肯定的にする効果を持つとは考えにくい。そのため、先述した死について考えることが時間的態度を肯定的にするという効果を示す結果は、生きがいについて考えることと比較した際にも妥当であるといえるのではないだろうか。また、分散分析の結果みられた交互作用の効果は、生きがいの課題群における課題前の得点が高いことのみによってみられた可能性も考えられる。しかし、時期の単純主効果の検定結果からは、生きがいの課題群のみでなく、死の課題群においても有意差がみられ、統制群では有意差がみられなかった。これらの結果は、分散分析の結果みられた交互作用の効果が、生きがいの課題群における課題前の得点のみからなっているわけではないことを示している。ただし、生きがいについて考えることと明確に比較を行うためにも、今後はなるべく課題前の状態が群間で等質なサンプルを用いた追試が望まれる。

効果が明白でない一方、生きがいといったポジティブなものから生き方について考えることは、死というネガティブなものから考えることよりも、抵抗が少ない傾向にあると思われる。各課題に対する記述量の分析の結果、生きがいについて考える課題に対する記述量は、死について考える課題や、それらとは無関係なものについて考える課題に対する記述量よりも有意に多かった。この結果から、死などから生き方について考えるよりも、生

きがいからの方が生き方について考えやすい傾向にあることが窺える。学校現場においても、自分の生き方について、生きがいといったポジティブなものから考えさせると、死というものから考えさせるよりも、生徒はより多くのことを書くことが予想される。しかしその反面、時間的態度への影響は明白でないため、文章量にばかり目を向けることは望ましくないかもしれない。

本研究では、青年期において死について考えさせることが、現在を中心として全体的に時間的態度を肯定的にする効果を持つこと、そして自由記述の分析結果からは、そのメカニズムとして、人生の有限性について再認識することが媒介していることが示された。これらの結果は、現在必要性が認識されるようになってきたデス・エデュケーションの持つ心理的機能の一部を明らかにしたといえるであろう。これまで恐怖や不安といったネガティブな面だけに焦点づけられることが多かった死 (丹下, 1995a) のポジティブな面に着目し、デス・エデュケーションが持つ効果を、時間的態度という側面から、一部ではあるが実証した点において本研究は意義があると思われる。しかし、先にも述べたように、各群の課題前における時間的展望体験尺度の得点差からは、課題群ごとにサンプルが等質ではなかった可能性も考えられる。課題前の質問紙を実施した後に群分けを行うなど、今後は群によってサンプルが偏らない工夫が求められる。実験参加者の男女比に関しても、本研究におけるサンプルでは差が大きいため、結果の一般化には慎重になる必要があるだろう。また本研究では死について考えたことによる長期的な効果については言及できないため、本研究によってみられた効果が持続するものなのかについて、今後、縦断的に研究を行う必要がある。そして、本研究の対象者は時間的展望の獲得期とされる青年期のうち、その後期にあたる大学生であったが、一般的な死の概念は青年期前期までに身につくとされており (仲村, 1994)、その青年期前期にあたる中学生や、中期にあたる高校生に対しても、死について考えることの効果を検討することで、デス・エデュケーションを実施する最適な時期についても明らかにしていく必要があるだろう。

また、本研究の結果のみでは、死について考えることと、生きがいについて考えることの差異については明確にすることができない。死について考えることが中心的に影響を与えると考えられる現在の充実感得点は、現在の生活に対する満足度や充実感を測定する項目からなっており、死ぬよりはまだ生きている方がよいといった消極的な理由から得点が上がった可能性も考えられるのである。一方、自由記述には「死ぬよりは生きていたい」といった消極的な記述はみられず、「死ぬときに後悔のないように今を大切に生きる」とい

った積極的な記述が多くみられている。また、過去受容や目標指向性、希望なども含めて全体的に得点が上昇していることから、死について考える群においてみられた結果に関しては、人生の有限性を認識することを通してかけがえのない現在により充実感を感じるようになったと解釈するのが妥当ではないだろうか。ただし、生きがいについて考える群においては、残差分析の結果、現状後悔・不安の記述が多くみられているため、立派な生き方をしている文章を読んだことで反省的な気持ちになり、今の生活が充実していないように思えて得点が下がった可能性は、課題前の得点の高さを差し引いても否定できない。また、本研究において生きがいについて考える課題として用いた文章は、中年期以降の筆者によって書かれていると思われる。そのため、青年期にある実験参加者にとっては、自分自身のこととして実感を持って考えにくく、そのことが結果に影響を与えた可能性も否定できない。死について考えることと生きがいについて考えることの差異に関して、今後は筆者の年齢等、用いる題材の条件を統一しての検討が望まれる。

デス・エデュケーションの方法には体験型のものも含めた様々な形態が考えられるため、今後は様々な方法を用いて研究を進めていく必要がある。本研究においては、倫理的問題を考慮し、死について考える課題の文章として、実験参加者への心理的負担が少ないと考えられる臨死体験談を用いた。白井 (2001b) は、現在のかけがえのなさに気付くのは時間的な広がりの中であるとしているが、臨死体験談は、死が明日にでも訪れるかもしれないといったように、むしろ時間的な広がりをも狭めるようなものであるようにも思われる。しかし課題後に時間的態度が肯定的になるという結果が得られているため、比較的近い未来について考えることが一般的である青年 (Nurmi, 1989) にとって、近い未来に起こる死については考えやすく、効果が出やすいものであった可能性もある。同じ死でも、老年期に訪れる死について考えるなど、白井 (2001b) の指摘するような時間的な広がりを持つものも考えられるため、時間的な広がりによっても、効果に違いがみられるのかどうか検討していく必要がある。様々な文章、方法を用いて、今後デス・エデュケーションの効果について検討していくことが課題である。

## 第2節 人生の終点を考えることと時間意識（研究6）

### 1. 問題と目的

今日、陰湿ないじめや自殺，非行や売春，ニートや引きこもりなど，青年による生命を軽視するような行動が問題となっている。海老根（2009）は，青年によるいのちを粗末に扱う事件に対し，家庭における死生観育成の機会が減少したことの影響を指摘し，こうした教育は学校教育が担うべき重要な課題であるとしている。病院死の増加や核家族化，テレビゲームによる架空の死の体験等によって，現代青年は死と真剣に向き合うことが出来ず，生や死についても学校において教育を行う必要が出てきている。

#### よりよい生に着目したデス・エデュケーション

生と死を扱う教育であるデス・エデュケーションは，青年がよりよく生きることに寄与し，こうした必要性に応え得るものと考えられる。デーケン（2001）は，人間は生の究極の到達点である死の日まで，自分に与えられた時間をいかに生きようかと考えて，積極的に歩みだすべきであるとし，デス・エデュケーションはそのまま，自分の死までの毎日をよりよく生きるためのライフ・エデュケーションになるとしている。田井（2002）も，すべての人間がいずれは死に直面しなければならず，そのような死に至るまでの生のあり方の問題こそがデス・エデュケーションの対象であると述べている。死を意識することによって，人間は最後の段階まで成長するという Kubler-Ross（1974 川口訳 1975）の主張からも，デス・エデュケーションの生への影響が窺われる。さらに Attig（1992）は死というテーマの中にある生きることに関して理解を深めることの重要性を示しており，Kurlychek（1977）も，デス・エデュケーションの生への影響を強調している。死から生について考えるデス・エデュケーションが，よりよい生をもたらすと思われる。

しかし，こうした生に着目したデス・エデュケーションの効果研究は少ない。ごくわずかに検討されたよりよい生へのデス・エデュケーションの効果として，Wong（2009）は死に対する態度と生に対する態度の関連が強まることを示しており，Hee and Eunjoo（2009）は人生満足感が高まることを示しているが，その作用機序は不明瞭である。統制群が設けられていないために効果が実証的に検討されていないといったことも含め，実践とは距離があると言わざるを得ない状況である。デス・エデュケーション普及のためには，理論的背景

やメカニズムも含め、よりよい生に着目した効果の実証が必要不可欠である。

### 死について考えることと時間的態度

死を扱うことは、青年の生き方の中でも特に、過去・現在・未来に対する感情的評価のことである時間的態度 (白井, 1994a) に影響を与えることが予想される。白井 (2001b) は、死を自覚することにより、漫然と過ごしていた時間の貴重さに気がつくようになり、自分の価値観を批判的に吟味しはじめるとしている。下島・蒲生 (2009) では、死に行く過程の疑似体験という課題に取り組んだ大学生が、現在を重視するようになったり、未来を具体的に展望するようになったりすることが示されている。Hankoff (1975) も、死との対峙が青年に、人生における時間の意義の感覚をもたらすと述べており、大学生に余命の過ごし方について考えさせた石田 (2008) は、多くの学生が残された時間を精一杯どのように生きるか模索し、自分の人生を大切にしたいという前向きな姿勢がみられたとしている。統制群や対照群も用いた実験によってより直接的に検討が行われた石井 (2013) においても、死について考えることで時間的態度が肯定的になることが実証されている。

### 死について考えることの効果の個人差

死について考えることの時間的態度への効果は確認されつつあるが、デス・エデュケーション実践を行っていくためにはまだ明らかにすべきことがある。これまで多くのデス・エデュケーションが死の恐怖や不安の軽減を目的として行われてきているが、デス・エデュケーションによる死の不安や恐怖の変化は一貫していない。例えば、Peal, Handal, and Gilner (1981) や Hutchison and Scierman (1992) などでは死の不安や恐怖が低下することが示されている一方、Knight and Elfenbein (1993) や Bailis and Kennedy (1977) などでは反対に増加することが示されている。研究間で結果に差異が見られるだけでなく、Knight and Elfenbein (1993) では、全体を合算すると死の不安や恐怖が増加することが示されているものの、効果には個人差が大きかったことを報告している。教育の最適化を目指すための 1 つの方法として、Cronbach (1957) が適性処遇交互作用 (ATI) を提唱しているように、死についての教育に関しても、個人の適性によって効果に違いがみられることは想像に難くない。実際に Maglio and Robinson (1994) や Johansson and Lally (1990) では効果の個人差に及ぼす要因として、職業や教育レベル、年齢や性別といったものに焦点を当てた検討が行われている。よりよい生に着目したデス・エデュケーションに関しても、個人差の検討なく



して実践に進んでいくことはできず、またその際にはより心理学的な要因やプロセスを明らかにしていく必要がある。

よりよい生に着目したデス・エデュケーションでは、死に至るまでの生のあり方を考えていくことが大切とされる (Attig, 1992; デーケン, 2001; 田井, 2002)。白井 (1994b) は、死の問題に取り組むことは生の問題に取り組むことであり、死の自覚によって時間の貴重さに気付き、生活の質、ひいては真の自己実現へとつながると主張している。小松 (2001) の実践においても、死に触れることで今をどう生きるかといった生き方を再考することが示されている。死生観と人生観との関連を量的に検討した石坂 (2006) においても、死をどう捉えるかということが、生にどう向き合うか、つまりその人の生き方を方向づけるとしていいる。そして藤原 (2011) は、死を肯定的に捉えることによって、生に目を向け、残された時間をいかに有為なものにするかを考えて生の意味を問うことにつながると主張している。死について考えた際、死を肯定的に捉えることができるか否かが、生について考えること、そして時間的態度への効果に結びつくかを決めると予想されるため、その死の捉え方に影響を与える要因こそが効果の個人差を生み出す要因となるだろう。

死の捉え方には、青年の自我の発達に関わっていることが指摘されているが (森田, 2007; 丹下, 1995b)、特にその基礎に位置づけられる時間意識との関連が予想される。時間意識とは、過去・現在・未来への個人の意識 (河野, 2003) と定義され、意識の量の側面が検討されるものである (石井, 2015b)。本研究における効果指標として先述した時間的態度は感情的評価の側面であり、時間意識とは概念的に区別されている (Hulbert & Lens, 1988; Nuttin & Lens, 1985; 白井, 1997)。こうした時間の意識的な側面と死の捉え方との関連について検討した松田 (1996) は、未来への意識を強く持つほど死を否定的に捉えており、反対に現在への意識を強く持つほど死を否定的に捉えていないことを見出している。高瀬・平井 (1999) においても、現在への意識が強いほど死を肯定的に捉えており、反対に現在への意識が弱いほど死を軽視したり否定的に捉えていたりすることが示されている。死について考えた際、現在意識が高い場合には死を肯定的に捉え、死までの現在をどう生きるかについて考えることができる一方、現在意識が低い場合には死を軽視したり否定的に捉えたりしてしまい、生のあり方を考えることにはつながらないことが予想される。つまり、死について考える前から持つ現在意識の高さによって、死について考えることの効果は異なると予想される。

## 本研究の目的と仮説

以上のことから、青年が自分自身の死について考えることで得られる、現在に充実感を持ち、未来に目標を指向するようになるといった時間的態度への効果は、死の捉え方を介して現在意識の高さによって調整されるという仮説を立てることができる。つまり、現在意識が高い場合には、死について考えた際に肯定的に死を捉えることができ、時間的態度を肯定的にする効果に結びつく一方、現在意識が低い場合には死を否定的に捉えてしまい、効果に結びつかないと考えられる。本研究では、これらの仮説の検証を通して、青年期において死について考えることの時間的態度への効果に影響を及ぼす個人差要因について検討することを目的とする。さらに本研究では、死の捉え方に加えて生き方に関する自由記述への回答を求め、現在意識が効果に影響を与える作用機序に関しても探索的に検討を行うこととする。

## 2. 方法

### 対象

私立 A 大学学生 67 名、公立 B 短期大学学生 132 名、計 199 名を対象に実験を行った。死について考える課題およびその前後の質問紙すべてに取り組んだ者のうち、課題や質問紙の回答に不備のあった者、青年期でない可能性の高い 26 歳以上の者を除いた 32 名 (男性 15 名、女性 17 名；平均年齢 19.47 歳) を分析対象とした。

### 実施時期

2013 年 10 月。

### 手続き

大学の「心理学」関連科目の講義時間において、課題およびその前後の質問紙を順に配布し、その場で回答を求め回収する一斉配布、一斉回収方式での実験を 2 週間に渡って実施した。課題に取り組む 1 週間前に課題前の現在の充実感と目標指向性、および現在意識を、課題に取り組んだ後すぐに課題後の現在の充実感と目標指向性を測定した。課題後の測定においては、課題をすべて終えたかを全体に確認した後、質問紙を配布した。

## 倫理的配慮

課題の表紙には、課題の内容が「死」というテーマであること、そうしたものに抵抗がある場合には課題に取り組まなくて良いこと、いつでも中断して良いことを明記し、口頭でも十分に説明を行った。その上で協力してもらえる参加者には、実験参加に「同意する」という表紙の項目に丸を付けてもらった後、課題に取り組んでもらった。

## 質問紙

**時間的態度の測定** 白井 (1994a) の時間的展望体験尺度の一部を使用した。この尺度は、過去に対する時間的態度を測定する「過去受容」4項目、現在に対する時間的態度を測定する「現在の充実感」5項目、未来に対する時間的態度を測定する「目標指向性」5項目と「希望」4項目の4下位尺度、計18項目からなる。白井 (1994a) では本尺度の内的整合性による信頼性、構成概念妥当性が確認されている。そのうち、死について考えることの効果指標として想定される「現在の充実感」と「目標指向性」の計10項目を使用した。現在の充実感は「毎日の生活が充実している」、目標指向性は「私には将来の目標がある」などの項目からなる。項目の回答形式は「1 あてはまらない」「2 どちらかといえばあてはまらない」「3 どちらともいえない」「4 どちらかといえばあてはまる」「5 あてはまる」の5件法で、得点が高いほど現在の充実感、目標指向性を持つことが示されるように得点化した。

**現在意識の測定** 石井 (2015b) の時間意識尺度の1下位尺度である「現在意識」5項目を用いた。「今を一生懸命生きている」、「目の前のことを意識している」といった項目から成り、石井 (2015b) では、本尺度の内的整合性による信頼性、構成概念妥当性が検討されている。項目の回答形式は「1 あてはまらない」「2 どちらかといえばあてはまらない」「3 どちらともいえない」「4 どちらかといえばあてはまる」「5 あてはまる」の5件法で、得点が高いほど現在意識を持つことが示されるように得点化した。

**死の捉え方と生き方についての考えの測定** 死に関する文章を読ませた後、「文章を読んで、あなたは自分自身の「死」について、どのように考えましたか。」および「文章を読んで、あなたは自分自身の生き方について、どのように考えましたか。」という教示文への回答を自由記述形式で求めた。回答欄はA4判用紙でそれぞれ1/3程度のスペースを設けた。

Jankélévitch (1966 仲沢訳 1978) によれば、死には、一般的な事柄、トピックとしての死のことである第3人称の死、身近な人に関する死のことである第2人称の死、そして自分自身がこれから遭遇するであろう死のことである第1人称の死の3つがあるとされる。先

述の死に行く過程の疑似体験という課題を大学生に行った下島・蒲生 (2009) は、第1人称の死について考えることが、人生の延長上にある死を真剣に考え、参加者に様々な気付きを与えるものであったと考察している。本研究のように効果指標として時間的態度に着目した場合にも、自分の人生の延長上にある死を真剣に考えることが必要と思われるため、第1人称である自分自身の死について考えることを求めた。

### 死について考える課題

死に関する1000字程度の文章を読ませた。課題と死および生き方に関する質問への回答時間は20分程度であった。以下は課題に用いた文章の要約およびその文章を用いた理由である。なお、文章に対する印象の統制を目的として、文章の前ページには「次のページに書かれた文章は、30代の方が死について書かれたものです。この文章を読み、それに続くページの質問に答えてください。」という教示を記した。

**課題に用いた文章** 出典は三重大学大学院教育学研究科修士論文(鈴木, 2004)の冒頭部。バイク事故に遭った筆者の体験談。バイクで正面衝突した筆者は、宙を舞いながら「自分はこのような軽率なことで、このかけがえのない生を失うのか」と後悔と無念さを感じる。数日後に意識不明の重体から脱した筆者は、自分の生が新しくリセットされたことを実感する。死ぬことは容易で当たり前のことであり、恐れるに足りないと感じると同時に、今まで自己の死を無意識の中で否定し、自己実現を至上目標と掲げてきた自分自身の生が、実体のない幻影であることに気付き恐怖に震える。その恐怖は、自己の存在を再認識する中から湧き上ってくる強烈なものであり、生きるということの本質に向かい合った衝撃と恐怖で、その夜から日が昇った後も、夕刻まで一睡もすることができなかつたとくくられている。

死を感じる体験である一方、本当に死ぬわけではない点で、実験参加者への心理的負担は少なく出来ると考えられる。また、誰にでも起こり得る事故という出来事を通して死に触れた体験談であり、実験参加者が自分自身の死について考えやすいのではないかと思われるため、この文章を用いた。

## 3. 結果

### 尺度構成

Table 6-1  
現在の充実感と目標指向性および現在意識の平均値と標準偏差および $\alpha$ 係数 ( $N=32$ )

|        | 課題前      |           |             | 課題後      |           |             |
|--------|----------|-----------|-------------|----------|-----------|-------------|
|        | <i>M</i> | <i>SD</i> | $\alpha$ 係数 | <i>M</i> | <i>SD</i> | $\alpha$ 係数 |
| 現在の充実感 | 2.99     | 0.81      | .77         | 3.02     | 0.89      | .84         |
| 目標指向性  | 3.18     | 0.97      | .82         | 3.19     | 0.91      | .84         |
| 現在意識   | 3.89     | 0.67      | .78         |          |           |             |

白井 (1994a) での尺度構成に従い、現在の充実感および目標指向性の各項目の得点を合計し、そのそれぞれの平均値を各下位尺度得点とした。各下位尺度の内的整合性を検討するため、Cronbach の  $\alpha$  係数を算出したところ、現在の充実感については  $\alpha = .77$  (課題前) および  $\alpha = .84$  (課題後)、目標指向性については  $\alpha = .82$  および  $\alpha = .84$  となり、内的整合性が確認された。現在意識に関しても、石井 (2015b) での尺度構成に従い、5 項目の得点を合計し、その平均値を現在意識得点とした。Cronbach の  $\alpha$  係数を算出したところ  $\alpha = .78$  となり、内的整合性が確認された。各下位尺度得点および項目群得点の平均値と標準偏差および  $\alpha$  係数を Table 6-1 に示す。また死の捉え方の指標として、死についてどう考えたかという自由記述の 1 問目の質問に対する個人の記述を、肯定—否定の観点から 3 つのカテゴリに分類した。死をポジティブに捉えている、もしくは死からポジティブに生きることに言及している記述がみられる場合には「肯定的な受け止め」のカテゴリに、死に関する単なる事実や知識を記述するにとどまる場合には「中性的な理解」のカテゴリに、死をネガティブなものとしてとらえている、もしくは考えるのを避けている記述がみられる場合には「否定的・拒否」のカテゴリに分類した。それぞれの分類の代表的な記述を Table 6-2 に示す。分類は著者に加え、本研究の主旨を知らない心理学を専攻する大学院生 2 名と行い、評定者間で分類が異なる場合には協議の上、1 つのカテゴリに分類した。なお評定者間の一致率は 78.13%であった。

Table 6-2  
死に関する記述の分類カテゴリと代表的な記述 ( $N=32$ )

| 分類カテゴリ   | 代表的な記述                            |
|----------|-----------------------------------|
| 肯定的な受け止め | 「死ぬまで自分らしく生きようと思う」「満足して死にたい」      |
| 中性的な理解   | 「死とは生と隣り合わせなもの」「いつ死がくるかは誰にも分からない」 |
| 否定的・拒否   | 「死ぬときは後悔や無念を感じる」「何も考えなかった」        |

Table 6-3  
課題前後の時間的態度と死の捉え方および現在意識の相関係数 (N=32)

|              | 現在の充実感 (課題前) | 現在の充実感 (課題後) | 目標指向性 (課題前) | 目標指向性 (課題後) | 死の捉え方 |
|--------------|--------------|--------------|-------------|-------------|-------|
| 現在の充実感 (課題後) | .78**        |              |             |             |       |
| 目標指向性 (課題前)  | .32†         | .38*         |             |             |       |
| 目標指向性 (課題後)  | .37*         | .53**        | .88**       |             |       |
| 死の捉え方        | .13          | .22          | .14         | .26         |       |
| 現在意識         | .58**        | .67**        | -.01        | .17         | .32†  |

† $p < .10$ , \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$

### 現在意識と死の捉え方および死について考えることの効果の関連

現在意識が死の捉え方を介して死について考えることの効果に影響を与えることを仮定したモデルの検証を、構造方程式モデリングを用いて行った。各変数間の相関係数は Table 6-3 に示す通りである。

**現在の充実感を効果指標とした検討** 死について考えることの効果指標として現在の充実感を用いて構成したモデルを Figure 6-1 に示した。Table 6-3 に示した相関係数を参考に、課題前の現在の充実感と現在意識との間には共分散を仮定した。このモデルでは、 $\chi^2(1) = 0.14, p = .71, GFI = 1.00, AGFI = .98, CFI = 1.00, RMSEA = .00$  と十分な適合度が得られた。課題後の現在の充実感には、パス係数.66 ( $p < .01$ ) の課題前の現在の充実感の他に、現在意識からの直接のパス係数が.41 ( $p < .05$ ) と有意であった。一方、死の捉え方には現在意識からのパスが.34 と有意傾向であったものの、死の捉え方から課題後の現在の充実感へのパスの係数はほぼ 0 に近く有意ではなかった。課題前の現在の充実感と現在意識との間の共分散

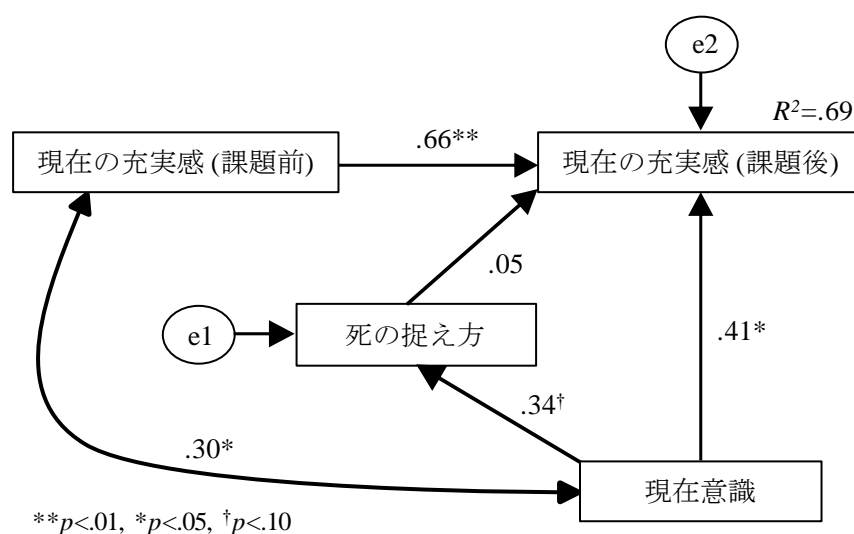


Figure 6-1. 死について考えることの効果に現在意識および死の捉え方が及ぼす影響 (効果指標：現在の充実感)

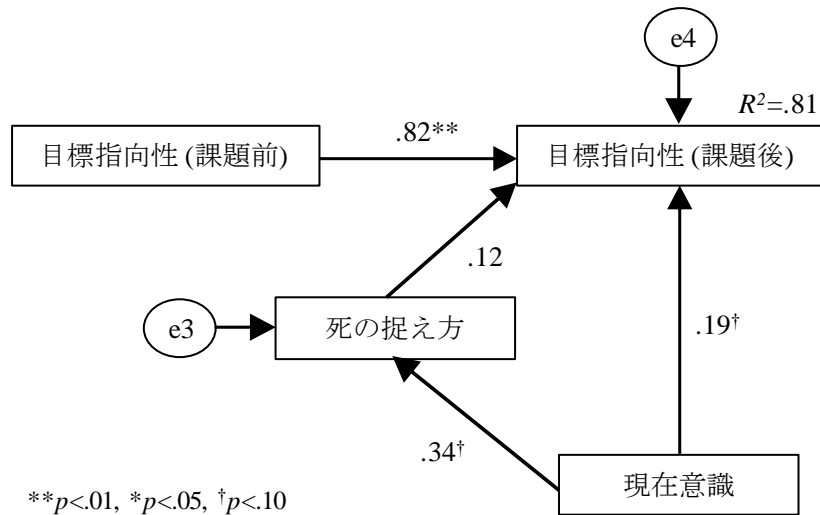


Figure 6-2. 死について考えることの効果に現在意識および死の捉え方が及ぼす影響 (効果指標：目標指向性)

も.30で有意となった ( $p < .05$ )。これらから課題後の現在の充実感の重相関係数は.69を示した。

**目標指向性を効果指標とした検討** 死について考えることの効果指標として目標指向性を用いて構成したモデルを Figure 6-2 に示した。このモデルでは、 $\chi^2(2) = 0.68$ ,  $p = .71$ , GFI = .99, AGFI = .95, CFI = 1.00, RMSEA = .00 と十分な適合度が得られた。課題後の目標指向性には、パス係数.82 ( $p < .01$ ) の課題前の目標指向性の他に、現在意識からの直接のパス係数が.19 ( $p < .10$ ) と低い値ではあるが有意傾向であった。Figure 6-1 のモデルと同様、死の捉え方には現在意識からのパスが.34 と有意傾向であったものの、死の捉え方から課題後の現在の充実感へのパスの係数は.12 と低い値であり有意ではなかった。これらから課題後の目標指向性の重相関係数は.81を示した。

### 現在意識が死について考えることの効果に及ぼす影響

現在意識の高さによって死について考えることの効果がどのように異なるのかを詳細に検討するため、実験参加者を現在意識得点の高群と低群に分け、課題前後における現在の充実感および目標指向性の平均値の比較を行った。なお、群分けは現在意識得点の平均値を基準とした。現在意識高低群を独立変数、現在の充実感と目標指向性の課題前後の差得点を従属変数として1要因分散分析を行ったところ、現在の充実感 ( $F(1, 31) = 5.18$ ,  $p < .05$ ,  $\eta_p^2 = .15$ ) および目標指向性 ( $F(1, 30) = 4.44$ ,  $p < .05$ ,  $\eta_p^2 = .13$ ) の両方において有意差がみられ、いずれも現在意識高群の方が、差得点の平均値は高かった。課題前後における各群

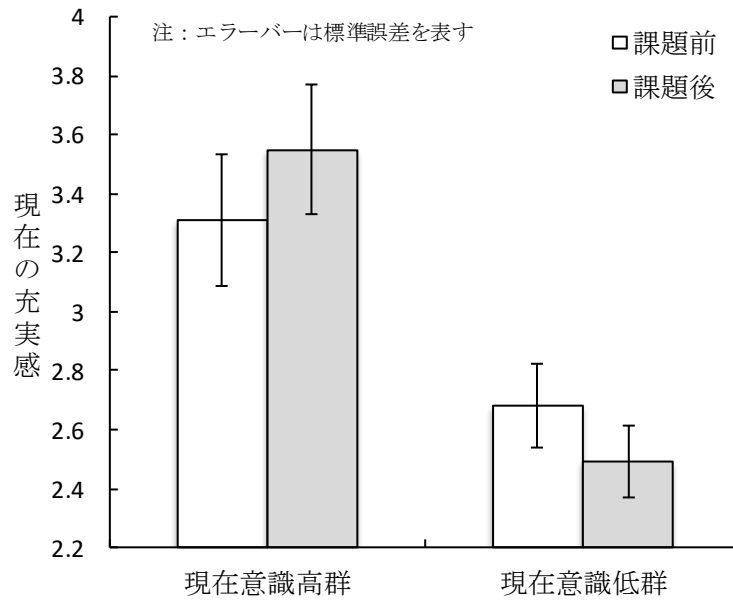


Figure 6-3. 2×2 (課題前・課題後×現在意識高低群)の現在の充実感得点の平均値

の平均値の推移を Figure 6-3 および Figure 6-4 に示す。

### 現在意識が死について考えることの効果に及ぼす影響の作用機序に関する探索的検討

死について考えることの効果に現在意識が影響を及ぼす作用機序について探索的に検討を行うため、課題後にどのように生き方について考えたのかという自由記述の2問目に関

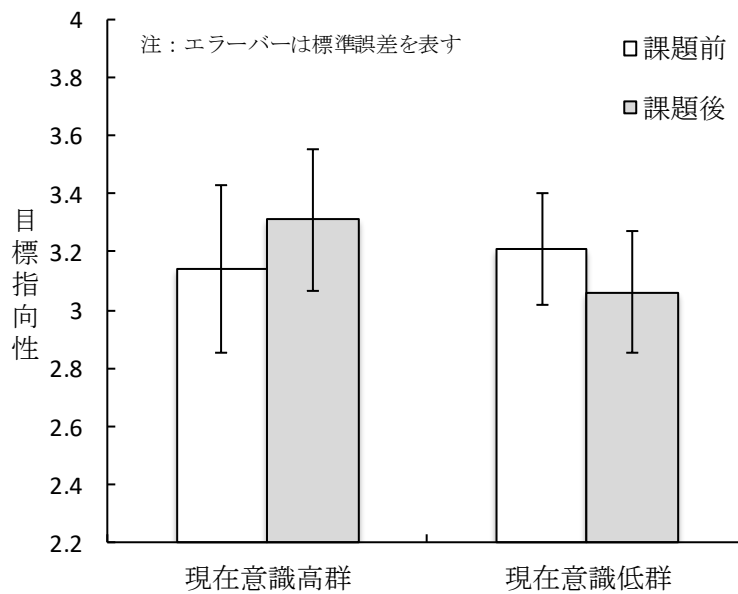


Figure 6-4. 2×2 (課題前・課題後×現在意識高低群)の目標指向性得点の平均値



Table 6-4  
 現在意識高・低群における生き方に関する記述の分類 (N=32)

|        | 過去の人生<br>への言及 | 現在の人生<br>への言及 | 未来の人生<br>への言及 | 合計           |
|--------|---------------|---------------|---------------|--------------|
| 現在意識高群 | 2<br>6.25     | 11<br>34.38   | 3<br>9.38     | 16<br>50.00  |
| 現在意識低群 | 0<br>0.00     | 5<br>15.63    | 11<br>34.38   | 16<br>50.00  |
| 合計     | 2<br>6.25     | 16<br>50.00   | 14<br>43.75   | 32<br>100.00 |

注：上段は度数・下段は各群における比率(%)を示す

する分析を行った。

生き方についてどう考えたかという自由記述 2 問目の質問に対する個人の記述を、効果指標および個人差変数に関わりの深い「時制」を基準として、「過去の人生への言及」、「現在の人生への言及」、「未来の人生への言及」のカテゴリに分類を行った。1 人の記述は、最も当てはまると思われるいずれか 1 つのカテゴリに分類した。なお分類は著者に加え、本研究の主旨を知らない心理学を専攻する大学院生 2 名と行い、評定者間で分類が異なる場合には協議の上、1 つのカテゴリに分類した。評定者間の一致率は 75%であった。

現在意識の高低によってこれらのカテゴリに入る記述数の比率に差があるのかを調べるため、カテゴリと現在意識高低群のクロス表を作成し (Table 6-4)、Fisher の正確確率検定を行ったところ、有意な結果が得られた ( $p = .01$ )。そこで、統計量がモデル分布に従うと考えられる 5 以上の度数のセルに対して残差分析を行ったところ、現在意識高群における「現在の人生への言及」( $p < .01$ ) および、現在意識低群における「未来の人生への言及」( $p < .01$ ) は期待値よりも有意に多く、現在意識低群における「現在の人生への言及」の記述は期待値よりも有意に少なかった ( $p < .05$ )。

#### 4. 考察

本研究の目的は、青年期において死について考えることの時間的態度への効果に、死の捉え方を介して現在意識という個人差要因が及ぼす影響について検討することであった。大学生を対象として質問紙を用いた実験を行った。

## 効果の個人差に関するモデル

現在意識が死の捉え方を介して死について考えることの効果に影響を与えることを仮定したモデルの検証を、構造方程式モデリングを用いて行ったところ、仮説通りの結果は得られなかった。現在の充実感と目標指向性のどちらを効果指標とした場合においても、現在意識が死の捉え方を介して効果に及ぼす影響はほとんど見られず、現在意識が直接、効果に影響を及ぼしていることが示された。死について考えることが時間的態度に対して効果を持つためには死から生について考えることが必要であり、そのためには死を肯定的に捉えることが、そして死の捉え方には現在意識が必要というモデルが想定されていた。現在意識と死の肯定的な捉え方との関連は、高瀬ら (1999) を支持する結果が得られたが、死の肯定的な捉え方が生について考えることにつながることを示されなかった。石坂 (2006) は、死の捉え方と生の捉え方を横断的に検討して関連を見出しているが、本研究は死について考えることが時間的に先行し、生の捉え方にどう影響するかを縦断的に検討している。死について書かれた文章を読み、どう死を捉えたかは文章の読解の仕方にも依存し、もともとの死の捉え方とは異なっていた可能性がある。石坂 (2006) の横断的な知見はもちろん、本研究においても死の捉え方のベースラインを測定していないため、死の捉え方の変化によって生の捉え方がどう変化するのかについては、今後検討していく必要があると思われる。

変化に着目して検討する余地はあるものの、本研究においては死の捉え方自体の影響は示されず、現在意識が直接、死から生について考えることに影響を与えることが示されている。得点の推移について分散分析を用いて検討を行ったところ、現在の充実感および目標指向性のどちらを効果指標とした場合においても、現在意識高群では課題後に平均値が上昇すること、低群では反対に下降することが示された。さらに生き方の自由記述の分析からは、現在意識が高い場合には、死について考えた後でも現在の生き方について考えること、現在意識が低い場合には、現在ではなく未来の生き方について考えることが示された。充実感を持ち、目標を指向するようになるという死について考えることの効果には、死という未来を通して現在の生き方について考えるという過程があるため、現在という時間への意識の高さが影響を及ぼしたと思われる。

## 死について考えることと青年期の発達

死について考えることの効果、そしてその効果に影響を与える個人差要因としての現在意識の高さは、時間的展望の発達と関連していると考えられる。大学生を対象として時間的指向性について調査を行った白井 (1997) では、調査対象の青年の内 76.2%が過去や未来への意識よりも現在意識を高く持っていることが示されている。Lewin (1951 猪股訳 1979) は時間的展望の発達を、年齢とともにより遠い未来と過去が現在の行動に影響を及ぼすようになること、現実と非現実とが分化することとした。特に青年期の発達に関して白井 (1997) は、目標手段関係の認知が発達するに伴い、将来の目標を達成するための現在の行動が重要になり、認知能力としての将来展望は拡大する一方、成人期への移行まで関心事としての将来展望は狭まるとしている。青年期には現実的な未来を展望し、その未来のためという手段的な考えを持つことで、現在への意識が高くなると考えられる。そうした未来への手段的な考えによって現在への意識を高く持っている青年が、死について考え、人生の有限性に触れた結果、現在という時間そのもののかけがえのなさを再確認して充実感が高まり、目標への指向性もさらに強まったのではないだろうか。

死について考えることの効果は、青年の自我同一性との関連も窺われる。青年期において相対的に現在を重視する人の割合が多いことは先述した通りであるが、その一方で白井 (1997) は、自我同一性が確立している場合には相対的に未来を重視する人の割合が多いことを見出している。死について考えることが効果を持つためには現在意識の高さが必要であるという本研究で得られた知見を合わせて考えると、自我同一性が確立されている場合には死について考えることが効果を持たないと予想することができる。ただし、Zimbardo and Boyd (1999) は、バランスの取れた時間的展望が心理的にも身体的にも健康で理想的な時間的展望であるとしており、Shirai, Nakamura, and Katsuma (2012) においては、過去・現在・未来のバランスの取れた時間的指向性が青年の自我同一性の確立と関連することが示されている。自我同一性が確立された場合には、相対的には未来への意識が強いものの、そこには現在への意識や過去への意識が統合されていると考えられ、その場合には本研究で見出された結果が当てはまらない可能性がある。今後、自我同一性を統制して死について考えることの効果を検討する必要がある、そうした研究によって死について考えることの効果と自我同一性との関連が明らかにされていくことが期待できるだろう。

### 今後の課題と本研究の限界点

本研究において、現在意識が高い場合には死について考えることで現在の充実感と目標

指向性が高まること、また現在意識が低い場合にはその反対の影響が示された。死について考えることが効果を持つためには、死という未来を通して現在の生き方について考えるという過程があるため、現在という時間への意識の高さが重要になると考えられる。こうした本研究の結果からは、より安全にデス・エデュケーションを行うための方策を考えることができる。現在意識が低い場合に死について考えると時間的態度が否定的になることが示されているため、デス・エデュケーションの実施前には現在意識を測定しておくことで、こうした否定的な影響を避けることができる。また、こうした効果を左右する要因である現在意識を高めることが可能であるかどうかについても、今後検討していく必要があるだろう。

本研究で示された現在意識の重要性は、課題として用いた文章の内容とも関連していると考えられる。本研究の課題として用いた文章は、交通事故による臨死体験談であり、自分自身の死が今すぐにでも起こるかもしれないという意識を実験参加者に与えるものであったと考えられる。死について考えることの効果は、死から現在の生き方について考えることで得られると思われるが、本研究での課題はより現在の生き方について考えさせるものであり、そのために現在意識が効果を左右する要因となった可能性がある。未来に訪れる死について考えた場合には未来への意識が効果を左右する可能性も考えられるため、今後は複数の題材を用いて、各時間意識と死について考えることの効果との関連を検討していく必要があるだろう。さらに、死や時間についての考えは宗教や文化によっても異なるため、本研究で得られた効果が西洋諸国など異なる文化的背景を持つ国々においてどのような効果を持つのか比較検討を行うことで、青年期と死の主題との関係、また青年の理解へとつながるだろう。

また、縦断での実験的な手続きを取っているためやむを得ないものの、本研究での実験参加者数は少ないため、結果の一般化には慎重になるべきである。さらに、本研究は大学の講義時間の一部を用いて、短い時間で質問紙実験を行うという手続きによるものであった。デス・エデュケーションの実践へと近づけていくためには、自分自身の死についてより深く考えて向き合うことのできる手続きやプログラムを作成し、より多くの参加者を対象として効果や個人差を実証していく必要がある。肯定的、否定的な影響の両方において、影響の持続性も含めて検討していくことが今後の課題である。

### 第3節 人生の終点を考えることとアイデンティティ形成（研究7）

#### 1. 問題と目的

この世に生を享けたものには必ず死が訪れる。震災や事故など、突然、自分自身や他者の死と直面せざるを得ない状況に置かれることも決して稀なことではない。そしてそうした状況は個人に様々な影響を与える。死別経験による精神疾患（佐藤，1998）や、東日本大震災による精神疾患（本間・奥山・藤原・江津，2016）はその一例である。他人の死に触れることや、そこから自分自身の死を意識することによる心理的な影響、またそうした事態への適応的な向き合い方を明らかにしていく必要がある。

青年期において自他の死に触れることは、特有かつ重要な意味を持つと考えられる。その理由の1つは、一般的な死に対する概念が青年期前期までに身につく（近藤，2002；仲村，1994）ためである。普遍性や体の機能の停止、非可逆性といった死の現実的意味（仲村，1994）を理解することで、それまでとは異なった死との向き合い方が可能になると思われる。死の現実的な意味を理解できる青年期に入ってから、死への親近性が増すことも示されている（丹下，2004）。もう1つの理由は、青年がアイデンティティ形成という発達課題に取り組むためである。アイデンティティとは、個人が自分の内部に斉一性と連続性を感じられることと、他者がそれを認めてくれることの、両方の事実の自覚である（Erikson，1968 西平・中島訳 2011）。アイデンティティは、過去，現在，未来を生きる個人の時間的なまとまりを問題にしており（Erikson，1963 仁科訳 1977），そうした未来には死が含まれるとされる（松元，2008）。また，青年期には人生の過去の出来事を他の出来事やアイデンティティ等に結び付けようとする自伝的推論（Negele & Habermas，2010）が多く行われる（Habermas & Bluck，2000；Habermas & Paha，2001）。こうした特徴を持つ青年が自他の死に触れると，アイデンティティに結び付けて考えやすい等，発達課題と関連した特有の影響が想定される。

青年が死について考えることは，アイデンティティの形成に影響を及ぼすと思われる。これらの関連を直接検証した先行知見は見当たらないが，デス・エデュケーションや死生観に関する知見はその傍証となる。例えば，デーケン（1986）は，死のテーマを扱うことが私たちの生をより豊かに，味わいのあるものにすると述べている。また，人間は生の究極の到達点である死の日まで，自分に与えられた時間をいかに生きようかと考えて，積極的に歩みだすべきであるとし，デス・エデュケーションはそのまま，自分の死までの毎日を

よりよく生きるためのライフ・エデュケーションになるとしている (デーケン, 2001)。白井 (2001) も、死を意識することで、漫然と過ごしていた時間の貴重さに気付いて自分の価値観を批判的に吟味し、生きる意味について考えるようになるとしている。そして死について考えることは、ただ単に生きることについて考えることとは異なる効果を持つことも実証されている (石井, 2013)。青年が死について考えることは、死までの毎日をいかに生きようかと模索することにつながる。それは、アイデンティティ形成の核心であるコミットメントと探索の重要な構成要素の 1 つと考えられる。そうであれば、死について考えることは、アイデンティティの形成を促すと予想される。

死生観との関連で行われた研究知見は、青年が死について考えることのアイデンティティ形成への影響を、別の側面から傍証している。例えば丹下 (1999) は、アイデンティティを確立している青年の方が、死を人生に対して意味を持つものとして捉えて軽視せず、生を全うさせる意志を高く持つことを明らかにしている。森田 (2007) においては、アイデンティティが形成されている人ほど、人生に意味を見出していること、反対にアイデンティティが形成されていない人ほど、死に関心を持ち、死を苦しみからの解放と捉えていることが示されている。青年期は死生観形成の起点であり (松元, 2008)、死について思索を行うことは発達上の 1 つの通過点であること (丹下, 1995) を踏まえると、アイデンティティ形成の途上で多くの青年は死について考える機会を持っており、アイデンティティの形成状態に応じて、死についての考え方やその影響が異なると思われる。

青年が死について考えることのアイデンティティ形成への影響は、アイデンティティ形成のプロセスと、アイデンティティ・ステータスという 2 つの指標を組み合わせることで検討可能と思われる。アイデンティティの形成は、積極的に関与できると感じられるもの (コミットメント) を形成するために多様な選択肢を探索するプロセスと、選択した対象が真にコミットメントに値するかを検討し、コミットメントを深めていくプロセスから成る (Luyckx, Goossens, Soenens, & Beyers, 2006)。デーケン (1986; 2001) や白井 (2001) の知見は、死について考えることが、こうしたアイデンティティの形成プロセスに影響することを示唆している。一方、アイデンティティ・ステータス (Marcia, 1966) とは、コミットメントを持てているか、およびコミットメントの様々な選択肢について思案したか (探索) によって、達成、早期完了、モラトリアム、拡散という 4 つの地位に個人を分類するものであり、それらの発達の方向性も明らかになっている (Kroger, Martinussen, & Marcia, 2010)。丹下 (1999) や森田 (2007) の知見は概して、アイデンティティの形成が進んでいるほど、

死の意味を肯定的に見出し、積極的に生きていることを示している。青年期は死生観形成の起点とする松元 (2008) の知見や、死について思索を行うことは発達の通過点とする丹下 (1995) の知見も踏まえると、アイデンティティの形成がより進んだ青年は、既に死について思索を行い、アイデンティティに結び付けて形成プロセスに傾倒していると考えられる。もしそうであるとする、死について考えることは、早期完了や達成ではなく、より発達の途上にある拡散やモラトリアムといったステイタスにある青年の、コミットメントを形成していく過程 (コミットメントの形成や広い探求) を促すと予想される。死について考えることが、特定のステイタスにある青年のアイデンティティ形成プロセスに影響を与えるという仮説は、デス・エデュケーションの効果には個人差があり (Johansson & Lally, 1990; Knight & Eifenbein, 1993; Maglio & Robinson, 1994), 効果を得るためには対象の発達の様相を考慮する必要性が指摘されている (Noppe, 2007) こととも矛盾しない。

以上のことから本研究では、死について考えることが、各ステイタスにある青年のアイデンティティ形成プロセスに及ぼす影響を検討する。その際、青年の未来展望は短いことが指摘されており (Nurmi, 1989), 死について考えることの影響は、どのような死について考えるのかによっても左右されると思われる。青年の短い未来展望を広げるような、遠い未来に起こる死について考えることと、短い未来展望の中で、近い未来に起こる死について考えることを比較することで、死について考えることの心理的な影響をより詳細に検討する。また、死について考えることが持つ影響の作用機序に関しても、死について考える課題に対する記述の分析、各ステイタスにある青年の死生観、死に関して大きな影響力を持つとされる潜在的な態度 (e.g. Greenberg, Pyszczynski, & Solomon, 1986) の3つから検討を行う。

## 2. 方法

### 研究参加者

4年制の国立大学と私立大学の学生計196名 (男性68名, 女性128名; 平均年齢19.24歳, 年齢範囲18~26歳) を対象に実験および質問紙調査を行った。その内、全ての実験および調査に取り組んだ97名 (男性27名, 女性70名; 平均年齢19.2歳, 年齢範囲18~23歳) を分析対象とした。参加者は近い将来訪れる死について考える群 (50名; 男性15名, 女性35名) と、遠い将来に訪れる死について考える群 (47名; 男性12名, 女性35名) に無作為配

置された。

## 時期

2015年5月から8月。

## 手続き

実験ソフト Inquisit 4 Web および Web アンケート Qualtrics を用いて、実験および質問紙調査を行った。死について考える課題を行う 1 週間前に、質問紙調査でアイデンティティと死生観を、実験で死に対する潜在的な態度を測定し、課題に取り組んだ 3 週間後に課題後のアイデンティティを測定した。実験と調査への協力依頼は各学校の心理学関連科目の講義時間内に行った。

研究協力者への倫理的配慮として、死というテーマに関するものが含まれていることを明示し、そうしたものに抵抗のある方は取り組まないよう、また途中で辞めなくなった場合には直ちに辞めるように研究協力依頼シートおよび実験と調査のフェイスページに明記した。さらに、回答は任意であり、いつでも中断できること、回答しなかったことや途中でやめたことによって不利益を被らないことを、研究協力依頼シートおよび実験と調査のフェイスページに明記した。

## 調査内容および実験材料

**アイデンティティ** 中間他 (2015) の日本語版多次元アイデンティティ発達尺度 (以下 DIDS-J) を用いた。この尺度は、Luyckx, Goossens, and Soenens (2006) の議論をもとに作成された多次元アイデンティティ発達尺度 (Luyckx et al., 2008) の翻訳版であり、2つのコミットメント次元と 2つの探求次元、そして探求の否定的側面の次元から成る。コミットメントは「コミットメント形成」と「コミットメントとの同一化」、探求は「広い探求」と「深い探求」、そして探求の否定的側面は「反芻的探求」の 5 下位尺度、各 5 項目、計 25 項目からなる。コミットメント形成は「自分がどんな人生を進むか決めた」、コミットメントとの同一化は「私の将来の計画は、自分の本当の興味や大切だと思うものに合っている」、広い探求は「自分が進もうとする人生にはどのようなものがあるのか、すすんで考える」、深い探求は「自分がすでに決めた人生の目的が本当に自分に合うのかどうか、考える」、反芻的探求は「人生で本当にやりとげたいことは何か、はっきりしない」などの項目からなる。



項目の回答形式は「1 あてはまらない」「2 どちらかといえばあてはまらない」「3 どちらともいえない」「4 どちらかといえばあてはまる」「5 あてはまる」の5件法で、得点が高いほどそれぞれの発達過程に傾倒していることが示されるように得点化した。

**死生観** 伊藤・斎藤 (2008) の死生観尺度を用いた。この尺度は、「死後の世界」8項目、「解放としての死」3項目、「死への不安」5項目、「死への関心」2項目、「死の確実性」3項目、「存在の連関性」3項目、の合計6下位尺度24項目からなる。死後の世界は「死後の世界があると思う」、解放としての死は「死ぬと悩みから解放されると思う」、死への不安は「死は恐ろしいものだと思う」、死への関心は「家族や友人と死について話したことがある」、死の確実性は「自分もいつか寿命がつきると思う」、存在の連関性は「自分が死んでも家族や友人が覚えてくれていると思うとさみしくない」などの項目からなる。項目の回答形式は「1 そう思わない」「2 どちらかといえばそう思わない」「3 どちらかといえばそう思う」「4 そう思う」の4件法で、得点が高いほど、それぞれの死生観を強く持つことが示されるように得点化した。

**死に対する潜在的な態度** Nock, Park, Finn, Deliberto, Dour, and Banaji (2010) の開発した死と自殺 IAT (Death/Suicide IAT) を、許可を得て翻訳したものをを用いた。死と自殺 IAT は、7 ブロックから構成される。ブロック 1 (カテゴリー弁別課題, 20 試行) は、呈示された刺激語が「死—生」のターゲット概念のどちらに属するか、それぞれ対応する二つのキー押し (左は”I”キー, 右は”E”キー) で分類させた。ブロック 2 (属性弁別課題, 20 試行) では、呈示された刺激語が「自分—他者」の属性概念のどちらに属するかを分類させた。ブロック 3 (組合せ課題 1, 20 試行) およびブロック 4 (組合せ課題 2, 40 試行) は、ブロック 1 と 2 を組み合わせた課題に回答させた。画面左側に「死」と「自分」が示され、画面右側に「生」と「他者」が呈示され、ブロック 1 と 2 で呈示された刺激語を分類させた。ブロック 3 は練習、ブロック 4 は本番として回答させた。ブロック 5 (逆カテゴリー弁別課題, 40 試行) では、ブロック 1 の「死—生」の位置を反対にした課題に回答させた。ブロック 6 (逆組合せ課題 1, 20 試行) およびブロック 7 (逆組合せ課題 2, 40 試行) は、ブロック 3, 4 とは組み合わせが逆になった課題に回答させた。具体的には、画面左側に「生」と「自分」が示され、画面右側に「死」と「他者」が提示される課題を実施した。なお、死に関する刺激語は「死ぬ」、「死んでいる」、「亡くなっている」、「生命反応のない」、「自殺」、生に関する刺激語は「生きている」、「生き残る」、「生きる」、「繁殖する」、「呼吸している」、自分に関する刺激語は「自分は」、「自分の」、「私は」、「私の」、「私と」、他者に関

する刺激語は「他者」, 「他者の」, 「他人は」, 「他人の」, 「他人と」と翻訳された。

### 実験課題

はじめに、課題を自分自身のこととして考えさせるため、下島・蒲生 (2009) の五色カード法を参考に、「あなたにとって『大切なもの』『大切な人』『大切な場所』『大切な目標』『普段大切にしている出来事』を 1 つずつあげてください」と教示して、自由記述形式で回答を求めた。その後、病気で余命宣告をされ、動揺から受容に至るまでの体験談を読ませ、「死には生物学的な要因があり、二度と生き返ることはありません。また、死によって生きている時に行っていることが全て終わります。そしてこうした死はいつか必ず訪れます」と教示した上で、近い未来に訪れる死について考える群には「それはもしかしたらそう遠い話ではなく、明日なのかもしれません。もし今のあなたと同じ状況に置かれて、自分自身の死が 3 か月～1 年後に訪れると知ったとしたら、どのようなことを感じたり考えたりすると思いますか」、遠い未来に訪れる死について考える群には「男女ともに平均寿命が 80 歳を超えるようになった現代では、それはまだ先の話なのかもしれません。もし将来、あなたが 70～80 歳になった頃に同じ状況に置かれて、自分自身の死が 3 か月～1 年後に訪れると知ったとしたら、どのようなことを感じたり考えたりすると思いますか」という教示に対する回答を自由記述形式で求めた。また 2 群共通で、「あなた自身もいつか必ず死ぬということ考えたとき、最初に書いてもらった「大切なもの」「大切な人」「大切な場所」「大切な目標」「普段大切にしている出来事」についてどのようなことを感じたり考えたりしますか」および「あなた自身の死は、あなたの人生にとってどのような意味があると思いますか」という教示に対する回答を自由記述形式で求めた。

課題に用いた文章の出典は「がんを明るく生きる」という Web 上のサイト。末期がんで余命 3 か月を告知された筆者の体験談の一部を用いた。病院で告知を受け、ショックで頭が真っ白になった筆者は、落ち着きを取り戻そうと病院の近くにある公園のベンチに寝転んだ。長旅を終えて着陸態勢に入る飛行機を何機も見ながら、自分の人生も同じように早ければ残り 3 か月で終わりと思うと大量の涙が溢れてきた。しばらくして落ち着きを取り戻した筆者は、祖母に見守られながら眠る赤ちゃんの姿、鳥が仲良く飛び交う光景を見て、すべての生き物は、子孫を次代に残して死んで行くこと、そしてそれは地球が始まって以来、延々と続いている作業であることをはっきりと認識させられる。生あるものは死ぬのは当たり前で、それぞれの決められた寿命だとしたら素直に受け入れるしかないと感じる。そして、私は、私の余命告知をこの時初めて心から受容することができたとくく

られている。誰にでも起こり得る病気から死を考えさせる体験談であるため、研究参加者が死について考えやすいと思われる一方、筆者は最終的に死を受容している点で、研究参加者への心理的負担を最小限にとどめることができると思われるため、この文章を用いた。

### 3. 結果

#### 各尺度の構成と記述統計量およびアイデンティティ・ステイタス判別のための群分け

**尺度構成と記述統計量** 先行研究での尺度構成に従い、DIDS-J および死生観尺度の各項目の得点を合計し、そのそれぞれの平均値を各下位尺度の得点とした。また、各下位尺度それぞれの内的整合性を検討するため、Cronbach の  $\alpha$  係数を算出した。その結果、死生観尺度の「死の確実性」と「存在の連関性」については極端に低い値となったため、以降の分析からは除外した。各尺度の得点の平均値と標準偏差および $\alpha$ 係数を Table 7-1 に示した。死と自殺 IAT に関しては、先行研究と同様に、標準的な IAT の採点方法 (Greenwald, Nosek, & Banaji, 2003) に基づき、D 得点を算出した (Table 7-1)。得点が高いほど、自分自身と死との潜在的な連合が強く、自殺等の死に関連する問題を引き起こしやすいとされる。

**アイデンティティ・ステイタス** 個人のアイデンティティ・ステイタスを判別するため、

Table 7-1  
各尺度の平均値と標準偏差および $\alpha$ 係数 ( $N=97$ )

|                  | 課題前      |           |             | 課題後      |           |             |
|------------------|----------|-----------|-------------|----------|-----------|-------------|
|                  | <i>M</i> | <i>SD</i> | $\alpha$ 係数 | <i>M</i> | <i>SD</i> | $\alpha$ 係数 |
| コミットメント形成        | 3.19     | 0.99      | .86         | 3.30     | .94       | .87         |
| コミットメントとの同一化     | 3.00     | 0.83      | .83         | 3.09     | .88       | .88         |
| 広い探求             | 3.86     | 0.74      | .83         | 3.82     | .78       | .88         |
| 深い探求             | 3.48     | 0.67      | .60         | 3.57     | .71       | .72         |
| 反芻的探求            | 3.78     | 0.75      | .70         | 3.72     | .76       | .72         |
| 死後の世界            | 2.73     | 0.78      | .89         |          |           |             |
| 解放としての死          | 2.85     | 0.75      | .54         |          |           |             |
| 死への不安            | 2.91     | 0.53      | .53         |          |           |             |
| 死への関心            | 3.20     | 0.79      | .52         |          |           |             |
| 死の確実性            | 3.86     | 0.29      | .38         |          |           |             |
| 存在の連関性           | 2.96     | 0.53      | .06         |          |           |             |
| 死に対する潜在的態度 (D得点) | -0.54    | 0.36      |             |          |           |             |

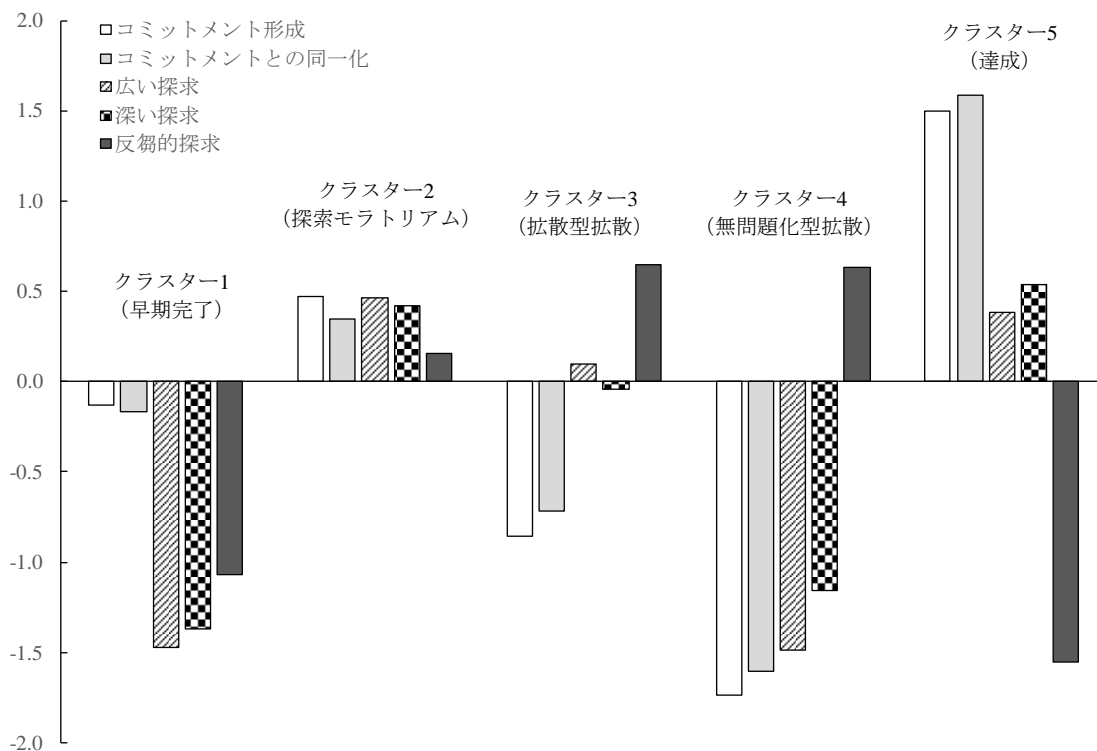


Figure 7-1. 各アイデンティティ・ステイタスにおけるDIDS-J

DIDS-J の各下位尺度の得点を用いて群分けを行った。中間他 (2015) に倣い、階層的クラスター分析 (Ward 法, 平方ユークリッド距離) を行った。その結果, Figure 7-1 のような 5 つのクラスターが抽出された。中間他 (2015) と同様の枠組みから, クラスター1 は「早期完了」, クラスター2 は「探索モラトリアム」, クラスター3 は「拡散型拡散」, クラスター4 は「無問題化型拡散」, クラスター5 は「達成」と解釈された。

### 死について考える課題がアイデンティティの形成過程に及ぼす影響

死について考える課題が各ステイタスの個人のアイデンティティ形成プロセスに及ぼす影響を検討するため, 課題前後における各群の DIDS-J の各下位尺度得点の平均値の比較を行った (Table 7-2)。 $2 \times 2 \times 5$  (課題前・課題後  $\times$  近い死・遠い死  $\times$  早期完了・探索モラトリアム・拡散型拡散・無問題化型拡散・達成) の 3 要因分散分析を行った結果, コミットメント形成 ( $F(4, 87) = 3.14, p < .05, \eta^2_p = .13$ ) と広い探求 ( $F(4, 87) = 2.70, p < .05, \eta^2_p = .11$ ) を従属変数とした場合においてのみ 2 次の交互作用がみられた。単純交互作用の検定を行ったところ, 前者では拡散型拡散群 ( $F(1, 87) = 10.40, p < .01, \eta^2_p = .11$ ) および無問題化型拡散群 ( $F(1, 87) = 3.40, p < .10, \eta^2_p = .04$ ), 後者では無問題化型拡散群 ( $F(1, 87) = 10.54, p < .01, \eta^2_p = .11$ ) において有意および有意傾向であった。単純・単純主効果の検定の結果, 近群の

Table 7-2

課題群×アイデンティティ・ステイタス群におけるDIDSの課題前後の平均値と標準偏差および標準誤差 (N=97)

|              | 近い死  |      |      |      |      |      | 遠い死  |      |      |      |      |      |
|--------------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
|              | 課題前  |      |      | 課題後  |      |      | 課題前  |      |      | 課題後  |      |      |
|              | M    | SD   | SE   | M    | SD   | SE   | M    | SD   | SE   | M    | SD   | SE   |
| コミットメント形成    |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |
| (早期完了)       | 3.24 | 0.30 | 0.20 | 3.44 | 0.62 | 0.30 | 2.88 | 0.23 | 0.20 | 2.84 | 0.55 | 0.30 |
| (探索モラトリアム)   | 3.80 | 0.47 | 0.11 | 3.67 | 0.70 | 0.16 | 3.56 | 0.55 | 0.09 | 3.67 | 0.74 | 0.13 |
| (拡散型拡散)      | 2.29 | 0.49 | 0.11 | 2.76 | 0.75 | 0.17 | 2.44 | 0.36 | 0.15 | 2.31 | 0.50 | 0.22 |
| (無問題化型拡散)    | 1.67 | 0.23 | 0.26 | 2.07 | 0.81 | 0.39 | 1.36 | 0.22 | 0.20 | 2.16 | 0.50 | 0.30 |
| (達成)         | 4.73 | 0.28 | 0.15 | 4.49 | 0.52 | 0.22 | 4.40 | 0.57 | 0.32 | 4.30 | 0.42 | 0.48 |
| コミットメントとの同一化 |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |
| (早期完了)       | 2.88 | 0.36 | 0.21 | 3.20 | 0.14 | 0.29 | 2.84 | 0.17 | 0.21 | 2.88 | 0.39 | 0.29 |
| (探索モラトリアム)   | 3.44 | 0.55 | 0.11 | 3.48 | 0.82 | 0.16 | 3.18 | 0.50 | 0.09 | 3.27 | 0.58 | 0.13 |
| (拡散型拡散)      | 2.41 | 0.46 | 0.12 | 2.56 | 0.67 | 0.16 | 2.40 | 0.26 | 0.16 | 2.33 | 0.42 | 0.21 |
| (無問題化型拡散)    | 1.73 | 0.70 | 0.27 | 1.93 | 0.64 | 0.37 | 1.64 | 0.33 | 0.21 | 2.04 | 0.61 | 0.29 |
| (達成)         | 4.40 | 0.53 | 0.16 | 4.38 | 0.80 | 0.21 | 3.90 | 0.14 | 0.33 | 4.00 | 0.00 | 0.45 |
| 広い探求         |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |
| (早期完了)       | 2.84 | 0.46 | 0.23 | 3.00 | 0.60 | 0.29 | 2.68 | 0.83 | 0.23 | 2.88 | 0.81 | 0.29 |
| (探索モラトリアム)   | 4.32 | 0.44 | 0.13 | 4.35 | 0.42 | 0.16 | 4.13 | 0.48 | 0.10 | 3.98 | 0.52 | 0.13 |
| (拡散型拡散)      | 4.08 | 0.49 | 0.13 | 3.84 | 0.72 | 0.16 | 3.67 | 0.54 | 0.17 | 3.62 | 0.89 | 0.22 |
| (無問題化型拡散)    | 2.93 | 0.61 | 0.30 | 2.47 | 1.03 | 0.38 | 2.64 | 0.79 | 0.23 | 3.40 | 1.03 | 0.29 |
| (達成)         | 4.16 | 0.51 | 0.17 | 4.20 | 0.57 | 0.22 | 4.10 | 0.14 | 0.37 | 3.80 | 0.28 | 0.46 |
| 深い探求         |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |
| (早期完了)       | 2.80 | 0.32 | 0.23 | 3.08 | 0.41 | 0.27 | 2.32 | 0.27 | 0.23 | 2.88 | 0.92 | 0.27 |
| (探索モラトリアム)   | 3.73 | 0.54 | 0.13 | 3.96 | 0.58 | 0.15 | 3.78 | 0.55 | 0.10 | 3.77 | 0.43 | 0.12 |
| (拡散型拡散)      | 3.30 | 0.47 | 0.13 | 3.49 | 0.67 | 0.15 | 3.71 | 0.41 | 0.17 | 3.49 | 0.61 | 0.20 |
| (無問題化型拡散)    | 2.73 | 0.31 | 0.30 | 2.40 | 0.35 | 0.35 | 2.68 | 0.78 | 0.23 | 2.72 | 1.14 | 0.27 |
| (達成)         | 3.82 | 0.61 | 0.17 | 3.87 | 0.53 | 0.20 | 3.90 | 0.42 | 0.37 | 4.00 | 0.28 | 0.43 |
| 反芻的探求        |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |
| (早期完了)       | 2.76 | 0.36 | 0.23 | 2.88 | 0.18 | 0.30 | 3.20 | 0.35 | 0.23 | 3.04 | 0.82 | 0.30 |
| (探索モラトリアム)   | 3.92 | 0.58 | 0.13 | 4.00 | 0.57 | 0.16 | 3.88 | 0.57 | 0.10 | 3.71 | 0.60 | 0.13 |
| (拡散型拡散)      | 4.29 | 0.36 | 0.13 | 4.18 | 0.60 | 0.17 | 4.22 | 0.48 | 0.17 | 4.11 | 0.56 | 0.22 |
| (無問題化型拡散)    | 4.13 | 0.61 | 0.30 | 3.27 | 1.36 | 0.38 | 4.32 | 0.84 | 0.23 | 4.00 | 0.91 | 0.30 |
| (達成)         | 2.64 | 0.38 | 0.17 | 3.04 | 0.84 | 0.22 | 2.50 | 0.42 | 0.37 | 3.00 | 0.85 | 0.47 |

拡散型拡散群 ( $F(1, 87) = 14.30, p < .01, \eta^2_p = .14$ ), 遠群の無問題化拡散群 ( $F(1, 87) = 12.68, p < .01, \eta^2_p = .13$ ) は, 課題前より後のコミットメント形成の得点が高かった。遠群の無問題化拡散群は, 広い探求の得点も, 課題前より後の方が高かった ( $F(1, 87) = 8.78, p < .01, \eta^2_p = .09$ )。

### 課題における記述の分析

死について考える課題が, アイデンティティ形成プロセスに及ぼす作用機序について検

討を行うため、2群共通である2問目および3問目の質問に対する自由記述の分析を行った。本研究の主旨を知らない心理学を専攻する大学院生2名と著者とで、KJ法の手法を用いてカテゴリの生成および分類を行った。2問目に関しては、先に挙げた5つの対象の大切さを再確認するといった記述がみられる場合には「大切さの再確認」、そうした対象の大切さをより強く感じたり、感謝したりするといった記述がみられる場合には「大切さの深化や感謝」、大切な対象が変化したり諦めるといった記述がみられる場合には「大切な対象の諦めや変化」、自分の死後に遺されるものへの想いを馳せている記述がみられる場合には「遺されるものへの配慮」、戸惑いや寂しさを感じていたり、死を拒否するような記述がみられる場合には「戸惑いや寂しさまたは拒否」に分類した。3問目に関しては、死を人生にとって特に意味のない終わりとする記述がみられる場合には「単なる終わり」、人生が有意味になるもの、あるいは有意味な人生を完了させるものとする記述がみられる場合には「有意味な人生の完了」、終わりではなく、来世の始まり、来世と現世の区切りといった記述がみられる場合には「来世との区切り」、生きている間に経験する痛みなどからの解放とする記述がみられる場合には「痛みからの解放や回避」、周囲に影響を与えるもの、あるいは周囲が死の意味を見出すものといった記述がみられる場合には「周囲との関係」に分類した。評定者間で分類が異なる場合には協議の上、1つのカテゴリに分類した。

アイデンティティ・ステータスによってこれらのカテゴリに入る記述数の比率に差があるのかを調べるため、2群におけるカテゴリとステータス群のクロス表を作成し (Table 7-3 および Table 7-4)、Fisherの正確確率検定を行った。その結果、2問目に対する記述は、遠い死の群で有意差 ( $p = .03$ )、近い死の群で有意傾向がみられた ( $p = .06$ )。3問目に対する記述

Table 7-3  
各ステータス群における記述の分類(死について考えた際の大切な対象)

|          | 大切さの再認識 |       | 大切さの深化や感謝 |       | 大切な対象の諦めや変化 |       | 遺されるものへの配慮 |       | 戸惑いや寂しさまたは拒否 |       |
|----------|---------|-------|-----------|-------|-------------|-------|------------|-------|--------------|-------|
|          | 遠い死     | 近い死   | 遠い死       | 近い死   | 遠い死         | 近い死   | 遠い死        | 近い死   | 遠い死          | 近い死   |
| 早期完了     | 2       | 2     | 2         | 2     | 1           | 2     | 0          | 2     | 3            | 0     |
|          | 25.00   | 25.00 | 25.00     | 25.00 | 12.50       | 25.00 | 0.00       | 25.00 | 37.50        | 25.00 |
| 探索モラトリアム | 12      | 7     | 8         | 5     | 4           | 2     | 8          | 5     | 5            | 3     |
|          | 32.43   | 31.82 | 21.62     | 22.73 | 10.81       | 9.09  | 21.62      | 22.73 | 13.51        | 13.64 |
| 拡散型拡散    | 0       | 1     | 8         | 12    | 0           | 0     | 2          | 1     | 4            | 2     |
|          | 0.00    | 6.25  | 57.14     | 75.00 | 0.00        | 0.00  | 14.29      | 6.25  | 28.57        | 12.50 |
| 無問題化型拡散  | 0       | 2     | 4         | 0     | 0           | 0     | 0          | 0     | 2            | 1     |
|          | 0.00    | 66.67 | 66.67     | 0.00  | 0.00        | 0.00  | 0.00       | 0.00  | 33.33        | 33.33 |
| 達成       | 1       | 4     | 0         | 3     | 1           | 2     | 0          | 3     | 1            | 1     |
|          | 33.33   | 30.77 | 0.00      | 23.08 | 33.33       | 15.38 | 0.00       | 23.08 | 33.33        | 7.69  |

注) 上段は度数・下段は各ステータスにおける比率 (%) を示す

Table 7-4  
各ステイタス群における記述の分類(人生における死の意味)

|   | 単なる終わり |        | 有意味な<br>人生の完了 |       | 来世との区切り |       | 苦しみからの<br>解放や回避 |       | 周囲との関連 |       |
|---|--------|--------|---------------|-------|---------|-------|-----------------|-------|--------|-------|
|   | 遠い死    | 近い死    | 遠い死           | 近い死   | 遠い死     | 近い死   | 遠い死             | 近い死   | 遠い死    | 近い死   |
| 早期完了<br>( <i>n</i> =5, <i>n</i> =5)       | 1      | 1      | 1             | 2     | 1       | 1     | 0               | 0     | 2      | 1     |
|   | 20.00  | 20.00  | 20.00         | 40.00 | 20.00   | 20.00 | 0.00            | 0.00  | 40.00  | 20.00 |
| 探索モラトリアム<br>( <i>n</i> =26, <i>n</i> =17) | 11     | 12     | 4             | 1     | 5       | 2     | 4               | 0     | 2      | 2     |
|   | 42.31  | 70.59  | 15.38         | 5.88  | 19.23   | 11.76 | 15.38           | 0.00  | 7.69   | 11.76 |
| 拡散型拡散<br>( <i>n</i> =9, <i>n</i> =16)     | 6      | 3      | 1             | 10    | 0       | 2     | 1               | 1     | 1      | 0     |
|   | 66.67  | 18.75  | 11.11         | 62.50 | 0.00    | 12.50 | 11.11           | 6.25  | 11.11  | 0.00  |
| 無問題化型拡散<br>( <i>n</i> =5, <i>n</i> =3)    | 0      | 3      | 4             | 0     | 0       | 0     | 1               | 0     | 0      | 0     |
|   | 0.00   | 100.00 | 80.00         | 0.00  | 0.00    | 0.00  | 20.00           | 0.00  | 0.00   | 0.00  |
| 達成<br>( <i>n</i> =2, <i>n</i> =9)         | 1      | 4      | 0             | 3     | 0       | 0     | 0               | 1     | 1      | 1     |
|   | 50.00  | 44.44  | 0.00          | 33.33 | 0.00    | 0.00  | 0.00            | 11.11 | 50.00  | 11.11 |

注) 上段は度数・下段は各ステイタスにおける比率(%)を示す

については、遠い死の群 ( $p = .09$ ) および近い死の群 ( $p = .01$ ) の両方で有意傾向がみられた。そこで、統計量がモデル分布に従うと考えられる 5 以上の度数のセルに対して残差分析を行ったところ、2 問目に対する記述については、遠い死の群において、探索モラトリアムの「大切さの再認識」の記述、拡散型拡散の「大切さの深化や感謝」の記述が期待値より有意に多く、探索モラトリアムの「大切さの深化や感謝」は、有意に少なかった ( $p < .05$ )。近い死の群においても、拡散型拡散の「大切さの深化や感謝」の記述が期待値より有意に多かった ( $p < .01$ )。3 問目に対する記述については、遠い死の群においては有意差がみられず、近い死の群において、探索モラトリアムの「単なる終わり」の記述 ( $p < .05$ )、拡散型拡散の「有意味な人生の完了」の記述 ( $p < .01$ ) が期待値よりも有意に多かった。

### 死生観および死に対する潜在的な態度とアイデンティティ・ステイタスとの関係の検討

アイデンティティ・ステイタスによって、死生観の各下位尺度の得点および D 得点の平均値に差がみられるかを検討するため、死生観の各下位尺度の得点および D 得点を従属変数、アイデンティティ・ステイタス群を独立変数とした 1 要因 5 水準の分散分析を行った (Table 7-5)。その結果、死への不安 ( $F(4, 92) = 4.42, p < .01, \eta^2_p = .16$ ) および D 得点 ( $F(4, 92) = 2.81, p < .05, \eta^2_p = .11$ ) において有意差がみられた。死への関心 ( $F(4, 92) = 2.44, p < .10, \eta^2_p = .10$ ) については有意傾向であった。Tukey 法による調整を行った多重比較の結果、死への不安は、拡散型拡散とその他の型との間 (探索モラトリアムとの間には 1%水準, その他は 10%水準 ( $d = 0.96 - 1.09$ )) において有意差および有意傾向が見られ、拡散型拡散の得点が高かった。D 得点については、無問題化型拡散と達成との間に有意差 (5%水準,  $d = 1.66$ ) がみら

Table 7-5  
各アイデンティティ・ステイタスにおける死生観および死に対する潜在的態度の平均値と標準偏差および標準誤差 (N=97)

|                  | 早期完了<br>(n = 10) |      |      | 探索モトリアム<br>(n = 43) |      |      | 拡散型拡散<br>(n = 25) |      |      | 無問題化型拡散<br>(n = 8) |      |      | 達成<br>(n = 11) |      |      |
|------------------|------------------|------|------|---------------------|------|------|-------------------|------|------|--------------------|------|------|----------------|------|------|
|                  | M                | SD   | SE   | M                   | SD   | SE   | M                 | SD   | SE   | M                  | SD   | SE   | M              | SD   | SE   |
| 死後の世界            | 2.74             | 0.78 | 0.25 | 2.70                | 0.76 | 0.12 | 2.90              | 0.71 | 0.14 | 2.25               | 0.58 | 0.21 | 2.80           | 1.06 | 0.32 |
| 解放としての死          | 2.87             | 0.89 | 0.28 | 2.92                | 0.77 | 0.12 | 2.89              | 0.72 | 0.14 | 3.00               | 0.80 | 0.28 | 2.36           | 0.48 | 0.15 |
| 死への不安            | 2.82             | 0.36 | 0.11 | 2.78                | 0.54 | 0.08 | 3.26              | 0.49 | 0.10 | 2.70               | 0.58 | 0.20 | 2.80           | 0.41 | 0.12 |
| 死への関心            | 2.65             | 0.67 | 0.21 | 3.19                | 0.82 | 0.13 | 3.48              | 0.57 | 0.11 | 2.94               | 0.98 | 0.35 | 3.32           | 0.81 | 0.25 |
| 死に対する潜在的態度 (D得点) | -0.62            | 0.23 | 0.07 | -0.52               | 0.33 | 0.05 | -0.56             | 0.42 | 0.08 | -0.21              | 0.32 | 0.11 | -0.73          | 0.31 | 0.09 |

れ、無問題化型拡散の得点が高かった。死への関心については、早期完了と拡散型拡散の間に有意差がみられ (5% 水準,  $d = 1.39$ ), 拡散型拡散の得点が高かった。

#### 4. 考察

本研究の目的は、死について考えさせることが、各ステイタスにある青年のアイデンティティ形成プロセスに及ぼす影響について検討することであった。どのような死について考えるのかによっても効果は左右されることが予想されたため、参加者である大学生を、近い未来に起こる死について考える群、遠い未来に起こる死について考える群に分け、1か月に渡る実験および質問紙調査を行った。死生観と潜在的な死の態度も測定し、作用機序についても検討した。

想定されていた通り、死について考えることは、コミットメントを持っていない青年に対して、その形成を促すような効果を持つことが明らかとなった。3 要因分散分析の結果、遠い未来に起こる死について考えさせることは、無問題化型拡散群の青年の、コミットメント形成および広い探求を、近い未来に起こる死について考えさせることは、拡散型拡散群の青年の、コミットメント形成を促すことが示された。また、記述の分析結果は、そうした効果のみられた青年の多くが、死を有意味な人生の完了と捉え、死について考えることで自分にとって大切なものをより大切にできるようになることを示している。死について考えることで「生」がより豊かで味わいのあるものになり (デーケン, 1986), 死までの毎日をいかに生きようかと考えて積極的に歩みだすようになる (デーケン, 2001) ことが、アイデンティティ形成の観点から実証されたといえる。つまり、死について考えることは、コミットメントを持っていない青年に、有意味な人生の完了に向かって、現在ある大事なものをより重視するようになるという作用機序で、コミットメントを形成していくプロセスを促すと考えられる。

2 つの拡散群は、それぞれ効果的な死の考えさせ方および効果が異なることが示された。



上述した通り、無問題化型拡散群の場合は遠い未来に起こる死、拡散型拡散群の場合は近い未来に起こる死について考えた場合に効果がみられている。遠い未来に起こる死について考えることは、青年の短い未来展望 (Nurmi, 1989) を広げ、より広範な視点を青年に与えると考えられる。遠い未来に起こる死について考えた無問題化型拡散群の青年の記述として、「私自身の死は、『自身の成長の締めくくり』の意味があると思います。今までの経験や最後の自分の姿や性格などから、自分がどれだけ成長したのかということを知ることができると思います」、「特に自分の人生の中で大それた目標は持っておらず、・・・(中略)・・・、目標もなく日々を生きていて、それなりに平凡で良いのではないかと思う反面、自分にとって価値があるものだったのか疑問が湧くところもある」といったものがみられる。無問題化型拡散群の青年は、探索もコミットメントも持たない。死をこれからも続く人生の有意義性を振り返るものと捉え、そうした生き方のままで良いのかという疑問から、広い探求やコミットメントの形成が促されたと考えられる。

一方、青年の持つ短い未来展望 (Nurmi, 1989) の中で起こる死について考えることは、生きられる時間の有限性を認識させられるため、探索した様々な選択肢からコミットメントを形成していく契機になると考えられる。近い未来に起こる死について考えた拡散型拡散群の青年は、「普段は時間の際限なく生きていられるように思えるから、大切なものとかにもそこまで強く思い入れはないけれど、いつか必ず死ぬ、つまりタイムリミットがあるんだということを考えると、少しでもそういった大切なものに触れられている時間を惜しみなく使いたい」と述べている。拡散型拡散群の青年は、探索の経験はあるもののコミットメントが持っていない。こうした拡散は、現実的な選択とコミットメントを最小限にした状態を維持し、自分自身の無限の可能性や万能感を保持していることが指摘されている (1959 小此木訳 1973)。そうした青年にとって、生きられる時間の有限性を意識することは、限られた時間内にどのように生きるかを考えることにつながり、ここまでの探索で見出してきた重要なものへのコミットメントを形成していく契機になると考えられる。白井 (2001b) も、死を自覚することにより、漫然と過ごしていた時間の貴重さに気がつくようになり、自分の価値観を批判的に吟味しはじめるとしており、石井 (2013) においても、死について考えることで目標指向性や現在の充実感が高まることが示されている。時間的な制限が意識されることで、現在の大切なものをより重視して死までの人生を有意義なものにしようとし、コミットメントを形成していくと考えられる。

こうした効果的な考えさせ方の違いは、死生観および潜在的な死への態度の違いも反映

していると思われる。1 要因分散分析の結果、拡散型拡散群の青年は、死への不安および死への関心を高く持つこと、また無問題化型拡散群の青年は、自分自身と死との潜在的な連合を強く持つことが示された。死について思索を行うことは発達上の 1 つの通過点とされており (丹下, 1995a), コミットメントは持てていないが探索を行っている拡散型拡散の状態で、死への関心を持つこと、しかしそれには不安が伴うことが明らかとなった。青年は死に触れる機会の少なさゆえに、死の不安を持つ傾向がある (金児, 1994)。そのため、こうした青年が考えやすい形で、青年の短い未来展望の中にある死について考えさせることで効果が得られたと考えられる。一方、探求のない無問題化型拡散は、自殺といった死に関わる問題と関連する死との潜在的な連合が強い。日本における 15~39 歳の死因第 1 位である自殺 (内閣府, 2015) には、コミットメントも探求もできないこうした青年のアイデンティティの様相が関連していることが窺われる。こうした青年にとっては、これからも長く続く人生の後、遠い未来に訪れる死について考えることで、死との連合を強めず、むしろどう生きていくかというアイデンティティ形成が促されたと考えられる。それぞれのアイデンティティ・ステイタスが持つ死への態度、およびそれらに応じた効果的な死の考えさせ方が明らかになった。

本研究では、死について考えることが、無問題化型および拡散型の 2 つの拡散ステイタスにある青年のアイデンティティ形成プロセス、特にコミットメントの形成や広い探求を促すことが示された。また、効果的な考えさせ方や作用機序には違いも見られ、それらには各ステイタスの青年が持つ死に対する態度が関連していることが示された。これらの結果は、デーケン (2001) が必要性を主張するよりよい生に着目したデス・エデュケーションの持つ心理的機能の一部を明らかにしたといえるであろう。同時に、そうしたデス・エデュケーションがすべての青年に効果を持つものではないこと、そしてその効果的な方法も青年の発達の様相に応じて異なることが示唆された。また、顕在的な態度のみでなく、潜在的な死に対する態度とアイデンティティとの関連を検討し、青年期の死因の第 1 位である自殺とアイデンティティとの関連を示唆した点も意義があると思われる。しかし、本研究にはいくつかの課題が残されている。1 か月という期間に渡り、3 回の実験および質問紙調査を縦断で行っており、またそもそも母集団における各ステイタスの人数にも偏りがあるためやむを得ないものの、研究協力者数は十分とはいえないため、結果の一般化は慎重に行う必要がある。また、男女差にも偏りが見られたため、今後はより等質で大規模なサンプリングを行い、結果の再現性についても検討していく必要があるだろう。

## 第4節 本章の全体考察

第4章では、終点を踏まえた人生全体の時間という視点が検討されてきていないという問題点を解決するため、死について考える課題に取り組ませることで、終点を踏まえた人生全体の時間について検討した。

研究5では、研究参加者を死について考える課題を行う群、生きがいについて考える課題を行う群、死や生きがいは無関係なものについて考える課題を行う統制群の3群に分けて実験を行った。終点を踏まえた死までの人生全体の時間という視点を持つことの効果について、対照群や統制群と比較しながら、時間的態度に影響を及ぼすプロセスを含め、実験的に検討した。その結果、死について考えることの独自の効果として、目標指向性と現在の充実感を高めることを中心として、時間的態度を肯定的にすることが示された。また、その作用機序として、人生の有限性を認識することが示唆された。つまり、死という終点を踏まえた人生全体の時間という視点を持つことは、人生の有限性を再認識することであり、その結果として、目標への指向性や現在の充実感を高めるなど、時間的態度が肯定的になることが明らかとなった。

研究6では、研究5の結果を受けて、死について考えることの時間的態度への効果の個人差について、時間意識、死の捉え方の観点から検討を行った。その結果、現在への意識を高く持つ場合に、死について考えることが目標指向性や現在の充実感を高めることが明らかとなった。未来の目標などに対する手段として現在への意識を高く持っている青年が、人生の有限性を再認識することで、現在という時間そのもののかけがえのなさ、現在の充実感を感じ、そして目標への指向性をより高めたと考えられる。また、白井(1997)は、アイデンティティを確立している青年ほど、相対的に未来への意識を高く持つことを示しており、アイデンティティの確立という青年期の発達課題との関連が窺われた。

そこで研究7では、終点を踏まえた人生全体の時間という視点が、アイデンティティ形成にどのような影響を与えるのかについて検討を行った。その結果、死について考えることは、コミットメントを持っていない青年に対して、その形成を促すような効果を持つこと、そしてその効果は、死という終点を現在から近いものとして考えさせるか、遠いものとして考えさせるかによって異なることが明らかとなった。コミットメントは持っていないが探求はしている青年の場合には、不安もありながら死への関心も強いいため、青年の持つ短い未来展望(Nurmi, 1989)の中で訪れる近い死について考えることが効果を持ってい

た。一方で、コミットメントも探求も持てていない青年の場合には、潜在的な死との連合も強いため、これからも続く人生の後、遠い未来に起こる死について考えることが効果を持っていた。

終点を踏まえた人生全体の時間という視点は、青年の時間的展望、そしてアイデンティティの形成と関連することが明らかとなった。デス・エデュケーションはそのまま、自分の死までの毎日をよりよく生きるためのライフ・エデュケーションになるというデーケン (2001) の主張は、時間的展望とアイデンティティの観点から実証された。しかしその効果は、主にコミットメントを持てていない青年に対するものであることも明らかとなった。死について思索を行うことは発達上の1つの通過点 (丹下, 1995a) とされているものの、アイデンティティ達成地位から別の地位への移行が起こる (Stephen, Fraser, & Marcia, 1992) など、青年期の発達課題であるアイデンティティの探索は繰り返し起こることが示されている。アイデンティティの形成という青年期発達の過程において、コミットメントを持てなくなったときには、死への関心や不安、あるいは潜在的な死との連合が強まると考えられる。そして、その際には死という終点を踏まえた人生全体の時間という視点を持つことで、肯定的な時間的展望、アイデンティティの形成が促されると考えられる。

本章を通して得られた知見は、いずれも萌芽的なものであり、今後さらなる実証知見を積み重ねていく必要がある。例えば、死についての考え方や、死までの人生の生き方には、宗教観や死別経験など、本章で検討した以外の要因も影響を及ぼすと考えられる。個人的な経験に基づいて形成される死生観をより詳細に検討し、時間的展望やアイデンティティ形成といった青年期発達との関連を明らかにしていく必要がある。また、そうして得られた実証的知見を基に、デーケン (2001) が主張するような、よりよい生を目論見としたデス・エデュケーションの効果的な方法を見出し、実践へとつなげていくのが今後の展望である。

## 第 5 章

### 総括的討論

## 第1節 本論文を通じて得られた結果

本論文では、青年期の時間的展望とアイデンティティ形成について検討を行った。特に、時間的展望に関しては、過去、現在、未来の全ての時間、そして人生の終点である死までの展望を持つことについても対象とし、アイデンティティ形成に関しては、そのプロセスとプロダクトの両方を対象として検討を行った。以下では、研究1から研究7において得られた知見を整理し、青年期の時間的展望とアイデンティティ形成について考察する。

### 1. 本論文を通して得られた結果

研究1および研究2において、時間的展望の認知的側面である時間的指向性に関する概念整理と測定方法の作成を行った。時間的展望に関しては、認知的側面と感情的・態度的側面の2つの側面があることが指摘されているが(都筑, 1982, 1999)、認知的側面については、過去、現在、未来をそれぞれ検討できる尺度がないために、その検討はほとんどなされてきておらず、時間的指向性に関する先行知見には相違があった。そこで時間的指向性を時間的連続性と時間意識の2つの下位概念に分けて整理することで、これまでの研究知見を矛盾なく統合することが可能となり、さらに測定尺度が作成されたことにより、今後は系統立てて検討を行うことが可能となった。

研究3と研究4においては、上記の研究で作成された尺度も用いて、過去、現在、未来すべての時間的展望と、アイデンティティ形成との関連について検討した。それぞれ、Luyckx, Goossens, Soenens et al. (2006) のアイデンティティ形成の二重サイクルモデル、および、Crocetti et al. (2008) のアイデンティティ形成の3次元モデルに基づき、アイデンティティ形成のプロセスおよびプロダクトについて検討を行った。これまで明らかにされてこなかった現在や過去に対する時間的展望が、アイデンティティ形成のプロセスおよびプロダクトと関連することが示された。

研究5、研究6、および研究7においては、青年の持つ短い時間的展望(Nurmi, 1989)を死という人生の終点まで広げることによる影響について検討を行った。青年が死について考えることは、人生の有限性を再認識することとなり、時間的態度を肯定的にすること、またそうした時間的態度への効果には現在意識の高さが個人差要因として関わっていることが明らかになった。そしてアイデンティティ形成への影響として、コミットメントが持っていない青年に対してのみ、その形成を促すような効果が見られ、探求の有無に応じて

効果的な考えさせ方が異なることが明らかとなった。探求をしているがコミットメントが持っていない場合には、不安と共に死への興味を高く持ち、青年の持つ短い未来展望の中に起こるような近い未来に起こる死について考えることが効果を持っていた。一方、探求もコミットメントもできていない場合には、潜在的な死との連合を強く持っており、これから続く人生の後、遠い未来に訪れる死について考えることが効果を持っていた。

## 2. 青年期における時間的展望とアイデンティティ形成

青年期は、時間的展望を獲得し、アイデンティティを確立し、その後の社会での生き方を決定していく時期である。本論文で得られた知見は、青年期の発達課題であるアイデンティティ形成と、その基盤とされる時間的展望との関連を詳細に明らかにし、さらにそこに死という終点を踏まえた人生全体の時間という視点がどのように関わるのかを明らかにした。

時間的展望は、アイデンティティ形成の起点になると考えられる。本論文では、過去や現在、そして未来の時間的展望が、アイデンティティ形成のプロセス、プロダクトと関連することが示されている。また、比較的近い未来について考えることが一般的とされる青年の未来展望を、死という人生の終点まで拡張することによって、アイデンティティ形成が促されることが示されている。時間的展望の様相やその変化が、コミットメントの形成やその再考、探索といったアイデンティティ形成の各プロセスを促進させたり抑制させたりする。溝上他 (2016) においても、自己形成活動が時間的展望を介してアイデンティティ形成に影響することが示されている。アイデンティティの達成は、過去、現在、未来の時間的な流れの中での自己についての継続性や統合性の意識の上に初めて成り立つものであるため、その基礎には時間的展望の確立が必要とされている (都筑, 1993)。しかしそうした認知的能力の基礎として必要なことに加え、時間的展望は、より積極的にアイデンティティ形成の各プロセスを規定するものと考えられる。

青年期発達にとっては、時間的展望を広く持つことが重要と考えられる。先行研究において青年期は、比較的近い未来について考えることが多く (Nurmi, 1989)、またアイデンティティの達成の文脈においては未来展望を持つこと (e.g. 都筑, 1994)、各時間が統合されていること (e.g. 都筑, 1993) などが重要とされてきた。一方、本論文で得られた知見は、未来展望や各時間の統合の重要性に加え、過去、現在、未来に対する展望それぞれが、アイデンティティ形成の各段階において、その形成プロセスを促す役割を持つことが示唆され

ている。例えば、過去への意識や過去の受容のできなさがコミットメント対象を見出していく契機となることが示唆されており、また死という人生の終点まで未来展望を拡張することがコミットメント形成や広い探求といったプロセスを促すことも示されている。様々な過去を持ち、未来を思い描き、そして現在を生きる青年が、自分自身の同一性を確立していくためには、過去を振り返り、死までの未来を展望し、そして現在をどう生きるのかを決定していくことが重要と考えられる。

本論文で扱った時間的展望とアイデンティティ形成および死という 3 つの主題から、Figure 8 のような青年期後期の発達モデルが提案できる。本論文の知見や様々な先行研究 (e.g. 都筑, 1993; 1994; 谷, 2008) からも、青年期後期においては、時間的展望は否定的な態度から肯定的な態度へ、アイデンティティは低い感覚から高い感覚へという発達の方向性が明らかにされている。その際、時間的展望はアイデンティティの形成プロセスを促し、そのプロダクトとしてアイデンティティの感覚が高まり、その感覚によって時間的展望は変化していくと考えられる。アイデンティティ形成と時間的展望は相互に影響を与え合うとする Luyckx, Lens et al. (2010) や Shirai et al. (2012) の知見とも整合するモデルである。本論文においては主に第 3 章において、その各段階における時間的展望の様相や、時間的展望とアイデンティティの形成プロセスとの関連の様相などについて詳細に検討を行ってきた。

第 4 章において明らかとなった、死という人生の終点について考えることの影響は、青年期後期の発達に対して未来の上限という制限の認識が持つ意味を示唆している。死について考えることで時間的態度が肯定的になるという影響や、コミットメント形成プロセスが促されるという影響は、未来へと続く人生に時間的な制約があることを認識したために得られたものと思われる。またこうした影響が見られたのは、コミットメントを持っていない青年や、現在への意識が高い青年であった。未来や人生が有限であることへの意識が少ないために、何か 1 つの対象を選ぶことができずにコミットメントが持てなかったり、近視眼的に現在への意識が高くなっていたりすると考えられる。そうした青年が死という未来、ひいては人生の有限性を改めて意識することで、限られた時間を大切に感じたり、限られた中からコミットメント対象を選択しようとしたりし、時間的展望やアイデンティティの形成が進んでいくと考えられる。青年期においては未来という時間の重要性が指摘されてきたが (e.g. 白井, 1997), それは必ずしも、開かれた未来を描くことのみが重要であることを意味しているわけではない。場合によっては、時間的な制限の中でどう生きるの



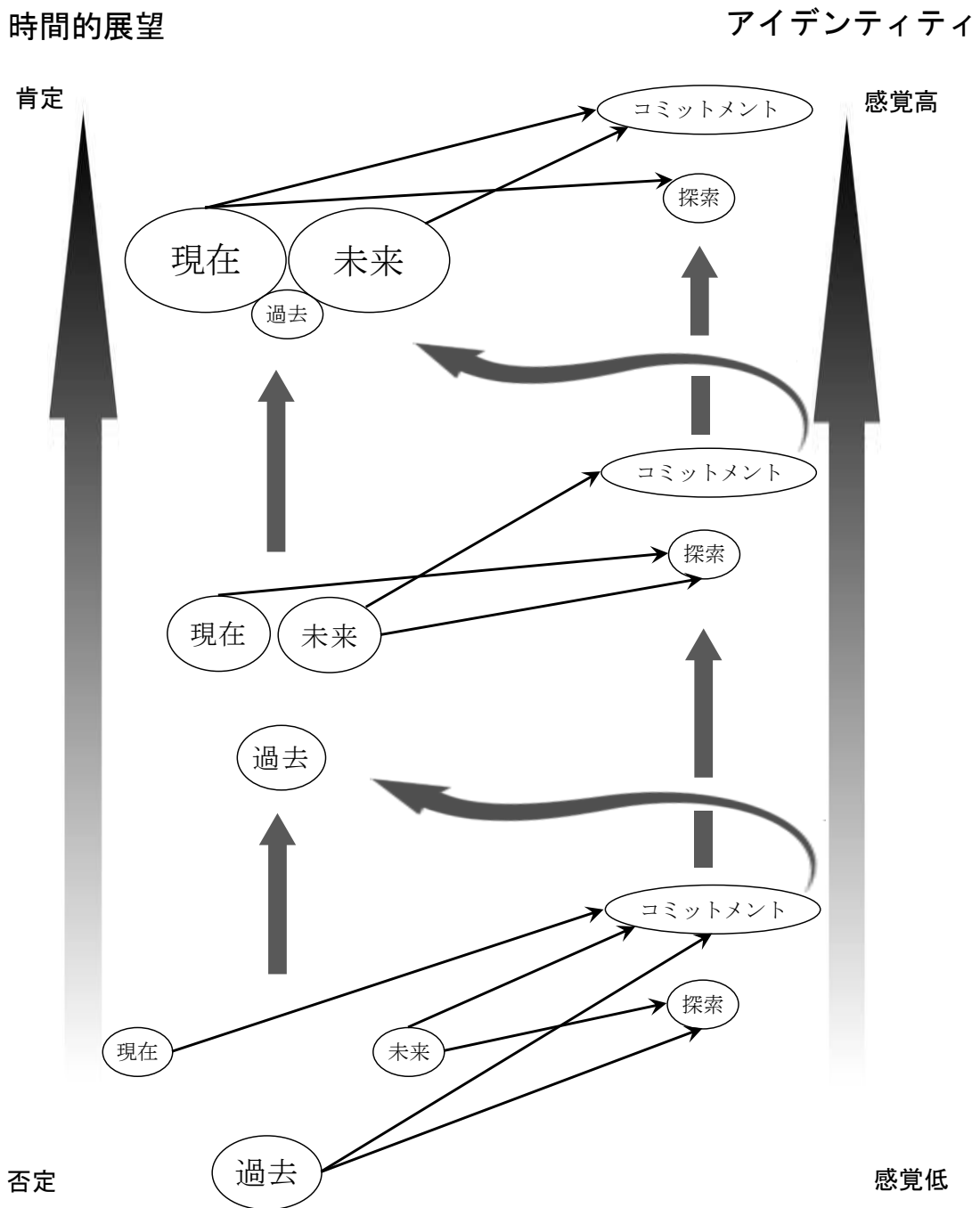


Figure 8. 本論文の知見に基づく青年期後期の発達モデル

かを描くことが、青年期後期の時間的展望やアイデンティティの発達にとって重要であることを、本論文における一連の知見は示唆している。

時間的展望およびアイデンティティの適応的な発達には、時間的な制限の意識を場合に  
 応じて自ら調整することが必要と思われる。有限性の認知を全く持てない場合には、コミ  
 ットメントの形成が困難であったり、肯定的な時間的態度を持てなかったりする一方、常

に時間的な制限を意識していれば、未来志向的に活力を持って生きていくのが困難なのは想像に難くない。時間的な制限を意識して何らかの決定を行ったり、意識せずに目の前のことに取り組んだりといったように、適宜青年自身が調整をしていくことで、青年期後期を適応的に生きていくことができると思われる。Zimbardo and Boyd (1999) も、状況などに応じて柔軟に時間的展望を切り替える心的能力が重要としている。そして未来や現在快樂、過去肯定が適度に高く、過去否定や現在運命論が低い状態をバランスのとれた時間的展望としている (Zimbardo & Boyd, 2008)。本論文の知見に基づけば、時間的な制限を適宜意識して各時間に対する展望を持つことも、バランスの取れた時間的展望の 1 つの構成要素と考えられる。そして、そのようなバランスの取れた時間的展望を持つことが、アイデンティティ形成、ひいては青年期後期の発達を促進すると思われる。

## 第2節 本論文の意義

本論文は、青年期の時間的展望とアイデンティティ形成に関する研究に対する意義と、青年期の支援に対する意義を持つと考えられる。以下では、それぞれの意義についての考察を行う。

### 1. 青年期の時間的展望とアイデンティティ形成に関する研究における意義

研究1および研究2において、時間的展望の認知的側面である時間的指向性の概念整理および新たな測定方法を提案できたことは、この後の時間的展望研究において意義があると思われる。先行研究においては、未来指向と自我同一性達成との関連が示されている一方(白井, 1997), 園田 (2003) や吉田・小熊・小倉 (1990), 木村 (1982) は、青年期においても現在指向で生きることの意義を述べている。こうした先行研究における知見の相違について、本論文において時間的指向性を時間的連続性と時間意識とに分け、過去、現在、未来のそれぞれの時間意識について検討できるようになったことで、矛盾なく統合することができる。白井 (1997) の知見では、時間的連続性があり、相対的に未来への意識が強いことが、自我同一性の達成と関わるとされていた。一方、園田 (2003) などの研究においては、時間的連続性については検討されておらず、また未来への意識の重要性についても併記されていることから、ここで議論されていたことは現在意識として捉え直すことで、白井 (1997) の知見とは矛盾しない。そして、白井 (1997) の知見では不十分であった現在に対する意識の側面の重要性、園田 (2003) などの知見では不十分であった時間的連続性の側面の重要性が、本研究の知見によって検討可能となった。

こうした方法論上の発展に加え、本研究では、各時間についての時間的展望がアイデンティティ形成のプロセスおよびプロダクトと関連することが明らかとなった。これまではアイデンティティが形成された結果としての側面であるアイデンティティ・ステータスと、未来に対する時間的展望との関連が明らかにされていた。一方、本研究ではアイデンティティの形成プロセスと、各時間に対する時間的展望との関連が明らかになり、より詳細に、アイデンティティ形成と時間的展望との関わりが示された。そして、そうした関連は、アイデンティティの形成がどの程度進んでいるかによって異なることも明らかとなり、青年がこの時期の発達課題をどのように乗り越えていくのかについてより詳細に明らかにできた点に意義があると考えられる。

さらに本研究は、これまでその関連や効果が主張されるばかりで実証されてこなかった、死という人生の終点までの展望を持つことの影響を実証した。研究 5 では、対照群や統制群も用いて、死についての視点を持つことが、独自に時間的態度を肯定的にする効果を持つことが実証された。そして、その効果の個人差について、特に発達的な視点から明らかとなった研究 6 や研究 7 は、青年期発達に死という視点がどのように関係するのか、その具体像を明らかにした点で意義があると考えられる。

## 2. 青年期の支援における意義

本論文で明らかとなった知見は、青年の支援を考える上でも意義がある。例えば、アイデンティティや時間的展望と関連が深いものとして進路選択とその支援が考えられる。本研究の知見に基づけば、アイデンティティ形成と関連の深い進路選択は、過去への意識の高さ、および過去の受容のできなさを起点としている可能性が考えられる。そのため、支援を考える場合には、過去の回想や、そうした回想に伴う過去の受容のできなさを大事にしていくこと、そして現在や未来に対する肯定的な展望を支えていくことが有用と考えられる。その他にも、目の前の青年のアイデンティティ形成の度合いに応じて、どの形成プロセスに傾倒することが必要なのか、そのプロセスと関連する時間的展望の様相から見極めたり、時間的展望に働きかけたりすることで、そうした青年のアイデンティティ形成、より納得のいく進路選択を支援することが可能と思われる。

死に関する問題にも、アイデンティティ形成や時間的展望の観点からアプローチすることが可能である。コミットメントや探索の状態によって、どのような顕在的、潜在的な死に対する態度を持っているのかについても本研究では示唆されている。特にコミットメントも探索もできていない青年は、自殺といった死に関わる問題と深い関係にある潜在的な死との連合が強いため、配慮をする必要があるだろう。また、コミットメントを持っていない青年に対しては、死という終点を踏まえた人生全体の視点を持たせることで、コミットメントの形成を促すことができる可能性がある。その際には、探索の状態によって効果的な考えさせ方を選ぶことが必要である。本論文で得られた知見は、デス・エデュケーションとしての発展の可能性も包含しており、よりよく青年期発達を促していく際の支援につなげていくことができると思われる。

### 第3節 本論文で残された課題と今後の展望

本論文には残された課題やいくつかの問題点も考えられるため、以下では今後の展望と共に論じる。

本論文において残された大きな課題の1つは、研究手法についてである。本論文において行われた研究1~7はいずれも横断調査、若しくは1か月を限度とした短期縦断実験を用いている。青年期における発達をより詳細に明らかにするためには、縦断調査を行うことが必要不可欠である。また、死を扱う実証的な研究の少なさから、本研究では実証性に重きを置いて、質問紙やコンピュータを用いた実験を中心に行ってきた。その際には、死について考えさせることで青年にどのような影響がみられるのかを検討し、その影響に基づいて青年期発達について議論を行ってきた。しかし青年は、一般的に実生活の中で死を考える機会が少ないとされている(田中・後藤・岩本・李・杉・金山・奥田・國次・芳原, 2001)。本論文における死について考えさせる課題は、そうした青年が自分自身の死について考えやすい工夫を施したものの、研究協力者の青年がどの程度現実味をもって死について考えていたかは不明である。むしろあまり現実的ではないが故に、肯定的な影響を持った可能性も考えられる。今後、より具体的な青年像、効果の様相について検討するために、面接調査などの質的研究法による検討も必要と考えられる。

本論文が残した大きな課題のもう1つは、研究参加者についてである。時間的展望やアイデンティティの形成は青年期を通じて行われると考えられるが、先進国における心理社会的モラトリアムが青年期後期の一般的傾向とされていること(下山, 1992)などから、本研究では主に青年期後期を対象とした。積極的な探索が可能な文脈で、死の概念の獲得と理解が十分であり、そして安全性を確保することのできる青年期後期においては、本研究で得られたような関連や効果が実証された。しかし、青年期前期にあたる中学生や、中期にあたる高校生の持つ文脈が、大学生や専門学生と異なるのは想像に難くない。今後は、理解の度合いや安全性に配慮しながら、青年期中期、前期へと対象を拡大し、青年期全体を通して時間的展望やアイデンティティの形成がどのように関わり合いながら進み、また死という終点を踏まえた人生全体の視点がそこにどのように関連するのかについて明らかにしていくことが課題である。その際には、何らかの疾病を抱える人など、日常生活において死のテーマと親近性のある個人も対象とするなど、より多くの参加者を対象として研究を行い、得られた知見をより精緻に一般化していくことが求められる。

さらに性差の検討についても今後行っていく必要がある。本論文では、実証的な検討を行うため、あるいは影響の個人差を検討するために、研究協力者をいくつかの群に分ける研究デザインを用いた。そのため、分析等の煩雑さを避けるためにも、性別でさらに研究協力者を分けての検討は行っていない。一方、時間的展望やアイデンティティは、自分を取り巻く文脈との相互作用によって形作られると考えられ、そうした文脈が性別によって異なることは想像に難くない。例えば時間的展望に関しては、男性の方が女性より広い将来展望を持つこと (白井, 1994c)、女性は結婚などいくつかの転機によって進路が変わる枝分かれ式の展望を持つこと (園田, 1989)、男性でみられる展望主義と肯定的な時間的展望との関連が女性ではみられないこと (白井, 1991) などが示されている。こうした差異が生じる一因として園田 (2007) は、男性は仕事、女性は家事といった伝統的な性役割を挙げており、男性は将来的な展望、女性は現在の展望を描きやすい文脈であることを指摘している。アイデンティティ形成に関しては、男性は個人内領域、女性は対人関係領域が重要であるといった議論 (Matteson, 1993) などがなされている。さらに、女性は男性よりも死に対する感受性が強い (松田, 1996) といった死に対する態度の性差も示されている。つまり、男性は仕事を主軸として未来展望を広げ、個人内領域を中心としたアイデンティティ形成を進める一方、女性は家庭を主軸として現在展望を豊かに、対人関係領域を中心にアイデンティティ形成を進めていくことが予想される。さらに終点を踏まえた人生全体の時間という視点は、男性よりも女性に強く働く可能性も考えられる。今後はこうした性差にまで踏み込んで、時間的展望とアイデンティティ形成について詳細に検討を行う必要がある。

研究手法、研究対象を広げ、より実証的な知見を積み重ねていくことに加え、本論文で得られた知見をもとにして実践的研究を行っていくことも必要である。進路選択やキャリア形成、アパシーや引きこもり、デス・エデュケーション等、時間的展望やアイデンティティ形成というテーマが、学校などの教育現場、臨床現場で果たす役割は大きい。実証された関連や効果に基づき、実践的な研究を行い、教育、臨床実践につなげていくことが今後の展望である。

## 引用文献

- 赤澤正人 (2004). デス・エデュケーションの学校現場における展開 生老病死の行動科学, 9, 75-82.
- Andretta, J.R. (2011). Time attitude profiles in adolescents: predicting differences in educational outcomes and psychological wellbeing. *Dissertation Abstracts International Section A: Humanities and Social Sciences*, 71, 3140.
- Andretta, J.R., Worrell, F.C., Mello, Z.R., Dixson, D.D., & Baik, S.H. (2013). Demographic group differences in adolescents' time attitudes. *Journal of Adolescence*, 36, 289-301.
- アルフォンス・デーケン (2001). 生と死の教育 岩波書店
- Attig, T. (1992). Person-centered death education. *Death Studies*, 16, 357-370.
- Bailis, L.A. & Kennedy, W.R. (1977). Effects of a Death Education Program upon Secondary School Students. *The Journal of Educational Research*, 71, 63-66.
- Beck, A. T., Weissman, A., Lester, D., & Trexler, L. (1974). The measurement of pessimism: The hopelessness scale. *Journal of Consulting Psychology*, 42, 861-865.
- Beiser, M., & Hyman, I. (1997). Refugees' time perspective and mental health. *American Journal of Psychiatry*, 154, 996-1002.
- Boniwell, I., Osin, E., Linley, P. A., & Ivanchenko, G. V. (2010). A question of balance: time perspective and well-being in British and Russian samples. *The Journal of Positive Psychology*, 5, 24-40.
- Boniwell, I., & Zimbardo, P. (2004). Balancing time perspective in pursuit of optimal functioning. In P.A. Linley and S. Joseph (Eds.), *Positive psychology in practice*. (pp. 165-179). New Jersey: John, Wiley & Sons.
- Bosma, H.A., & Kunnen, E.S. (2001). Determinants and Mechanisms in Ego Identity Development: A Review and Synthesis. *Developmental Review*, 21, 39-66.
- Carstensen, L.L. (2006). The influence of a sense of time on human development. *Science*, 312, 1913-1915.
- Carvalho, R.G.G. (2015). Future time perspective as a predictor of adolescents' adaptive behavior in school. *School Psychology International*, 36, 482-497.
- Chishima, Y., Murakami, T., Worrell, F. C., & Mello, Z. R. (in press). The Japanese version of the

Adolescent Time Inventory-Time Attitudes (ATI-TA) scale: Internal consistency, structural validity, and convergent validity. *Assessment*.

千島 雄太 (2015). 高校生における希望進路と時間的態度——日本語版青年時間的態度尺度 (ATAS-J) を用いて—— 日本発達心理学会第 26 回大会発表論文集, 378.

千島 雄太 (2016). 青年期における自己変容に対する志向性の発達——時間的展望の拡大と分化の観点から—— 青年心理学研究, 27, 129-139.

Chittaro, L., & Vianello, A. (2013). Time perspective as a predictor of problematic Internet use: A study of Facebook users. *Personality and Individual Differences*, 55, 989-993.

Cottle, T.J. (1967). The circle test: An investigation of perceptions of temporal relatedness and dominance. *Journal of Projective Techniques and Personality Assessment*, 31, 58-71.

Cottle, T.J. (1976). *Perceiving Time*. New York: John Wiley & Sons.

Crocetti, E., Rubini, M., & Meeus, W. (2008). Capturing the dynamics of identity formation in various ethnic groups: Development and validation of a three-dimensional model. *Journal of Adolescence*, 31, 207-222.

Cronbach, L.J. (1957). The two disciplines of scientific psychology. *American Psychologist*, 12, 671-684.

Daltrey, M.H. & Langer, P. (1984). Development and evaluation of a measure of future time perspective. *Perceptual and Motor Skills*, 58, 719-725.

デーケン, A. (編) (1986). 死を教える メヂカルフレンド社編集部 (編) 「叢書」死への準備教育 1 巻 メヂカルフレンド社

デーケン, A. (2001). 生と死の教育 岩波書店

Durlak, J.A. (1994). Changing death attitudes through death education. In A.R. Neimeyer (Ed.), *Death Anxiety Handbook* (pp. 243-260). Abingdon: Taylor & Francis.

海老根 理絵 (2009). 青年期における死に関する心理構造の多面的理解の試み——認知的側面に注目して—— 臨床心理学, 9, 771-783.

海老根 理絵 (2012). 臓器提供をテーマとした経験的デス・エデュケーションの有効性の検討 死生学研究, 17, 21-50.

Erikson, E.H. (1959). *Psychological issues: Identity and the life cycle*. New York: W.W.Norton.

(エリクソン, E.H. 小此木啓吾 (訳) (1973). 自我同一性——アイデンティティとライフ・サイクル—— 誠信書房)



- Erikson, E.H. (1963). *Childhood and Society (2nd Revised & Enlarged Edition)*. New York: Norton.  
(エリクソン, E.H. 仁科 弥生 (訳) (1977). 幼児期と社会 1 みすず書房)
- Erikson, E.H. (1968). *Identity and the life cycle*. Psychological issues Vol.1, No.1, Monograph 1.  
New York: International Universities Press.  
(エリクソン, E.H. 西平 直・中島 由恵 (訳) (2011). アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- Frank, L.K. (1939). Time perspective. *Journal of Social Philosophy: A Quarterly Devoted to a Philosophic Synthesis of the Social Sciences*, 4, 293-312.
- 藤原 芳朗 (2011). 死に関する意識の変化から主体的な生の意味を問う 川崎医療短期大学紀要, 31, 51-55.
- Garcia, J.A., & Ruiz, B. (2015). Exploring the role of time perspective in leisure choices: What about the balanced time perspective? *Journal of Leisure Research*, 47, 515-537.
- Goldrich, J.M. (1967). Study in time orientation: Relation between memory for past experience and orientation to future. *Journal of Personality and Social Psychology*, 6, 216-221.
- Greenberg, J., Pyszczynski, T., & Solomon, S. (1986). The causes and consequences of a need for self-esteem: A terror management theory. In R.E. Baumeister (Ed.), *Public self and private self* (pp. 189-212). New York: Springer-Verlag.
- Greene, A.L. (1986). Future-time perspective in adolescence: The present of things future revisited. *Journal of Youth and Adolescence*, 15, 99-113.
- Greenwald, A.G., Nosek, B.A., & Banaji, M.R. (2003). Understanding and using the Implicit Association Test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 197-216.
- Hankoff, L.D. (1975). Adolescence and the crisis of dying. *Adolescence*, 10, 373-389.
- 畑野 快・杉村 和美 (2014). 日本人大学生における日本版アイデンティティ・コミットメント・マネジメント尺度 (Japanese version of the Utrecht-Management of Identity Commitment Scale; U-MICSJ) の因子構造, 信頼性, 併存的妥当性の検討 青年心理学研究, 25, 125-136.
- 畑野 快・杉村 和美・中間 玲子・溝上 慎一・都筑 学 (2014). エリクソン心理社会的段階目録 (第5段階) 12項目版の作成 心理学研究, 85, 482-487.
- Hee, K.E., & Eunjoo, L. (2009). Effects of a death education program on life satisfaction and

- attitude toward death in college students. *Journal of Korean Academy of Nursing*, 39, 1-9.
- 日瀨 淳子・岡本 祐子 (2008). 中年期の時間的展望と精神的健康との関連——40 歳代, 50 歳代, 60 歳代の年代別による検討—— 発達心理学研究, 19, 144-156.
- 日瀨 淳子・齋藤 誠一 (2007). 青年期における時間的展望と出来事想起および精神的健康との関連 発達心理学研究, 18, 109-119.
- Hulbert, R.J., & Lens, W. (1988). Time and self-identity in later life. *International journal of aging and Human Development*, 27, 293-303.
- Hutchison, T.D., & Scierman, A. (1992). Didactic and experiential death and dying training: Impact upon death anxiety. *Death Studies*, 16, 317-330.
- 石田 美知 (2008). 看護学生の死生観構築を目指した教育の一考察 名古屋市立大学大学院人間文化研究科 (人間文化研究), 9, 111-126.
- 石井 僚 (2013). 青年期において死について考えることが時間的態度に及ぼす影響 教育心理学研究, 61, 229-238.
- 石井 僚 (2015a). 時間的連続性尺度の作成 青年心理学研究, 27, 39-47.
- 石井 僚 (2015b). 時間的指向性に関する概念整理の試み——時間意識尺度の作成—— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 62, 67-74.
- 石川 茜恵 (2014). 青年期における過去のとらえ方タイプから見た目標意識の特徴——時間的展望における過去・現在・未来の関連—— 発達心理学研究, 25, 142-150.
- 石坂 昌子 (2006). 青年期における死生観と人生観の関連 臨床死生学, 11, 34-42.
- Israeli, N. (1935). Distress in the outlook of Lancashire and Scottish unemployed. *Journal of Applied Psychology*, 19, 67-69.
- 伊藤 裕子・斎藤 文江 (2008). 思春期・青年期における死生観の発達 カウンセリング研究, 41, 3, 213-223.
- Janet, P. (1929). *L'Évolution psychologique de la personnalité*. Paris: Chahine.  
(ジャンネー, P. 関 計夫 (訳) (1955). 人格の心理的発達 慶應義塾大学出版会)
- Jankélévitch, V. (1966). *La Mort*. Paris: Editions Flammarion.  
(ジャンケレヴィッチ, V. 仲沢 紀雄 (訳) (1978). 死 みすず書房)
- Johansson, N., & Lally, T. (1990). Effectiveness of a death education program in reducing death anxiety of nursing students. *Omega*, 22, 25-33.
- Jung, H., Park, I.J., & Rie, J. (2015). Future time perspective and career decisions: The moderating

- effects of affect spin. *Journal of Vocational Behavior*, 89, 46-55.
- 神谷 俊次 (2010). 日誌法を用いた自伝的記憶研究 佐藤 浩一・越智 啓太・下島 裕美 (編) 自伝的記憶の心理学 (pp. 33-46) 北大路書房
- 金児 暁嗣 (1994). 大学生とその両親の死の不安と死観 人文研究, 46, 537-564.
- 柏尾 眞津子 (1998a). 青年期における時間的展望と対人志向性との関連 関西大学大学院人間科学:社会学・心理学研究, 48, 57-70.
- 柏尾 眞津子 (1998b). 青年の友人関係と時間的展望との関連 関西大学大学院人間科学:社会学・心理学研究, 49, 139-149.
- Kastenbaum, R. (1961). The dimensions of future time perspective: An experimental analysis. *Journal of Genetic Psychology*, 65, 203-218.
- 勝俣 暎史 (1995). 時間的展望の概念と構造 熊本大学教育学部紀要 (人文科学), 44, 307-318.
- 木村 敏 (1982). 時間と自己 中央公論新社
- Klineberg, S.L. (1967). Changes in outlook on the future between childhood and adolescence. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 187-191.
- Knight, K.H., & Elfenbein, M.H. (1993). Relationship of death education to the anxiety, fear, and meaning associated with death. *Death Studies*, 17, 411-425.
- 小松 良子 (2001). よりよく生きるために——命の学習を通して—— 学校保健のひろば, 23, 46-49.
- 近藤 卓 (2002). いのちを学ぶ・いのちを教える 大修館書店
- 河野 莊子 (2003). 青年期事例における時間的展望の現れ方とその変化——不登校を主訴として来談した2事例をもとに—— 心理臨床学研究, 21, 374-385.
- Kroger, J., Martinussen, M., Marcia, J.E. (2010). Identity status change during adolescence and young adulthood: A meta-analysis. *Journal of Adolescence*, 33, 683-698.
- Kubler-Ross, E. (1974). *Questions and Answers on Death and Dying: A Memoir of Living and Dying*. New York: Scribner.
- (キューブラー・ロス, E. 川口 正吉 (訳) (1975). 死ぬ瞬間の対話 読売新聞社)
- Kurlychek, R.T. (1977). Death education: some considerations of purpose and rationale. *Educational Gerontology: An International Quarterly*, 2, 43-50.
- Laghi, F., Baiocco, R., Liga, F., Guarino, A., & Baumgartner, E. (2013). Identity status differences

- among Italian adolescents: Associations with time perspective. *Children and Youth Services Review*, 35, 482-487.
- Lewin, K. (1951). *Field theory in social science*. New York: Harper & Brothers.
- (レヴィン, K. 猪股 佐登留 (訳) (1979). 社会科学における場の理論 (増補版) 誠信書房)
- Luyckx, K., Goossens, L., & Soenens, B. (2006). A developmental contextual perspective on identity construction in emerging adulthood: Change dynamics in commitment formation and commitment evaluation. *Developmental Psychology*, 42, 366–380.
- Luyckx, K., Goossens, L., Soenens, B., & Beyers, W. (2006). Unpacking commitment and exploration. *Journal of Adolescence*, 29, 361–378.
- Luyckx, K., Lens, W., Smits, I., & Goossens, L. (2010). Time perspective and identity formation: Short-term longitudinal dynamics in college students. *International Journal of Behavioral Development*, 34, 238-247.
- Luyckx, K., Schwartz, S. J., Berzonsky, M. D., Soenens, B., Vansteenkiste, M., Smits, I., & Goossens, L. (2008). Capturing ruminative exploration: Extending the four-dimensional model of identity formation in late adolescence. *Journal of Research in Personality*, 42, 58-82.
- Maglio, C.J., & Robinson, S.E. (1994). The effects of death education on death anxiety: a meta-analysis. *Omega*, 29, 319-335.
- Marcia, J.E. (1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- 松田 信樹 (1996). 青年の死の不安を規定する要因についての検討——性差, 死別経験, 時間的展望の観点から—— 人間科学研究, 4, 57-65.
- 松元 千草 (2008). 青年期における自我発達と死生観形成過程との関連 心理臨床センター 紀要, 4, 17-31.
- 松下 智子 (2007). ネガティブな経験の意味づけ方と自己感情の関連 ナラティブ・アプローチの視点から 心理臨床学研究, 25, 206-216.
- Matteson, D.R. (1993). Differences within and between genders: A challenge to the theory. In J.E. Marcia, A.S. Waterman, D.R. Matteson, S.L. Archer, & J.L. Orlofsky (Eds.), *Ego identity: A handbook for psychosocial research* (pp. 69-110). New York: Springer-Verlag.
- Mello, Z.R., Worrell, F.C., & Andretta, J.R. (2009). Variation in how frequently adolescents think

about the past, the present, and the future in relation to academic achievement. *Research on Child and Adolescent Development*, 2, 173-183.

Minkowski, E. (1933). *Le temps vécu*. Paris: J. L. L. d'Artrey.

(ミンコフスキー, E. 中江 育生・清水 誠・大橋 博司 (訳) (1972, 1973). 生きられる時間 1・2 みすず書房)

溝上 慎一 (2008). 自己形成の心理学——他者の森を駆け抜けて自己になる—— 世界思想社

溝上 慎一 (2009). 「大学生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討 京都大学高等教育研究, 15, 107-118.

溝上 慎一・中間 玲子・畑野 快 (2016). 青年期における自己形成活動が時間的展望を介してアイデンティティ形成へ及ぼす影響 発達心理学研究, 27, 148-157.

水間 玲子 (2002). 自己形成意識の構造について——これまでの研究のまとめと下位概念間の関係の検討—— 奈良女子大学文学部研究年報, 46, 131-146.

森田 真季 (2007). 死生観とアイデンティティ, ストレッサー, コーピングとの関連——大学生を対象に—— 心理臨床学研究, 25, 505-515.

村田 直子 (2008). 自己の時間的連続性に関する臨床心理学的考察 大阪大学教育学年報, 13, 55-65.

村田 直子 (2009). 関係性から見た時間的連続性についての考察——心理療法における時間と他者—— 大阪大学教育学年報, 14, 51-61.

内閣府 (2015). 平成 27 年版自殺対策白書

中間 玲子 (2011). 青年の時間 子安 増生・白井 利明 (編) 発達科学ハンドブック 第 3 巻 時間と人間 (pp. 98-112) 新曜社

中間 玲子・杉村 和美・畑野 快・溝上 慎一・都筑 学 (2015). 多次元アイデンティティ発達尺度 (DIDS) によるアイデンティティ発達の検討と類型化の試み 心理学研究, 85, 549-559.

仲村 照子 (1994). 子どもの死の概念 発達心理学研究, 5, 61-71.

Nock, M.K., Park, J.M., Finn, C.T., Deliberto, T.L., Dour, H.J., & Banaji, M.R. (2010). Measuring the suicidal mind: implicit cognition predicts suicidal behavior. *Psychological Science*, 21, 511-517.

Noppe, I. (2007). Life span issues and death education. In E. Balk (Ed.), *Handbook of Thanatology*:

- The Essential Body of Knowledge for the Study of Death, Dying, and Bereavement* (pp. 337-343). Oxford: Routledge.
- Nurmi, J.E. (1989). Development of orientation to the future during early adolescence: A four-year longitudinal study and two cross-sectional comparisons. *International Journal of Psychology*, 24, 195-214.
- Nurumi, J.E. (1991). How do adolescents see their future? A review of the development of future orientation and planning. *Developmental Review*, 11, 1-59.
- Nuttin, J.R. (1984). *Motivation, planning, and action: A relational theory of behavior dynamics*. Hillsdale: Erlbaum.
- Nuttin, J., & Lens, W. (1985). *Future time perspective and motivation: Theory and research, method*. Leuven: Leuven University Press, and Hillsdale: Erlbaum.
- 尾方 綾・岡本 祐子 (2012). 青年期における死の不安と「死」・「生」・「自己」のイメージ 広島大学心理学研究, 12, 137-154.
- 奥田 雄一郎 (2001). 時間的展望研究における課題とその可能性——近年の実証的・理論的研究のレビューにもとづいて—— 中央大学大学院研究年報, 31, 333-346.
- 奥田 雄一郎 (2002a). 大学生の過去展望に関する研究 (I) ——大学生は過去の出来事どのように現在と関連づけているのか—— 日本発達心理学会第13回大会発表論文集, 325.
- 奥田 雄一郎 (2002b). 時間的展望研究は人間の過去に対していかにアプローチするか——記憶研究との対比から—— 中央大学大学院研究年報, 32, 167-179.
- 大橋 靖史・鈴木 明人 (1988). 非行少年の時間的展望に関する研究 犯罪心理学研究 (特別号), 26, 4-5.
- 大石 郁美・岡本 祐子 (2009). 青年期における時間的展望とレジリエンスとの関連 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 8, 43-53.
- 尾崎 仁美・上野 淳子 (2001). 過去の成功・失敗経験が現在や未来に及ぼす影響——成功・失敗経験の多様な意味—— 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, 27, 63-87.
- Peal, R.L., Handal, P.J., & Gilner, F.H. (1981). A group desensitization procedure for the reduction of death anxiety. *Omega*, 12, 61-70.
- Piaget, J. (1969). The child's conception of time. (A. J. Pomerans, Trans.) London: Routledge & Kegan Paul. (Original work published 1946)

- Piaget, J. (1970). *L'épistémologie génétique*. Paris: Presses Universitaires de France.  
(ピアジェ, J. 滝沢 武久 (訳) (1972). 発生的認識論 白水社)
- Pluck, G., Lee, K.H., Lauder, H. E., Fox, J. M., Spence, S.A., & Parks, R.W. (2008). Time perspective, depression, and substance misuse among the homeless. *Journal of Psychology, 142*, 159-168.
- Poole, M.E., & Cooney, G.H. (1987). Orientations to the future: A comparison of adolescents in Australia and Singapore. *Journal of Youth and Adolescence, 16*, 129-151.
- Quinn, P.K., & Reznikoff, M. (1985). The relationship between death anxiety and the subjective experience of time in the elderly. *International journal of aging and human development, 21*, 197-210.
- Rappaport, H., Enrich, K., & Wilson, A. (1985). Relation between ego identity and temporal perspective. *Journal of Personality and Social Psychology, 48*, 1609-1620.
- Rasmussen, J. E. (1964). Relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. *Psychological Reports, 15*, 815-825.
- Rector, N.A., Kamkar, K., & Riskind, J.H. (2008). Misappraisal of time perspective and suicide in the anxiety disorders: The multiplier effect of looming illusions. *International Journal of Cognitive Therapy, 1*, 69-79.
- 佐藤 裕樹・岡本 祐子 (2010). 大学生におけるアイデンティティの確立と時間的展望——TAT 物語にみられる時間的統合の観点から—— 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 9, 54-66.
- Schuitema, J., Peetsma, T., & van der Veen, I. (2014). Enhancing student motivation: A longitudinal intervention study based on future time perspective theory. *Journal of Educational Research, 107*, 467-481.
- Schwartz, S.J. (2007). The structure of identity consolidation: Multiple correlated constructs of one superordinate construct? *Identity: An International Journal of Theory and Research, 7*, 27-49.
- 下山 晴彦 (1992). 大学生のモラトリアムの下位分類の研究——アイデンティティの発達との関連で—— 教育心理学研究, 40, 121-129.
- 下島 裕美・蒲生 忍 (2009). 医療倫理と教育 (2) ——五色カード法による死にゆく過程の疑似体験 (Guided Death Experience) —— 杏林医学会雑誌, 40, 2-7.
- 下島 裕美・佐藤 浩一・越智 啓太 (2012). 日本版 Zimbardo Time Perspective Inventory (ZTPI)

- の因子構造の検討 パーソナリティ研究, 21, 74-83.
- 白井 利明 (1985). 児童期から青年期にかけての未来展望の発達 大阪教育大学紀要 (第 IV 部門), 34(1), 61-70.
- 白井 利明 (1991). 青年期から中年期における時間的展望と時間的信念の関連 心理学研究, 62, 260-263.
- 白井 利明 (1994a). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, 65, 54-60.
- 白井 利明 (1994b). 人間的自立のための「死の準備教育」の視点——学校教育において——生活指導研究, 11, 77-92.
- 白井 利明 (1994c). 時間的展望の生涯発達に関する研究の到達点と課題 大阪教育大学紀要 (第 IV 部門), 42(2), 187-216.
- 白井 利明 (1995). 時間的展望と動機づけ——未来が行動を動機づけるのか—— 心理学評論, 38, 194-213.
- 白井 利明 (1997). 時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房
- 白井 利明 (2001a). 青年の進路選択に及ぼす回想の効果——変容確認法の開発に関する研究 (I) —— 大阪教育大学紀要 (第 IV 部門), 49(2), 133-157.
- 白井 利明 (2001b). 希望の心理学 講談社.
- 白井 利明 (2003). 大学から社会への移行における時間的展望の再編成に関する追跡的研究 (V) ——卒業前後 4 年間のアイデンティティと時間的展望の規定関係—— 大阪教育大学紀要 (第 IV 部門), 52, 23-31.
- 白井 利明 (2008). 時間的展望と自伝的記憶 佐藤 浩一・越智 啓太・下島 裕美 (編) 自伝的記憶の心理学 (pp. 138-148) 北大路書房
- 白井 利明 (2010). 過去をくぐって未来を構想しキャリア形成を促す回想展望法の開発と活用——心理検査との併用と世代間継承の考察—— 大阪教育大学紀要 (教育科学), 59, 97-113.
- Shirai, T., Nakamura, T., & Katsuma, K. (2012). Time orientation and identity formation: Long-term longitudinal dynamics in emerging adulthood. *Japanese Psychological Research*, 54, 274-284.
- Shostrom, E.L. (1968). Time as an integrating factor. In C. Buhler & F. Massarik (Eds.), *The course of human life: A study of goals in the humanistic perspective*. (pp. 351-359). New York: Springer.
- Simons, J., Vansteenkiste, M., Lens, W., & Lacante, M. (2004). Placing motivation and future time



- perspective theory in a temporal perspective. *Educational Psychology Review*, 16, 121-139.
- 園田 直子 (1989). 時間的展望における接近的及び回避的 “possible selves” の認知 九州帝  
京短期大学紀要, 3, 1-16.
- 園田 直子 (2003). 大学生の進路決定と現在指向 久留米大学心理学研究, 2, 63-70.
- Sorrentino, R.M. (1973). An extension of theory of achievement motivation to the study of emergent  
leadership. *Journal of Personality and Social Psychology*, 26, 356-368.
- Stephen, J., Fraser, E., & Marcia, J.E. (1992). Moratorium-achievement (MAMA) cycles in lifespan  
identity development: Value orientations and reasoning system correlates. *Journal of  
Adolescence*, 15, 285-300.
- Stolarski, M., Matthews, G., Postek, S., Zimbardo, P.G., & Bitner, J. (2014). How we feel is a matter  
of time: Relationships between time perspectives and mood. *Journal of Happiness Studies*, 15,  
809-827.
- Stolarski, M., Vowinckel, J., Jankowski, K.S., & Zajenkowski, M. (2016). Mind the balance, be  
contented: Balanced time perspective mediates the relationship between mindfulness and life  
satisfaction. *Personality and Individual Differences*, 93, 27-31.
- 杉本 英晴・速水 敏彦 (2012). 大学生における仮想的有能感と就職イメージおよび時間的展  
望 発達心理学研究, 23, 224-232.
- 杉村 和美 (2005). 関係性の観点から見たアイデンティティ形成における移行の問題 梶田  
叡一 (編) 自己意識研究の現在 2 (pp. 77-100) ナカニシヤ出版
- 杉村 和美 (2008). アイデンティティ 日本児童研究所 (編) 児童心理学の進歩 2008 年版  
Vol. 47 (pp. 112-137) 金子書房
- 砂田 良一 (1979). 自己像との関係からみた自我同一性 教育心理学研究, 27, 215-220.
- 鈴木 康人 (2004). 死を意識することの意義とそれに関わる教育の可能性——スピリチュア  
リティという視座から—— 三重大学教育学研究科修士論文 (未公刊)
- Sword, R.M., Sword, R.K.M., Brunskill, S.R., & Zimbardo, P.G. (2014). Time perspective therapy:  
A new time-based metaphor therapy for PTSD. *Journal of Loss & Trauma*, 19, 197-201.
- Taber, B.J., & Blankemeyer, M.S. (2015). Time perspective and vocational identity statuses of  
emerging adults. *Career Development Quarterly*, 63, 113-125.
- 田井 康雄 (2002). 道徳教育におけるデス・エデュケーションの意義 教育学・心理学論叢, 2,  
3-20.

- 高瀬 明子・平井 啓 (1999). 死生観と時間的信念の関連について 大阪大学臨床老年行動学  
年報, 4, 9-17.
- 竹田 純郎 (1997). なぜ、いま死生学なのか 竹田 純郎・森 秀樹(編) 死生学入門 (pp. 3-11)  
ナカニシヤ出版
- 田中 愛子・後藤 政幸・岩本 晋・李 恵英・杉 洋子・金山 正子・奥田 昌之・國次 一郎・  
芳原 達也 (2001). 青年期および壮年期の「死に関する意識」の比較研究 山口医学, 50,  
697-704.
- 丹下 智香子 (1995a). 青年期における死生観と心理的発達 名古屋大学教育學部紀要 (教育  
心理学科), 42, 219-220.
- 丹下 智香子 (1995b). 死生観の展開 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 42, 149-156.
- 丹下 智香子 (1999). 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検  
討 心理学研究, 70, 327-332.
- 丹下 智香子 (2004). 青年前期・中期における死に対する態度の変化 発達心理学研究, 15,  
65-76.
- 谷 冬彦 (1998). 青年期における基本的信頼感と時間的展望 発達心理学研究, 9, 35-44.
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造——多次元自我同一性尺度 (MEIS) の  
作成—— 教育心理学研究, 49, 265-273.
- 谷 冬彦 (2008). 自我同一性の人格発達心理学 ナカニシヤ出版
- Teahan, J.E. (1958). Future time perspective, optimism, and academic achievement. *Journal of  
Abnormal and Social Psychology*, 57, 379-380.
- 都筑 学 (1982). 時間的展望に関する文献的研究 教育心理学研究, 30, 73-86.
- 都筑 学 (1993). 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, 41, 40-48.
- 都筑 学 (1994). 自我同一性地位による時間的展望の差異——梯子評定法を用いた人生のイ  
メージについての検討—— 青年心理学研究, 6, 12-18.
- 都筑 学 (1999). 大学生の時間的展望——構造モデルの心理学的検討—— 中央大学出版部
- 都筑 学 (2007). 時間的展望の理論と課題 都筑 学・白井 利明 (編) 時間的展望研究ガイ  
ドブック (pp. 11-28) ナカニシヤ出版
- 都筑 学 (2008). 小学校から中学校への学校移行と時間的展望——縦断的調査にもとづく検  
討—— ナカニシヤ出版
- 都筑 学 (2011). 時間的展望の発達 子安増生・白井 利明 (編) 発達科学ハンドブック 第

- 3 卷 時間と人間 (pp. 293-305) 新曜社
- 都筑 学・白井 利明 (2007). 時間的展望研究ガイドブック ナカニシヤ出版
- 魚谷 雅広 (2002). ハイデガーにおける死と自己の問題——「存在と時間」を中心に—— 哲学・思想論叢, 20, 13-23.
- Vowinckel, J., Westerhof, G.J., Bohlmeijer, E., & Webster, J. (2015). Flourishing in the now: Initial validation of a present-eudaimonic time perspective scale. *Time & Society*. Advance online publication. doi: 10.1177/0961463X15577277
- Wallace, M. (1956). Future time perspective in schizophrenia. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 52, 240-245.
- 渡邊 恵子・赤嶺 淳子 (1996). 大学生のアイデンティティ地位・充実感・時間的展望——学年差・性差の検討—— 人間研究, 32, 25-35.
- Wong, W. (2009). The growth of death awareness through death education among university students in Hong Kong. *Omega*, 59, 113-128.
- Worrell, F. C., & Mello, Z. R. (2007). Reliability and validity of Zimbardo Time Perspective Inventory scores in academically talented adolescents. *Educational and Psychological Measurement*, 67, 487-504.
- Worrell, F.C., Mello, Z.R., & Buhl, M. (2013). Introducing English and German versions of the Adolescent Time Attitude Scale (ATAS). *Assessment*, 20, 496-510.
- やまだ ようこ (2000). 人生を物語ることの意味——なぜライフストーリー研究か？—— 教育心理学年報, 39, 146-161.
- 山本 ちか (2011). 高校生の時間的展望と自己評価の関連——全体的自己価値, 具体的側面の自己評価, 具体的側面の重要度の観点から—— 名古屋文理大学紀要, 11, 1-9.
- 山本 奨 (2008). 時間的展望の変化に見る不登校の経過・回復過程——高校生事例による検討—— 心理臨床学研究, 26, 290-301.
- 横井 優子・川本 恵津子 (2008). 過去への態度から自己をとらえる 岡田 努・榎本 博明(編) 榎本 博明・岡田 努・下斗 米淳 (監修) 自己心理学: 5 パーソナリティ心理学へのアプローチ (pp. 26-47) 金子書房
- 吉田 昭久・小熊 均・小倉 美智子 (1990). Time Perspective と Personality との関連Ⅷ——Time Perspective の心的構造—— 茨城大学教育学部紀要 (人文・社会科学, 芸術), 39, 57-73.
- Zimbardo, P., & Boyd, J. (1999). Putting time in perspective: A valid, reliable individual-differences

metric. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 1271-1288.

Zimbardo, P.G., & Boyd, J.N. (2008). *The time paradox: The new psychology of time that will change your life*. New York: Free Press.

## 謝辞

本論文を作成するにあたり、非常に多くの方々にご支援頂きました。

本論文執筆の原点は、三重大学の学部時代にさかのぼります。私の拙い考えを大切にしてくれ、研究の土俵に乗せて頂いた、当時の指導教官である中西良文先生には、名古屋大学進学後も折に触れてご指導頂きました。本当にありがとうございました。また、同じく三重大学の宮地信弘先生には、専門分野が異なるにも関わらず、幅広い視点からお話を頂くと共に、論理的な文章の書き方について懇切丁寧にご指導頂きました。記して感謝申し上げます。

個々の研究の構想や執筆段階においても多くの方々にご支援頂きました。三重大学時代には、中西ゼミをはじめ学校教育講座の皆様、名古屋大学時代には氏家研究室をはじめ心理発達科学専攻の皆様、貴重なご意見を頂きました。特に、梅本貴豊さん（現所属：九州女子大学）、田中健史朗さん（現所属：山梨大学）、大久保諒さん、玉井颯一さん、解良優基さん、二村郁美さん、那須秀行さん（現所属：児童養護施設松風荘）、松井秀徳さん（現所属：玉城町立有田小学校）には、貴重なご意見や議論の時間を頂くと共に、様々な面でご支援頂きました。そして香川大学の岡田涼先生には、三重大学時代から現在に至るまで、いつも温かくご指導、ご支援頂きました。本当にありがとうございました。

時間的展望の研究を進めていくにあたっては、大阪教育大学の白井利明先生、中央大学の都筑学先生に多くのご助言、ご支援を頂きました。個別にご相談に応じて頂いたことに加え、国内外の研究者とのつながりを持たせて頂いたり、学会発表の機会を頂いたり、本当にありがとうございました。また、筑波大学の千島雄太さん、立正大学の石川茜恵さん、株式会社アドバンテッジリスクマネジメントの吉田未来さんにも、たくさんのご助言とご支援を頂きました。ありがとうございました。また、私の拙い学会発表に興味を持って頂き、アイデンティティ研究に関するご指導、ご助言を頂いた広島大学の杉村和美先生に、心より感謝申し上げます。

本論文における調査や実験へのご協力、協力者の募集に関しても、多くの先生方のお力添えを頂きました。名古屋大学教育発達科学研究科の窪田由紀先生、清河幸子先生、濱家徳子さん、山脇望美さん、前川由未子さん、三重大学の中西良文先生、日本福祉大学の遠藤秀紀先生、岡崎女子大学の小原倫子先生、奈良教育大学の中山留美子先生、解良優基さん、香川大学の岡田涼先生、鹿児島大学の島義弘先生、北海道大学の太田和夫先生、四日

市大学の齋藤信先生，神戸親和女子大学の松本麻友子先生，久留米大学の浅野良輔先生，九州女子大学の梅本貴豊先生，山梨大学の田中健史朗先生，記して感謝致します。調査や実験にご協力頂いた学生の皆様にも，感謝申し上げます。さらに，統計分析に関するご相談に何度も丁寧に応じて頂いた名古屋大学の石井秀宗先生，尺度の翻訳版の作成等でご協力頂いた同じく名古屋大学の高井次郎先生，高松礼奈さんに，心より感謝致します。

そして本論文の主査であり，指導教官である氏家達夫先生には，研究活動にとどまらず，5年間の大学院生活の様々な面においてご指導，ご支援頂きました。研究については，構想段階から分析，そして論文執筆に至るまで，全ての過程において多大なるお時間を割いてご指導頂きました。氏家先生のお言葉や研究等に向かう姿勢から多くのことを感じ，考え，学ぶことができたと思っております。心より感謝申し上げます。また，本論文の審査過程において，名古屋大学の平石賢二先生，河野荘子先生には，副査として貴重なご意見とご助言を賜りました。厚く御礼申し上げます。

さらに，名古屋大学の安田道子先生，本城秀次先生（現所属：ささがわ通り心・身クリニック），中谷素之先生，金子一史先生，三重大大学の松浦均先生，岡崎女子大学の小原倫子先生，そして家族には，大学院での研究や生活を様々な面から支えて頂き，感謝の念に堪えません。本論文を作成するにあたり私を支えて下さった全ての皆様に，厚く御礼申し上げます。

本当にありがとうございました。

2017年3月

石井 僚